

〔研究ノート〕

## 経済成長理論 再訪

(ii) トービンとスワンの経済成長モデル

蘇 畑 卓 郎

前稿で見たように、現代経済成長理論のスターティング・ボードを樹立したのはハロッド＝ドーマーであるが、彼等が導き出した結論は「経済がある一定不変の成長率で持続的に成長する可能性、すなわち、経済が恒常成長軌道上を進む可能性は偶然に依拠し、もしそれが実現したとしてもその均衡は極めて不安定である」というものであった。しかし、この均衡の不安定性（ナイフ・エッジ均衡）は長期理論たる成長理論を短期理論の枠組を用いて構築するという欠陥に起因するとして、本来的な長期理論の枠組たる新古典派的アプローチによって安定的な恒常成長軌道の存在を論証したのがソローであった。

このソローの業績に相前後してトービンとスワンとの各々独自の貢献がなされているが、この両者の成長理論モデルは前三者のものほどには注目されてこなかったようである。その理由は現代経済成長理論の基本的骨格が前三者の業績によって十分明白にされているから、というものであろう。

しかしながら、経済成長における貨幣的要因の意義を重視するトービンと、リカードの成長理論をも包含する広い視点、並びに《資本概念》への強いこだわりと深い洞察とを示しているスワンの業績も看過することのできない重要な意義を持っているように思われる。本稿ではまずトービンの「動学的集計モデル」（1955）と「貨幣と経済成長」（1965）を、ついでスワンの「経済成長と資本蓄積」（1956）を取り上げる。

## I. ジェームス・トービンの経済成長モデル (i)

1. ここですでに取り上げるトービンの「*動学的集計モデル*」<sup>(註1)</sup>の特徴は、上述のように、成長とその制約要因としての貨幣の關係に注目して、極めて独創的な《循環的振動の理論》とでも称すべき成長モデルを構築しているところにある。ハロッド = ドーマーとは違って、以下に詳述するように、資本-産出量比率 [資本係数] の可変性という長期理論的前提を置くにもかかわらず、貨幣的要因を導入することによってトービン-モデルはソローや後述のスワンの純然たる新古典派モデルに較べて短期的性格を有するものとなっており、それだけ説得力を増しているが、しかしその点で理論構成としてはハロッド = ドーマーとソロー = スワンとの中間的位置に位するように思える。

さて、このトービン-モデルは「4個の建築用ブロック」によって構築される。(i) 貯蓄関数；(ii) 生産関数；(iii) 資産選好；(iv) 労働供給条件がそれである。順次、表記すれば以下のようになる。

ただし、 $K$  = 当期の資本 (財) ストック、 $Y$  = 当期の産出量、 $S$  = 当期の貯蓄、 $N$  = 当期の労働投入量、 $M$  = 当期の貨幣供給量、 $p$  = 物価水準、 $W$  = 当期の実質資産 (富) ストック、 $w$  = 実質賃金、 $r$  = 実質資本 (財) 収益率、 $t$  = 時間 である。

論文の表題「*動学的集計モデル*」が含意するように、トービンは筆者が問題視する《集計的資本量》なる概念には全く疑念を抱く様子はなく、当初から一貫して生産物 = 消費財 = 資本財というような単一財経済モデルを扱っている。従って、トービンに関しては資本概念問題について特に吟味すべき点はないことになる。残されているのは、このような単純なモデルの現実妥当性の如何という、あらゆるマクロ経済成長モデルに固有の課

題である。

$$(1) \quad \dot{K} = S(Y)$$

当期の投資＝貯蓄を表わすこの (1) について留意すべきは、これはトービンにおいてはハロッド＝ドーマーにおけるような、ケインズの生産物市場（国民所得）の「事前的な」均衡条件式ではなく、常時成立する需給均衡を表わす恒等式であるという点である。ということは、ソローと同様、市場メカニズム（利率を含む）価格の需給調整機能によって生産物市場が常にクリアーにされるとの新古典派的前提が置かれていることになる。

$$(2) \quad Y = P(K, N)$$

この生産関数については「規模に関する収穫不変」＝「関数の1次同次性」という常套の仮定が付与されるが、ハロッド＝ドーマーとは異なって生産係数の固定性の仮定は外されるから、競争的市場メカニズムによって次の関係が成立する。すなわち、実質賃金＝労働の限界生産性、資本賃貸料（利潤率）＝資本の限界生産性である。

$$(3) \quad w = P_N(K, N)$$

$$(4) \quad r = P_K(K, N)$$

トービンの成長モデルをハロッド＝ドーマーやソロー、また後述のスワン等のモデルに対して際立せるものは、資産選好の導入による貨幣的要因の重視であるが、それは以下の (5)、(6) によって表示される。

$$(5) \quad W = K + \frac{M}{p}$$

$$(6) \quad \frac{M}{p} = L(K, r, Y); L_k > 0, L_r < 0, L_Y > 0$$

この資産選好関数については一層の留意が必要である。論証を簡潔・単純化するためであろうが、まず、ここでの貨幣の定義は通常のものとは異なり、「 $M = \text{流通貨幣} + \text{政府債務} + \text{金ストック}$ 」とされ、私的債務たる預金通貨は含まれない。従って、民間銀行による信用創造は行われず、貨幣の増減はただ政府予算の不足あるいは余剰によってのみもたらされるものとされる。

さらに、ここでは貨幣の自己利子率 $=0$ と仮定されている。換言すれば、貨幣（さらに政府証券および金）の保有はそれ自体によっては利子を生ずることはないものと仮定されるということである。それでは貨幣の資産需要の根拠は何かというと、それは物価下落への期待であり、期待物価下落率 $[-\dot{p}_e / p]$ こそが貨幣1単位当たりの期待収益率であるということになる。

(6)の右辺は言うまでもなく流動性選好関数であるが、ケインズのそれとはやや異なっていて、 $L_k > 0$ が含まれている。これは資本収益率が一定であれば、資産保有者たちは自らの資産増分の一部を資本形態で、一部を貨幣形態で保有しようと望むことを意味する。 $L_Y > 0$ は取引残高需要であり、 $L_r < 0$ は資本収益率の上昇による貨幣保有から資本保有への転換を意味する。

(6)では資本収益率も物価も変動しないものと想定されているが、それにもかかわらず、貨幣の資産需要が存在するとされるのは単にリスク分散の考慮によるものと看做されている。

ところで、資産市場の均衡条件は

実質資産供給＝実質資産需要

であるから

$$(\text{資本供給} - \text{資本需要}) + (\text{実質貨幣供給} - \text{実質貨幣需要}) = 0$$

故に

資本供給＝資本需要 $\Leftrightarrow$ 実質貨幣供給＝実質貨幣需要

であり、そのため上の (6) は単に貨幣市場だけの均衡条件ではなく、資産市場全体の均衡条件をも意味する。従って、Mを所与の外生変数とすれば、(6) を満たす均衡物価水準  $p = p_0$  の決定が資産市場全体の均衡、すなわち「ポートフォリオ・バランス」を決定することになる。

ところで、もしも資産保有者全体の動向が貨幣から資本への乗り換えであるならば  $\dot{p} > 0$  であり、反対の場合には  $\dot{p} < 0$  であるから、ポートフォリオ・バランスの条件は当然  $\dot{p} = 0$  である。

最後に上記 (iv) の労働供給条件については、トーピンは基本的には「貨幣賃金の非弾力性」というケインズ以来の制度的制約要因を重視するが、しかし、これはある雇用水準  $N_d$  以下では下方に弾力的となり、完全雇用水準  $N_i$  以上では上方に弾力的になると想定している。要するに、極度の不況時には労働者は貨幣賃金切り下げを容認し、反対の場合には切り上げを要求するが、その中間状況においては貨幣賃金は不変であるとの想定である。WMを貨幣賃金とし、今  $\bar{w}_M$  を所与とすれば、労働供給関数は次のようになる。

$$(7) \quad N_s = N_s(\bar{w}_M) \quad N_d \leq N_s \leq N_f$$

$$(7)' \quad N_s = N_s(w) \quad N_s < N_d, \quad N_s > N_f$$

他方、労働需要条件については (3) で示されるように実質賃金＝労働の限界生産性であるから、労働需要関数は改めて表示すれば

$$(3)' \quad \frac{w_M}{p} = P_N(K, N)$$

となる。

2. このモデルにおける定常的な均衡状態は簡単に描くことができる。まず産出量は貯蓄＝投資＝0となり資本蓄積が停止する水準 $Y = Y_0$ でなければならないから

$$\dot{K} = S(Y_0) = 0$$

であるが、可変的生産係数の仮定から、 $Y_0$ の産出量水準を生産することが可能な $K, N$ の組み合わせは多数存在するはずである。故に

$$Y_0 = P(K, N) \Rightarrow \phi(K, N) = 0$$

となるが、労働市場が均衡するためには、もし労働の需給両サイドが共に実質賃金の関数であるとするならば、次式を満たす $K = K_0, N = N_0$ でなければならない。

$$\begin{aligned} N_S(w_0) &= N_D(w_0) \\ &= N_D(P_N [K_0, N_0]) \end{aligned}$$

最後に、ポートフォリオ・バランスの条件から物価  $p = p_0$  が決定される。

$$\frac{M}{p_0} = L(K_0, r_0, Y_0)$$

ここから、貨幣賃金は

$$w_M = w_0 p_0$$

となる。こうして、外生変数  $M$  以外の変数は全て決定されることになる。

これに対して、労働供給が貨幣賃金の関数であるならば、以下のようになろう。

$$\begin{aligned} (8) \quad N_S(w_M) &= N_D(w'_0) \\ &= N_D(P_N [K'_0, N'_0]) \end{aligned}$$

故に

$$p'_0 = \frac{w_M}{w'_0}$$

となる。このようにして均衡物価水準  $p'_0$  が決定されるが、しかしこれは (6) の流動性選好関数をも同時に満たすものでなければならない。換言すれば、(8) は (6) と同時に解かれなければならない。

3. 次いで均斉的成長について、すなわち、資本と労働雇用とが同一率で

成長するケースを一瞥すると、生産関数の1次同次性の仮定から生産量も比例的に成長するから、実質資本収益率 $r$ と実質賃金 $w$ は一定不変である。

他方、(6) から  $M/p$  は時間と共に増加し続けなければならない。ということは、貨幣供給量 $M$ が所与であるならば、物価は持続的に下落しなければならないことになる。結果的に、「均斉的成長は同一の実質賃金と減少し続ける貨幣賃金において利用可能な、拡大する労働供給を要求する」ことになる。

4. この均斉的成長のケースに照らし合わせると、労働雇用の成長率が資本の成長率に及ばないような、いわゆる《資本深化を伴う成長》や技術進歩の効果についても容易に判断することができる。

前者のケースでは均斉的成長に較べると、資本収益率の低下の故にデフレーション率は大きくなる。後者の技術進歩の効果に関してはその類型に応じて異なるが、労働と資本双方の限界生産性を高める《 Hicks 中立的 》な技術進歩を想定すれば、(6) から  $Y$  と  $r$  双方の増加によりデフレーション効果は相殺されるけれども、 $w$  の増加と  $r$  の減少が生ずるような極端な技術進歩のケースではデフレーション率は一層大きいであろう。

5. 以上のような予備作業の後で、トービンは貨幣賃金の硬直性の存在によってこのモデルのシステム運行がどのような特性を示すかを明らかにするために、2個の分析装置を作成する。

資本ストック  $K$  と貨幣賃金  $w_M$ 、貨幣供給  $M$  を各々所与として、(3)' と (6) から導出される物価-労働雇用関係を示す「労働市場バランス」 $LMB$  と「ポートフォリオ・バランス」 $PB$  の各曲線がそれである。

$$(i) \text{ LMB ; } \frac{w_M}{p} = P_N(K, N) \Rightarrow \frac{dp}{dN} = -p \frac{P_{NN}}{w_M} > 0$$



故に、縦軸に物価 $p$ を、横軸に労働雇用量 $N$ をとって図示すれば、LMB曲線の勾配はプラスであることが知られる。

さらにまた、貨幣賃金 $w_M$ が増減した場合にはLMB曲線がそれに比例して上方および下方にシフトし、資本ストック $K$ が拡大する場合には下方にシフトすることも明らかである。

$$(ii) \text{ PB}; \quad \frac{M}{P} = L(K, r, Y) \Rightarrow \frac{dp}{dN} = -\frac{P}{M} (L_r P_{KN} + L_Y P_N) \begin{matrix} \geq 0 \\ < 0 \end{matrix}$$

故に、PB曲線の勾配については確定しない。また、勾配のプラス、ゼロ、マイナスにかかわらず、PB曲線は貨幣供給 $M$ が拡大すれば上方に、資本ストック $K$ が拡大すれば下方にシフトする。

6. PB曲線の勾配をプラスと仮定し、これがLMB曲線の勾配よりも小さい場合と、大きい場合を図示したのが下の[図1A. ー安定]と[図1B. ー不安定]である。なお、労働供給関数は(7)、(7)'に示してある。

LMB曲線とPB曲線との交点 $[p_0, N_0]$ は図1Aでは安定的な短期均衡を、図1Bでは不安定的なそれを示している。他方、図1Bの交点 $[p_d, N_d]$ と $[p_f, N_f]$ は安定均衡点である。

さて、ここで資本ストックの拡大が生ずるとしよう。その効果は上述のように、LMB, PB両曲線の下方シフトであるが、図1BにおいてはPB曲線のシフトはLMB曲線のシフトよりも大きく、その結果 $N_0, p_0$ は共に増加するが、 $[p_f, N_f]$ と $[p_d, N_d]$ の点は共に下方へ動くことが証明される。他方において、図1Aにおいては $p_0$ は低下するが、 $N_0$ は増加するか減少するか確定できないことが同様に証明される。——その証明の経緯はかなり煩瑣なので、ここでは省略する——（註2）

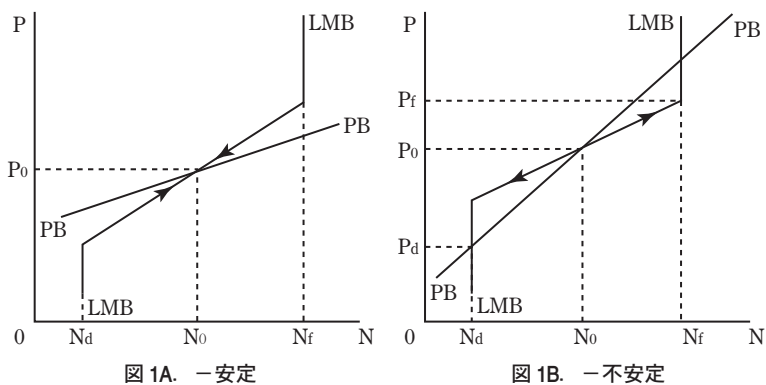


図 1A. - 安定

図 1B. - 不安定

7. 資本成長の効果については以上の通りだが、労働供給の増加についてはどのような結果が生ずるのであろうか。今、固定的貨幣賃金のもとで完全雇用が実現されている状況を想定し、労働供給が増加するが、その増加率は資本の成長率よりも小さいものと仮定しよう。そうすれば労働の限界生産性は高まるから、LMBにおいて物価下落が生じる。しかし、「不安定なケース」図1Bでは、上述のように、LMBの物価下落よりもPBの物価下落の方が大きいのであるから、[実質賃金>労働の限界生産性]となり、完全雇用状態の持続は不可能となる。

その結果、労働雇用は減少せざるをえないが、PBによる物価デフレーションの進行によって[実質賃金>労働の限界生産性]の関係は依然として解消されず、このプロセスは最終的には貨幣賃金が下方に弾力的となる労働雇用水準の下限にまで達することになる。この水準において漸く、[実質賃金=労働の限界生産性]が回復するからである。

なお、「安定的ケース」図1Aでは、上述のように、資本成長によるLMB曲線とPB曲線との下方シフトの大小についてはア・プリオリには確定できないのであるから、もしLMB曲線の方がPB曲線よりも大きくシフトするならば、物価下落が硬直的貨幣賃金および完全雇用の維持と両立する

可能性も否定できない。しかしながら、このようなケースにおいても持続的な物価デフレーションが資産保有者に物価下落の期待を抱かせることによって貨幣資産需要を増大させ、その結果 LMB 曲線と PB 曲線のシフトの大小が逆転することも考えられうる。このような事態が生ずると、貨幣賃金率の減少なしにはこのデフレーション・プロセスの終息は起こりえないであろう。

8. ここからトービン特有の《循環的振動の理論》が展開される。以下が彼の経済成長理論の帰結である。

まず初めに、経済が図 1B の点  $[p_t, N_t]$  にあるものとすれば、貨幣賃金  $[w_t] = \text{物価 } [p_t] \times \text{労働の限界生産性 } [P_N(K, N_t)]$  であるが、この貨幣賃金は一度成立すると下方硬直性を持つものと想定される。しかし、この点は資本拡大により徐々に図 2 の R 点  $[p_0, N_0]$  に一致するように移行するであろう。そして、「一度 R 点が到達されると、それ以上のいかなる資本拡大も、貨幣賃金が下落しえない限り、労働の実質賃金をその限界生産性以上へと押し上げるような物価下落を要求するであろう。従って、雇用主たちは雇用を縮小するであろう。」こうして前節で説明したように、労働市場と資産市場双方のバランスは貨幣賃金が下方へ弾力的となる雇用水準 [図 2 の  $N_d$ ] が到達されるまでは回復されない。

この労働供給 [図 2 の  $N_d$ ] に対応する所得水準で、もしプラスの貯蓄が発生するならば資本拡大は持続するから、物価と賃金デフレーションも同様に持続することになる。

ここで労働者サイドが雇用拡大のために貨幣賃金の十分な切り下げを受け入れるならば、5 節 (i) で述べたように、LMB 曲線はそれに比例して下方へ平行移動するから、結果的に図 3 の S 点のような状況が生じるであろう。もしも貨幣賃金の切り下げがわずかでもこれを超えると、この S 点

でのLMB, PB両曲線の乖離が生じ, [実質賃金 ( $w_m/p$ ) < 労働の限界生産性] となるから, 雇用の拡大が生じ, さらにそれによって資本の限界生産性が上昇するからポートフォリオ市場において資本需要が増大して物価上昇が生ずる。その結果, さらに [実質賃金 < 労働の限界生産性] の状況が生ずる。

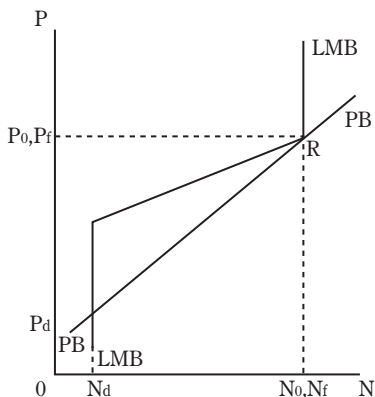


図 2

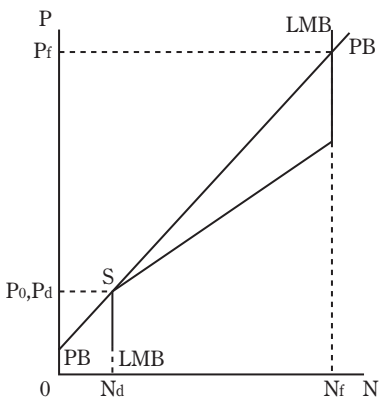


図 3

このような連鎖によって経済は物価インフレーションを伴いつつ点  $[p_f, N_f]$  へと移動し, こうして完全雇用水準において貨幣賃金が弾力化することによって漸く [実質賃金 = 労働の限界生産性] が実現し, 景気循環が一巡することになる。

これに対して,  $N_d$  の雇用水準において貯蓄がマイナスになるならば, 資本ストックの漸減が生ずるから, PB曲線の上方シフトはLMB曲線のそれよりも大きい。従って, ここでも図3のS点の状況が出現する。同様に, さらなる資本減少によって両曲線の乖離が発生すると, 上述の経路を通じて経済は物価インフレーションを伴いつつ点  $[p_f, N_f]$  へと移行し, こうして完全雇用が実現されるから, いずれにしても経済状況は循環的に一巡

することになる。

しかし、ここで留意すべきはこの景気循環は一巡毎に資本と労働の持続的な拡大による所得水準の持続的拡大と物価水準の持続的下落とを伴う《循環的振動》の性格を持つということである。

9. 上述の循環的振動の必然性は図1Bのケース、すなわち、PB曲線がLMB曲線よりも大きい勾配を持つ不安定均衡のケースから導出された結論であるが、反対の安定的均衡のケースである図1Aからはどのような結論が生ずるのであろうか。この場合には既述のように、資本拡大に伴って物価  $p$  は下落するが、雇用  $N$  については増減いずれとも確定できないのであった。

もしも固定的貨幣賃金の故に資本拡大が雇用の減少をもたらすならば——すなわち、資本拡大による労働の限界生産性の上昇率よりも物価下落率の方が大きいならば——、やがて貯蓄ゼロの水準まで所得水準が低下するようになり、ここで資本拡大は終息するから定常的均衡状態が生ずることになる。

しかし、プラスの貯蓄による資本拡大があっても、労働の限界生産性の上昇率が物価下落率と等しいならば労働雇用量は不変に留まるから、労働供給の持続的拡大は失業の持続的拡大をもたらすという《長期停滞状況》の出現もありうることになる。

## II. ジェームス・トービンの経済成長モデル (ii)

1. トービンの経済成長モデルは、上述のように、貨幣的要因の導入を特徴としているが、「動学的集計モデル」の延長上にあると思われる後年の「貨幣と経済成長」<sup>(註3)</sup> についても要約・整理しておこう。

彼はまず極めて独創的な図表を用いて、ソローによって完成された新古

典派成長理論を簡潔に要約し、検討しているから、以下にその図表を図1として掲げる。

横軸には労働力1単位当たりの資本量 $k$ が測られる。当然、これは生産係数の可変性が仮定されているということであるが、同様に生産関数の1次同次性も前提されている。縦軸には種々の量が年率で測られている。

まず $AA'$ 線であるが、これは資本 $k$ の平均年生産物 $y$ を表わす。集計的モデルでは生産される財は1種類しかなく、従って生産物(消費財と投資財)は全て同種同質であると仮定されるから、この $AA'$ 線の設定に問題は生じない。総資本ストックを $K$ 、労働総数を $N$ 、生産総量を $Y$ とすれば、 $y = (Y/N) / (K/N) = Y/K$ となり、 $y$ はハロッド=ドーマー-モデルの「資本-産出量比率」の逆数である。

$MM'$ 線は $k$ の限界生産物を表わす。これは $k$ がある水準を超えるとマイナスになると仮定される。

$S_1S'_1$ あるいは $S_2S'_2$ は $k$ の平均貯蓄率を表わす線である。 $S = s (Y/N) / (K/N) = s / (K/Y)$ であるから、これはハロッドの「保証成長率」、ドーマーの「均衡成長率」に他ならないが、ハロッド=ドーマーとの違いは、これが一定不変の値ではなく、 $k$ の増加と共に減少することである。

$S_1S'_1$ はつねに貯蓄率 $s$ が一定として、 $S_2S'_2$ はそれが漸減するものとして描かれている。

さらに外生的な「自然成長率」=労働成長率 $n$ を水平線 $NN'$ で表わそう。

2. さて、この図1からソローが導き出した恒常成長均衡点が極めて容易に見発できる。それは資本の成長率が自然成長率に等しくなる点であるから、貯蓄線 $SS'$ と自然成長率 $NN'$ 線の交点である。従って、貯蓄線 $S_1S'_1$ をとれば $k_1$ が「均衡資本密度」(equilibrium capital intensity)——ソローの「均衡資本-労働比率」——となり、 $S_2S'_2$ をとれば $k_2$ が均衡資本密度

となる。ただし、 $k_1$ においては資本の限界生産性は $M_1$ でマイナス、 $k_2$ においてはそれは $M_2$ となっている。

このSS'線とNN'線との交点では保証成長率＝自然成長率  $[s / (K / Y) = n]$  が実現している。しかも、この均衡は安定的であることも容易に理解できる。SS'線がNN'線よりも高いならば $k$ は拡大し、反対の場合には $k$ は縮小するからである。

もしもハロッド＝ドーマーのように生産係数が固定的であるとするならば、保証成長率＝自然成長率の実現は偶然の所産となることは図1からも明らかであろう。

こうして、一度この均衡点が達せられると、経済は同一の資本密度を維持したまま比率 $n$ で規模拡大を続けることになる。

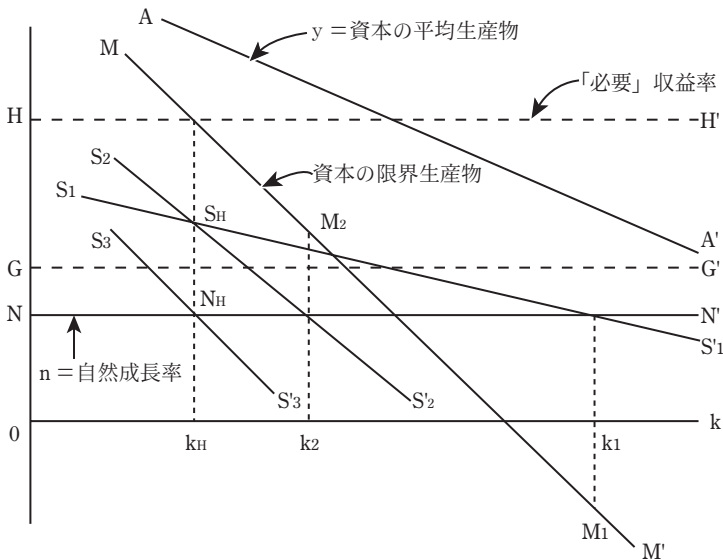


図 1

以上でトービンはソローが確立した恒常成長均衡の安定性の命題を論証したことになる。トービンのこの論証はその簡明さの故に、ソローのあのエレガントなモデル構成と巧みな数学的演繹による証明に優るとも劣らないものであるが、しかしこの点については後述のスワンの方により大きな priority があるようである。

3. ところで、この新古典派成長モデルの核心をなすものは一体何か。いかなるメカニズムによってこのシステムは長期的な恒常成長均衡を達成するのであるか。これは明らかに生産係数の可変性を前提にした、単純な〔貯蓄＝投資〕均等のメカニズムであり、その背後にあるのは周知の《古典派の利子論》に他ならない。要するに、貯蓄も投資も利子率の関数であり、利子率の調整によって常に〔貯蓄＝投資〕が成立するというものである。この〔貯蓄＝投資〕の成立は半面において生産物市場の需給均衡を意味するから、経済システムは完全雇用の下で常に全体として均衡することになる。

この新古典派的経済観は各経済主体が自らの所得を消費と投資に直接二分するものと想定することと同じであろう。従って、ここでは貯蓄と投資の齟齬は発生しない。投資されない貯蓄は常に消費に回されるから、総需要の過不足は生じないのである。

このような経済観に対して反対を唱えたのが、周知のように、ケインズである。貯蓄と投資には乖離が生じうること、それは貯蓄主体と投資主体とが異なるからであると。従って、「ケインズ的」成長モデル——とトービンの名付ける——の立場に立つハロッド、ジョーン・ロビンソン、カールドア等は「期待」収益率＝最低資本収益率の仮定を置く。これは「投資家は単純に何等かの最低収益率を期待できないならば、新投資を企画することはない」ということを意味する。



4. その最低収益率を図1にHH'線で表わすと、この「必要」収益率HH'線の意味することは、投資家たちは $k$ を $k_H$ 以上に増加するつもりはないということである。ところが、この投資家サイドの決定にかかわらず貯蓄家サイドは $k$ が $k_H$ に留まるのに必要な貯蓄率 $n$ 以上の貯蓄( $S_H N_H$ )を行うのであるから、ここに[投資<貯蓄]の関係が生じ、こうして《需要不足=失業の発生》となる。ハロッド-モデルの表現を用いれば、[保証成長率>自然成長率]であるから周知のケインズの隘路が発生するのである。

これに対して、例えば、貯蓄線が $S_2 S_2'$ の場合に最低収益率がGG'線で表わされるならば、[貯蓄<投資]の関係から需要超過が生じ、《物価インフレーション》が発生すると説明される。

このような説明は今日でも単純なケインズ理論の教科書的説明として用いられているが、この点についてはトービンは、非貨幣的成長モデルにおいて物価インフレーションを論ずることはもともと無理があると、もっともな指摘をしている。

5. ケインズの成長モデルにおけるこの「必要」収益率は一体いかなる根拠に基づいて決定されるのであろうか。ケインズの成長論者たちにはこの根拠の十分な説明が欠けていると、トービンは言い、ここに資産選択(ポートフォリオ)問題との関連での貨幣要因の導入という本論文の主題が展開されることになる。

トービン-モデルの経済観は次のように単純化できるのではないだろうか。新古典派のそれと同様に、各経済主体は所得を直接自ら消費と投資に二分するが、投資対象には単に資本財だけでなく、他に金融資産も存在すると。勿論、この場合、現実にはトービンが強調しているように、所得はまず消費と貯蓄に分割され、その後貯蓄は資本財投資と金融資産投資に

分割されるわけであるが、厳密に理論的に考えるならば、かつてワルラスが貯蓄決定問題で対処したように、貯蓄は直接に投資の収益率と関連づけられるべきであろう。

そうなると、金融資産の収益率が最低資本収益率を決定する要因として登場することになる。こうして、金融資産の収益率が  $HH'$  の水準ならば、これが資本の「必要」収益率となり、その結果、 $k_H$  においては資本財市場に  $S_H N_H$  の需要不足が生じ、上述のように、物価デフレーション＝不況が発生する。反対に、貯蓄線が  $S_2 S_2'$  の時、金融資産の収益率が  $GG'$  の水準ならば、資本財供給が不足して物価インフレーションが発生する。

6. トービンはこのような経緯からその成長モデルに貨幣を導入するのであるが、ここでの貨幣の定義は通常のそれとも、前述の「*動学的集計モデル*」のそれともやや異なる。この貨幣は預金通貨を含まないとのことであるから中央銀行券だけからなるようだが、経済の支払手段、交換手段であると同時に、政府によって固定された一定の自己収益率を有するという。要するに、支払手段、交換手段としても利用可能な一種の政府証券と看做してよいであろう。従って、上述の最低資本収益率がこの政府証券の利子率に等しいことになる。

ここから  $k_H$  における生産物（＝消費財＝投資財）に対する需要不足  $S_H N_H$ 、すなわち、ケインズの隘路を解決する方法が二種あることは容易に納得できよう。ひとつは貨幣〔政府証券〕の利子率を  $M_1$ （あるいは  $M_2$ ）まで引き下げることであり、他は生産物の供給超過分  $S_H N_H$  を——利子率是不変のまま——貨幣の新規発行によって政府が吸収することである。しかし、この後者の政策は一回切りで終わるのではなく各期毎に連続して繰り返されなければならない。この貨幣の発行は政府財政の赤字によるものであるから、この政策をとることによって政府は累積赤字をどこまでも拡大し続けなければならないことになる。

反対のインフレ的隘路の場合には、これと反対の利子率の引き上げ、あるいは政府財政の黒字政策によって解決される。

トービンの以上の説明は、デフレおよびインフレ対策としての通常の金利政策、および財政政策と同一であり、ここまでは特に注目すべきものとも言えないであろう。それはポートフォリオ行動の仮説が単純に過ぎるからである。以下でトービンはこの単純な仮説を改めて、極めて説得力ある理論展開をなしている。

7. 現実のポートフォリオ行動は実物資本財の収益率と金融資産の収益率（＝利子率）との単純な比較によって決定されるのではなく、各資産に附随するリスクや取引上の便宜、その他様々な要因によってなされる。従って、保有される各資産の収益率は必ずしも均等ではない。この点については上の「ジェームス・トービンの経済成長モデル（i）1. (6) 式」においていくらか言及された。やや煩瑣ではあるけれども、「貨幣と経済成長」の要点をなすから、以下でトービンの展開をもう少しフォローしてみよう。まずは物価水準の変動はないものと仮定する。

資本密度が  $k$ 、貨幣収益が  $r$  である時の資本単位当たりの必要貨幣量を  $m$  としよう。そうすれば  $m = m(k, r)$  とあるが、これを説明上次のように改めると、

$$(1) \quad m = m(k, r, y[k]) \quad \frac{\partial m}{\partial k} > 0, \quad \frac{\partial m}{\partial r} > 0, \quad \frac{\partial m}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial k} < 0$$

と表わすことができよう。資本密度の増加は資本収益の低下をもたらすから金融資産（貨幣）需要を高めるが、しかし他方において  $k$  の増加による  $y$  の低下は貨幣の取引需要を低める。これら両者の効果については前者の方が大きいものと仮定する。利子率の上昇は勿論、金融資産（貨幣）需要

を高める。

そこで $k$ の単位当たり貯蓄 $S$ は資産選択の結果、資本財投資 [=保証成長率]  $w$ と金融資産投資 $d$ へと分割されるが、ここでの金融資産（貨幣）供給は既述のように政府の財政赤字である。 $g$ を税率とすれば

$$(2) \quad S = s [y (1 - g) + d] = d + w$$

でなければならない。 $k$ の単位当たり必要貨幣量は $m(k, r, y[k])$ で、当該時点では一定であるから、 $d/w = m(k, r, y[k])$ であり、結果的に次式が得られる。

$$(3) \quad w(k, r) = \frac{sy(k)(1-g)}{1+(1-s)m(k, r, y[k])}$$

ここから $w$ は $m$ と逆比例すること、さらに言えば、資本密度 $k$ が大きくなればなるほど資本ストックの成長率 $w$ は小さくなり、同様に、金融資産収益率 $r$ が増加しても $w$ は小さくなることが知られる。これを図2に表わせれば次頁のようになる。

ここで $W_1W_2$ は各資本密度に対する資本の保証成長率を示すが、貨幣ストック $d=S-w$ はその資本密度に対して調整され、これは赤字支出によって維持されるものと仮定されている。 $W_1W_2$ の自然成長率 $NN'$ との交点によって均衡資本密度 $k_1$ が定まる。この時の資本収益率は $M'$ であるが、この収益率は必ずしも金融資産（貨幣）収益率 $\bar{r}_1$ に等しくはない。

この金融資産収益率を $\bar{r}_2$ に低下させると、この保証成長率曲線は $W_2W_1$ へと上方シフトする。こうして均衡資本密度は増加し、均衡資本収益率は低下することになる。

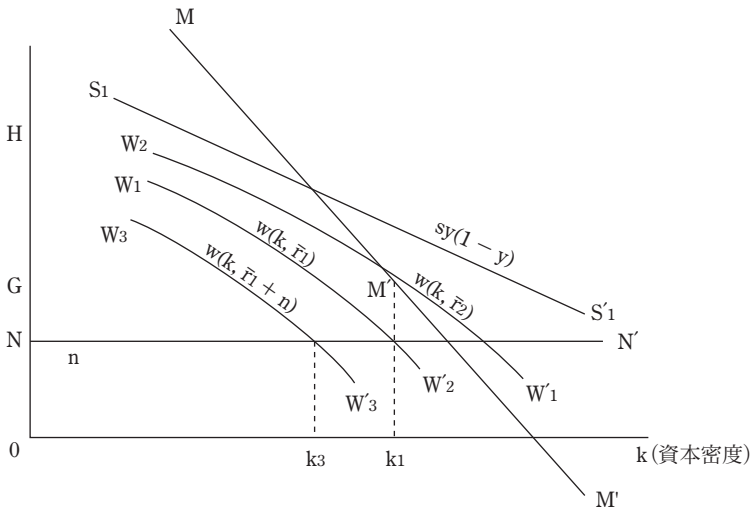


図 2

8. 以上では物価水準は不変であり、貨幣供給は政府の財政政策によってフレキシブルに調整されるものと仮定されたが、今度は政府による均衡予算政策が実施され、そのため貨幣の名目ストックが一定不変であると想定しよう。

そうすれば、利子率 $r_1$ では既述のように保証成長率は曲線 $W_1W_2$ で示され、従って、これも既述のように貨幣需要は  $[d = S_1S'_1 - W_1W_2]$  であるから、名目貨幣ストック一定のもとでは物価デフレーションが発生せざるをえないことになる。こうして物価デフレーションが生ずると、実質貨幣収益率が上昇するから前節 (3) から保証成長率曲線は下方にシフトする。それではこのシステムの均衡はどこで成立することになるだろうか。均衡資本密度はどの点であろうか。

均衡においては資本の保証成長率＝自然成長率であり、資本は労働と共に $n$ の比率で持続的に成長しなければならないから、(1) から実質貨幣量

も同様に  $n$  の比率で持続的に成長する必要がある。すなわち、 $n$  の比率での持続的なデフレーションが生じなければならない。

こうして実質利子率は  $[\bar{r}_1 + n]$  に等しくなければならず、資本財の投資関数は  $w(k, \bar{r}_1 + n)$  となり、図2の  $W_3W_3$  曲線で表わされるようになる。その結果、 $k_3$  が均衡資本密度となる。このように、デフレーションが貨幣創造に代替されるならば、均衡は資本単位当たりにつきより大きな貨幣ストックとより低い資本密度を必要とする。

9. これとは反対の予算超過あるいはインフレーションのケースについてのトービンの説明は次のようになる。

図1の  $k_2$  点に注目しよう。この点は貯蓄関数が  $S_2S'_2$  の時の均衡予算における均衡資本密度であるが、ここではプライベート・セクターの貯蓄は全て資本財の需要に向けられ、貨幣需要はゼロである  $[SS - WW = d = 0]$ 。従って、現存する貨幣量は政府の予算超過によって吸収されるか、そうでなければ物価インフレーションによって払拭されなければならない。しかし、この現存貨幣供給量が一度吸収・払拭されるならば、その過程は繰り返されることはない。

さらに、貨幣需要が上のようにゼロではなく、マイナス [=貨幣的ポジションがマイナス] である場合、すなわち  $[SS - WW = d < 0]$  の場合にはどういうことになるであろうか。もし政府が黒字予算によってこれに対応するのであれば、物価不変のままプライベート・セクターの政府に対する純債務は  $n$  の比率で持続的に増加し、均衡予算の場合には8節の反対のケースになるので、均衡は結果的に  $w(k, \bar{r}_1 - n)$  が自然成長率  $n$  線と交差する点において決定され、 $n$  の比率のインフレーションが持続的に発生することになる。いずれにしても、均衡資本密度は高まる。

10. トービンはこの均衡軌道の安定性についても簡単に言及している。そ

の論証はやや理解し辛いですが、以下のように纏めることができるであろう。

まず貨幣の収益率は物価デフレーションによるその実質価値の増分のみであるとして、貨幣需要関数を単純化する。そうすると、図2の保証成長率を表わす投資関数  $w(k, \bar{r}_1 + n)$  も  $w(k, n)$  と改められることになる。このように改められた均衡状態  $k_3$  での  $k$  の単位当たり名目貨幣ストックを  $D$  とすれば、 $w = n$  であるから、ここでは7節で見たように次の関係が成立している。

$$(4) \quad S = s \{y(1-g) + d\} = d + w \Rightarrow \frac{d}{w} = \frac{d}{n} = \frac{D}{p}$$

もしもデフレーション率  $-\dot{p}/p = 0$  ならば、貨幣需要の根拠は失われるから  $d = 0$  であり、貯蓄は全て資本財投資に向けられる。従って、

$$(5) \quad d = 0 \Rightarrow S = sy(1-g) = w$$

となる。反対に全貯蓄が貨幣需要に向けられるならば、資本財需要  $w = 0$  となるから

$$(6) \quad w = 0 \Rightarrow S = s \left\{ y(1-g) + \frac{D}{p} \right\} = \frac{D}{p}$$

$$\Rightarrow \frac{sy(1-g)}{1-s} = \frac{D}{p}$$

が成り立つ。(6) は実質貨幣需要を意味するから、これは年毎に実質貨幣量が  $sy(1-g) / (1-s)$  だけ増加する必要があることを意味するが、名目貨幣ストック  $D$  は一定不変と仮定されるから必要インフレ率は

$$(7) \quad d \left( \frac{D}{p} \right) = \frac{sy(1-g)}{1-s}$$

$$\Rightarrow -\frac{\dot{p}}{p} = \frac{s}{1-s} \frac{py(1-g)}{D}$$

となる。要するに、デフレーション率がゼロならば全貯蓄  $sy(1-g)$  が資本財投資に向けられ、デフレーション率が  $s / (1-s) \cdot py(1-g) / D$  ならば、全貯蓄が貨幣需要に向けられるということである。

以上は貯蓄を吸収する  $-\dot{p}/p$  と  $\dot{k}/k$  との関係を示している。これを縦軸にデフレーション率 [絶対値] を、横軸に資本成長率を測った図3の「貯蓄線」によって表わそう。

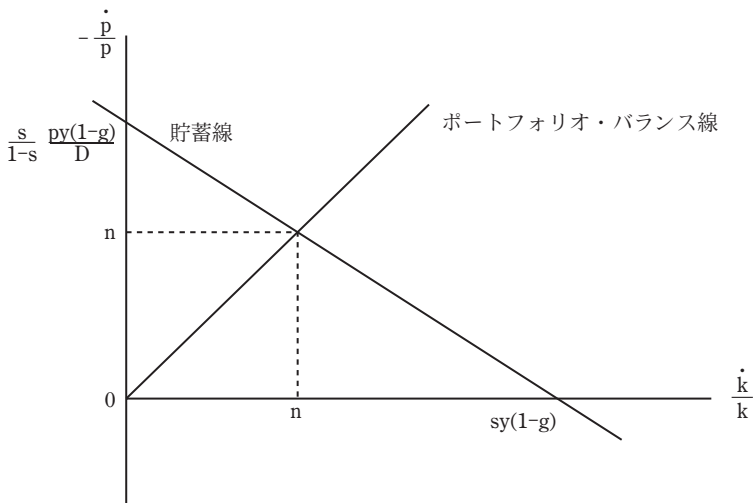


図3

これに対して、「ポートフォリオ・バランス」が成り立つためには  $w(k, n) = n$  から知られるように、資本成長率 ( $n$ ) と物価デフレーション率 ( $n$ ) とは常に等しくなければならない。これを同様に図3に示せば、プラスの勾配を持つ45度線となる。



そうすると、「貯蓄線」と「ポートフォリオ・バランス線」とは点  $[n, n]$  で交差する。

11. そこで今、技術進歩、労働成長率、貯蓄行動における何等かの不規則性によってか、あるいは期待収益もしくはポートフォリオ選好の変化によって経済が「ポートフォリオ・バランス」 $[k_3; w(k, n) = n]$  から逸脱し、例えば、デフレーション率が  $n\%$  以上になる場合にはどのような状況が生ずるであろうか。

この場合には経済は「貯蓄線」に沿って北西方向に移動することになるから、資本成長率は人口成長率よりも小さくなり、その結果、資本収益率は増加する。また実質貨幣ストックは  $n\%$  以上で増加し、資本ストックは  $n\%$  以下で成長するから前者は後者に比して相対的に増加することになる。

このように資本収益率の増加によってもたらされる、相対的に縮小した資本ストックへの需要増加はデフレ抑制的な効果を持つであろう。他方、デフレーション率の上昇による貨幣収益の増加は貨幣需要の増加をもたらすから、これは反対にデフレ促進的な効果を生み出す。前者が《ピグー効果》、後者が《ウィクセル効果》と呼ばれるが、後者が前者を上回るならばデフレーションはさらに進行し、それにつれて資本収益率はさらに増加し、また富に占める資本シェアはますます小さくなるから、遂には《ピグー効果》が《ウィクセル効果》を上回るようになるであろう。こうしてデフレーション率は低下することになる。

さらにまた、貨幣ストックに対する産出量の比率  $[py/D]$  ——ここでは  $y$  も  $D$  も一定不変——が減少するにつれて、「貯蓄線」と縦軸との交点は下方に移動する。すなわち、全貯蓄を資本形成から剥奪するようなデフレーション率はますます小さくなる。そのようにして貨幣収益は減少し、資本収益は上昇するが、他方において実質貨幣ストックは増加し、資本ス

トックは減少しているから、結果的にデフレーション率は再び $n$ へと下落するであろう。

### III. T. W. スワンの経済成長モデル

現代経済成長理論におけるもう一つの代表的業績であるスワンの論文「*経済成長と資本蓄積*」<sup>(註4)</sup>は前稿で紹介したソローの《古典的》な論文「*経済成長理論への一寄与*」と同年に発表されているが、しかし、後者に劣らず独創的であると同時に極めて簡潔明快であり、そのインプリケーションの範囲はむしろソローよりも広い。また、付録として加えられている「*資本への覚書*」はスワンの資本問題への深い関心と造詣とを示している、筆者にとっては特に興味あるものであるが、この問題については次稿において検討する予定である。以下においてはスワンの経済成長理論の内容を要約・整理しておきたい。

1. スワンはまずソローが論証した恒常成長均衡の安定性の問題を独自のアプローチで明快に論証しているが、ソローと同様に生産係数の可変性を仮定し、またマクロ生産関数については1次同次性を仮定する。従って

$$(1) \quad Y = K^{\alpha} N^{\beta} \quad \alpha > 0, \beta > 0 ; \quad \alpha + \beta = 1$$

であり、これは両辺の対数を取り時間 (t) について微分することによって次のようになる。

$$\Rightarrow \frac{\dot{Y}}{Y} = \alpha \frac{\dot{K}}{K} + \beta \frac{\dot{N}}{N}$$

ところで、 $\dot{K}=I=S=sY$ であり、産出量成長率を示す上式の左辺を $y_1$ 、右辺第二項の人口成長率を $n$ とすれば、(2)は

$$(2) \quad y_1 = \alpha s \frac{Y}{K} + \beta n$$

となる。言うまでもなく、 $sY/K$ は資本成長率である。

このように、スワンにおいてもハロッド＝ドーマーとは異なって常に $[I=S]$ が前提されている点は、トービンやソローと同様である。これは《古典派の利子論》が前提されていることを意味し、それ故に有効需要の過不足は発生しないものと看做されている。また市場メカニズムが円滑に機能することによって利潤率（利子率） $r$ と実質賃金率 $w$ は資本と労働の限界生産性に各々等しい。

$$(3) \quad r = \alpha \frac{Y}{K} \qquad (4) \quad w = \beta \frac{Y}{N}$$

これらは新古典派経済学の前提であり、スワンの経済成長理論がソローのそれと並んで《新古典派経済成長理論》とよばれる所以である。

2. さて、恒常成長の条件は、技術進歩が存在しないとすれば、産出量成長率と資本成長率、人口成長率が全て等しいこと、すなわち

$$(5) \quad y_1 = s \frac{Y}{K} = n$$

であるが、もしも産出量成長率が資本成長率よりも大きい $[y_1 > sY/K]$ ならば、時間の経過と共に $Y/K$ が増加し、その結果、資本成長率が増加するから、やがて $y_1 = sY/K$ が必ず成立する。反対の場合には時間の経過と共に $Y/K$ が減少するから資本成長率も減少し、遅かれ早かれ $y_1 =$

$sY/K$  が同じように成立する。

(2)から

$$y_1 = s\frac{Y}{K} \Rightarrow as\frac{Y}{K} + \beta n = s\frac{Y}{K} \Rightarrow s\frac{Y}{K} = n$$

となり、 $y_1 = sY/K$  ならば、 $sY/K = n$  が必ず成立するから、(5) の産出量成長率＝資本成長率＝人口成長率という恒常成長条件が必ず達成される。

ハロッドの術語を用いれば、スワンの資本成長率  $sY/K$  は  $s/(K/Y) = s/C$  ——  $C$  はハロッドの資本－産出量比率 —— であるから、これは彼の「保証成長率」 $G_w$  に当たる。また  $n$  は「自然成長率」 $G_n$ 、 $y_1$  は「現実成長率」 $G$  であるから、

$$y_1 = s\frac{Y}{K} = n \Leftrightarrow G = G_w = G_n$$

となる。ハロッド＝ドーマーにおいては  $C = K/Y$  が一定不変と仮定されたが故に  $G = G_w = G_n$  の成立は偶然に依拠したが、スワンの前提においてはこれは可変的であり、上述のように「現実成長率」 $G$  によって常に  $G = G_w$  へと調整され、さらに  $G_w = G_n$  が必然的に成立することになるのである。こうして、恒常成長均衡の安定性が論証されるのである。

3. 以上の論証をスワンの図表によって示せば、きわめて簡潔明快に理解することができる。

資本成長率  $sY/K$  は貯蓄率  $s$  の傾斜もち、原点を通る直線で表わされ、「資本の成長線」(growth line of capital) と呼ばれる。 $asY/K$  は産出量成長への資本の寄与を示すものであり、原点を通る、勾配  $as$  の直線であ

り、これは「資本の寄与線」(contribution line of capital) と呼ばれる。また、労働の成長率は  $n$  で水平線である。縦軸の距離  $OA$  は  $\beta n$  であり、これは産出量成長への労働の寄与を表わす。(2) から、資本と労働の寄与を合計することによって産出量成長線  $y_1$  が得られる。

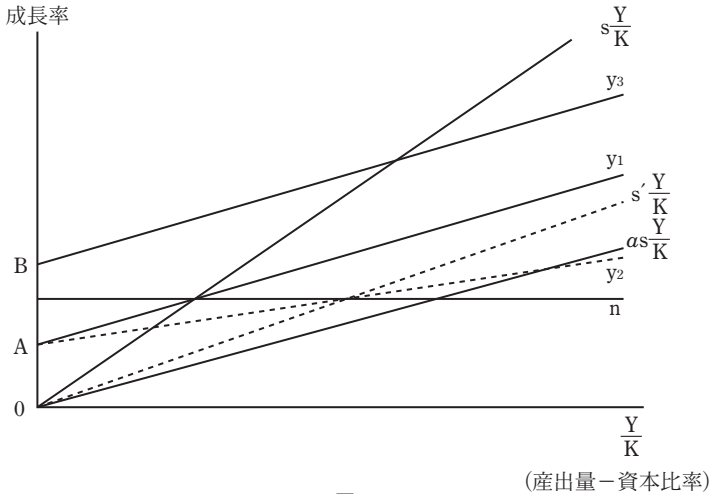


図 1

4. ここで国民の貯蓄性向だけが減少した場合の影響について、スワンは次のような結論を導いている。 $s' = s / 2$  とすれば、前節で述べたように

$$(6) \quad y_2 = as' \frac{Y}{K} + \beta n \Rightarrow y_2 = s' \frac{Y}{K} = n$$

から、 $n / s' = Y / K$  となり、産出量-資本比率は以前の 2 倍になるが、しかし産出量成長率=資本蓄積率=人口成長率は  $n$  で不変である。その結果、(3) から利潤率（利率） $r$  は以前の 2 倍になることが知られる。

これに対して賃金率  $w$  は減少する。その証明は以下のようになる。(1) の生産関数から

$$\frac{Y}{K} = \left(\frac{N}{K}\right)^\beta \Rightarrow d\left(\frac{Y}{K}\right) = \beta \left(\frac{N}{K}\right)^{\beta-1} d\left(\frac{N}{K}\right)$$

$$\frac{Y}{K} = \left(\frac{K}{N}\right)^{-\alpha} \Rightarrow d\left(\frac{Y}{K}\right) = -\alpha \left(\frac{N}{K}\right)^{-(\alpha+1)} d\left(\frac{N}{K}\right)$$

である。故に

$$\frac{d\left(\frac{Y}{K}\right)}{d\left(\frac{N}{K}\right)} = -\frac{\beta}{\alpha} \frac{K}{N} < 0$$

となり、賃金率  $w = \beta(Y/K)$  は利潤率  $r = \alpha(Y/K)$  とは逆の運動を示すことが知られる。

5. 次に技術進歩の影響については何が言えるであろうか。スワンは《ヒックス中立的》技術進歩を仮定して、次のような結論を導き出している。

生産関数 (1) は (7) ように改められることになるから、産出量成長率と恒常成長条件は以下になるであろう。ただし、 $m$  は技術進歩率を表わし、図 1 では縦軸上の距離 AB として示される。

$$(7) \quad Y = A(t) K^\alpha N^\beta$$

$$(8) \quad \frac{\dot{Y}}{Y} = \frac{\dot{A}}{A} + \alpha \frac{\dot{K}}{K} + \beta \frac{\dot{N}}{N}$$

$$(9) \quad y_3 = m + \alpha s \frac{Y}{K} + \beta n$$

恒常成長条件は既述のように、まず産出量成長率 = 資本成長率から

$$y_3 = s \frac{Y}{K} \Rightarrow m + \alpha s \frac{Y}{K} + \beta n = s \frac{Y}{K} \Rightarrow s \frac{Y}{K} = n + \frac{m}{\beta}$$

となるが、この成長率  $[n + m/\beta]$  は人口成長率  $n$  を  $m/\beta$  だけ上回っている。このように技術進歩が生ずると産出量も資本も人口の成長を  $m/\beta$  だけ上回る率で恒常的に成長することになる。その結果、1人当たりの産出量は永続的に上昇し続けることになるのである。

ここで留意されるべき点は3節で見たのと同様に、技術進歩率と労働成長率が与件とされるならば、産出量と資本の恒常成長率は貯蓄率  $s$  の変化に関係なく  $[n + m/\beta]$  として決定されるということである。

6. スワンはこの成長モデルを用いて古典派経済学における成長理論、特にリカードの《長期停滞論》のインプリケーションを明らかにしようとしている。古典派理論では土地供給の固定性が決定的な重要性を有するので、生産関数と産出量成長率を表わす基本公式は次のようになる。Lで土地の供給量を表わせば、その成長率  $\dot{L}/L = 0$  であるから

$$(10) \quad Y = K^{\alpha} N^{\beta} L^{\gamma} \qquad \alpha + \beta + \gamma = 1$$

$$(11) \quad y = \alpha s \frac{Y}{K} + \beta n \qquad \alpha + \beta < 1$$

である。故に

$$(12) \quad y = s \frac{Y}{K} \Rightarrow \alpha s \frac{Y}{K} + \beta n = s \frac{Y}{K} \Rightarrow s \frac{Y}{K} = n \frac{\beta}{\beta + \gamma} < n$$

となり、産出量と資本の成長率は人口成長率よりも小さい。従って、一定の労働成長（と技術進歩の不存在）を伴う唯一の可能な均衡は1人当たり産出量と賃金が永続的に下落し続ける均衡であろう。

7. 周知のように、リカードの長期理論では賃金率は生存水準において一

定不変と仮定される。従って、産出量成長率が人口成長率に等しいならば賃金率一定が保証されるから

$$(14) \quad y_1 = n_1 \Rightarrow n_1 = \frac{\alpha}{1-\beta} s \frac{Y}{K}$$

$$(15) \quad \alpha s \frac{Y}{K} < y_1 = n_1 < s \frac{Y}{K}$$

となる。(14) の  $y_1 = n_1$  を図2に描いた直線を、スワンは「リカード線」と名付けている。(15) から知られるように、原点以外においては資本成長線は「リカード」線の上に位置する。何故ならば、持続的に逡減する土地の収穫に直面して1人当たり産出量を維持するためには、常に資本が労働よりも速く成長しなければならないからである。しかしながら、その結果、資本は同様に産出量よりも速く成長するから、産出量-資本比率は継続的に下落し続ける。

利潤率  $r = \alpha Y / K$ 、賃金  $w = \beta Y / N$ 、地代  $l = \gamma Y / L$  であるから、 $Y / K$  の継続的の下落に伴って利潤率は下落し続け、賃金は  $Y / N$  が一定不変であるので不変であり、地代は  $\dot{Y} / Y = n$ 、 $\dot{L} / L = 0$  である故に持続的に増加することになる。

産出量-資本比率  $Y / K$  はこのように限り無く減少するから、(14) から労働と産出量の成長率もリカード線に沿って継続的に減少し続ける。そして遂に資本成長線とリカード線とは原点において交差し、ここにリカード理論の結論たる経済の《長期停滞状況》が出現することになる。この長期停滞の結論は貯蓄率  $s$  がどれほど増加させられようとも避けることのできないものであることも、上述の論理過程から明らかであろう。



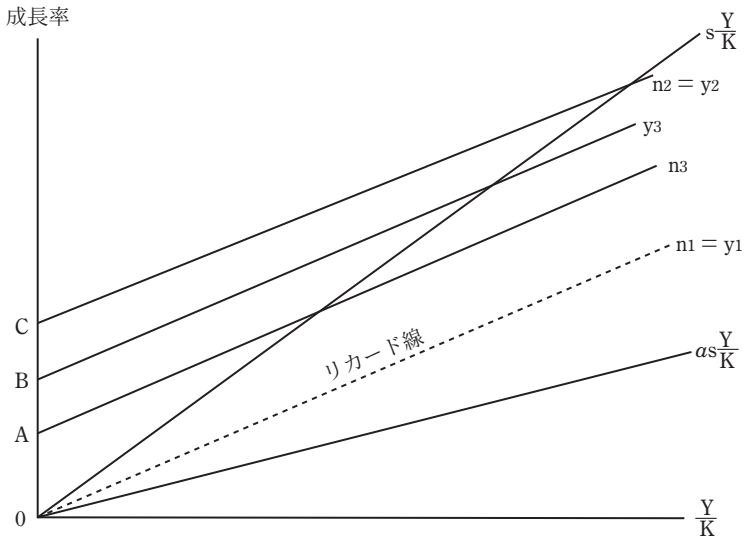


図 2

8. 最後に技術進歩が導入されるならば、この古典派的《長期停滞論》にはいかなる修正が加えられるであろうか。技術進歩率 $m$ を考慮すれば、この場合の「新リカード線」 $y_2 = n_2$ は次のようになるであろう。

$$(16) \quad y_2 = a s \frac{Y}{K} + \beta n_2 + m \Rightarrow y_2 = n_2 = \frac{a}{1-\beta} s \frac{Y}{K} + \frac{m}{1-\beta}$$

恒常成長の均衡条件は

$$(17) \quad y_2 = n_2 = s \frac{Y}{K} \Rightarrow s \frac{Y}{K} = \frac{m}{\gamma}$$

であるから、恒常成長率は $m/\gamma$ となる。「新リカード線」が資本成長線と交差する点において、技術進歩は正確に逓減の収穫を相殺し、こうして産出量成長率、人口成長率および資本成長率は $m/\gamma$ で同一である。この

場合においては当然のことながら賃金率は一定不変であるが、利潤率も地代も一定不変である。

9. 上で仮定したように、一定の生活水準を維持するために人口が産出量と同一の成長率に調整されるのではなく、年率で $q\%$ の累積的な生活改善を達成するように調整されるならば、その時の産出量成長率 $y_3$ と人口成長率 $n_3$ とは次の条件を満たさなければならない。

$$(18) \quad y_3 = n_3 + q \Rightarrow n_3 = y_3 - q = \alpha s \frac{Y}{K} + \beta n_3 + m - q$$

$$\Rightarrow n_3 = \frac{\alpha}{1-\beta} s \frac{Y}{K} + \frac{m-q}{1-\beta}$$

$$(19) \quad y_3 = \frac{\alpha}{1-\beta} s \frac{Y}{K} + \frac{m-q}{1-\beta} + q$$

この場合の恒常成長均衡は

$$(20) \quad y_3 = s \frac{Y}{K} \Rightarrow y_3 = \frac{m-q\beta}{\gamma} \Rightarrow n_3 = \frac{m-q(\beta+\gamma)}{\gamma}$$

となる。

以上の分析は古典派的《長期停滞状況》を克服できる唯一の方途が資本蓄積にあるのではなく、技術進歩にあることを明らかにしている。もっとも、土地の絶対的な供給制約の下で収穫逡減の傾向を永続的に阻止し、利潤率、賃金率および地代を永続的に一定水準に維持しうる技術進歩の仮定は原理的には受け入れられないであろう。

#### IV. 総括

1. 前稿と本稿において現代経済成長理論の出発点を画した代表的文献であるハロッド、ドーマー、ソロー、トービンそしてスワンの論文を要約してみた。

これら5人の提出している成長モデルは相互に極めて類似しているけれども、本論中でもふれたように、その特性に従って3グループに区分することができる。

まず第一はハロッドとドーマーのモデルである。両者は本質的な点においてほぼ完全に一致している。当初から「ハロッド＝ドーマー-モデル」と一体化されて呼び慣わされているのはもっともである。このモデルの際立った特徴は「資本－産出量比率の固定性」の仮定、換言すれば特定の一種類の生産技術しか前提されていないという事実から導出される「恒常成長均衡の不安定性」という命題であった。

第二はソローとスワンの新古典派モデルである。これらのモデルも両者によって独立に構想され、しかも同年に発表されたものであるが、アプローチは異なっているにもかかわらず本質的な点においては酷似しており、その卓越性に関しては甲乙つけがたいように思われる。特に、スワンのリカードの古典派成長理論＝《長期停滞論》の分析は鮮やかであり、賞讃に値するものではないだろうか。

第三はトービン-モデルである。というのは、トービンは「生産係数の可変性」を前提しながらも、唯ひとり成長モデルに貨幣的要因を導入しているからである。

こうして各モデルの想定するタイム・スパンについて見れば、ハロッド＝ドーマー-モデルが最も短期的であり、ソロー＝スワン-モデルが長期的性格を有し、トービン-モデルがそれらの中間的位置を占めていると言

えるかもしれない。

2. ソローは、既述のように、「経済成長理論は長期理論であって、それに適合するのは新古典派的枠組である」との見解から、ハロッド＝ドーマーモデルの前提する特殊なタイプの生産関数を排除し、また貨幣的要因を含まない純然たる実物分析に終始している。これはスワンも全く同様である。

長期的に見れば、生産係数の可変性を許容するような生産技術の一連のスペクトルを前提することは当然のことであろう。これは換言すれば、等産出量曲線が原点に対して強い凸性を持つということである。また、安定的な恒常成長軌道の存在に関わる長期理論においては、後述するように、貨幣的要因の機能する余地はもともと存在しないとみるのが当然であろう。

3. 簡便なスワンの作図を用いて、もう一度ハロッド＝ドーマーモデルと新古典派モデルの相違点を整理しておこう。

[Ⅲ. T. W. スワンの経済成長モデル] で紹介したように、恒常成長均衡点は図1の  $E_0$  によって示され、ここにおいて産出量成長率 ( $y$ )、資本成長率 ( $sY/K$ )、人口成長率 ( $n$ ) の均等が必然的に成立する、すなわち「恒常成長均衡は安定である」というのが新古典派モデルの核心であった。

この場合において、資本成長率  $sY/K = s/C$  ——  $C = K/Y$  —— はハロッドの「保証成長率」であるかということ、厳密にはそうではない。上図1において、 $C$  の特定の値、例えば  $C_h$ ,  $C_0$  あるいは  $C_H$  の一つをハロッドのいわゆる「適正な資本－産出量比率」として固定する場合のみ、 $E_h$ ,  $E_0$  あるいは  $E_H$  が「保証成長率」 $G_w$  となるのである。従って、 $C$  の値に応じて恒常成長均衡が成立するかどうかが定まるが、ハロッドモデルにおいてその値を決定するのは唯一利用可能と想定される生産技術の

特性である。図から知られるように、以下ようになる。

(1)  $C = C_h \Rightarrow G_n > G > G_w$

(2)  $C = C_0 \Rightarrow G_w = G = G_n$

(3)  $C = C_H \Rightarrow G_w > G > G_n$

このように、ハロッド = ドーマー - モデルにおいて  $G_w = G = G_n$  が成立するのは、偶々  $C = C_0$  の性質を持つ生産関数が採択された場合のみである。

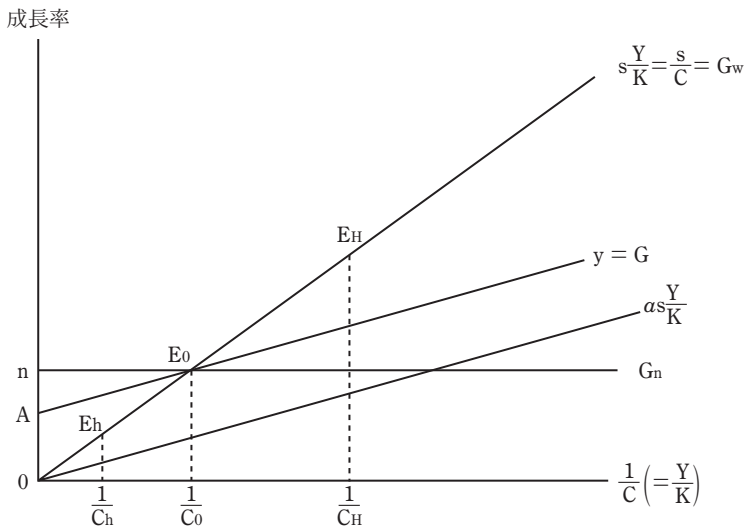


図 1

4. 上述のように、「資本-産出量比率」 $C = K/Y$ が固定的であると生

産技術が固定しており、従って生産係数 $K/N$ も固定しているということに他ならない。生産関数の「1次同次性」によって次のようになるからである。

$$(4) \quad Y = K^\alpha N^\beta \Rightarrow \frac{K}{Y} = \left(\frac{K}{N}\right)^\beta$$

これに対して新古典派モデルの前提は「生産係数の可変性」であるから、同じく(4)から「資本-産出量比率」も可变的である。ハロッド=ドーマー型の生産関数と新古典派型の生産関数は、周知のように、各々下図で表わすことができる。

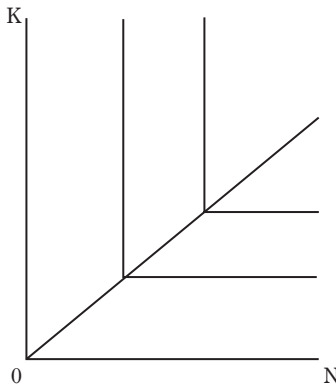


図2

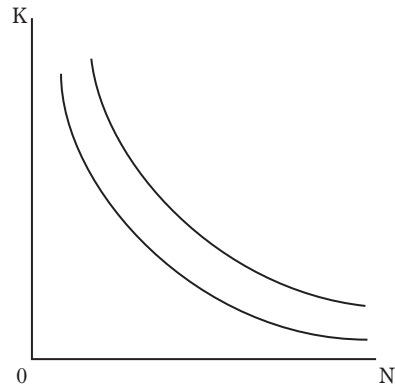


図3

5. 最後にトービン-モデルについて一瞥すると、ハロッド=ドーマー-モデルが「資本-産出量比率の固定性」を仮定するのに対して、トービンは貨幣的要因を導入し、まずケインズの「貨幣賃金の非弾力性」の前提に立って《循環的振動の理論》を構築している。従って、ここでのトービンの目論見はハロッド=ドーマーやソロー=スワンのような「安定的な

恒常成長軌道」の発見にはない。

その意味でトービン-モデルのカバーするタイム・スパンは「(超) 長期」ではなく、特にハロッド-モデルに顕著な《拡散的景気変動理論》へのひとつのアンチ・テーゼの試みといえることができるであろう。

このトービン-モデルが先行するカルドア、ヒックス、グッドウィン等の著名な《景気循環モデル》といかなる関係に立つかは、後の機会に改めて検討してみたい。

6. トービンが「貨幣と経済成長」で提起しているもうひとつの成長モデルはその投資関数の設定について新古典派モデルとは大きく異なる。ソロー＝スワン-モデルでは《古典派の利子論》が前提されていて、貯蓄と投資は常に均衡し、こうして有効需要の過不足は発生しないのに対して、このトービン-モデルでは投資（資本）需要が金融（貨幣）資産との間でのポートフォリオ選択の結果として決定されるのである。こうして彼の投資関数（資本需要関数）は資本収益を決定する資本密度  $k$  と金融収益を決定する利率および期待デフレーション率の関数  $w = w(k, r - \dot{p}/p)$  として表わされることになる。

このように、この場合のトービンの特徴は成長モデルにポートフォリオ・バランスから決定される投資関数——「保証成長率」関数と呼んでも良いかもしれない——を導入することによって、特に政府による貨幣供給がフレキシブルに変化する場合と、固定される場合のインフレ、デフレの発生と、それによって決定される経済システムの均衡点の比較という興味深い分析を展開しているところにある。

しかし、恒常成長軌道という長期均衡の問題として考えた場合には、期待デフレーション率＝0でなければならず、また利率＝資本収益率とならざるをえないであろう。政府証券の利回り（利率）が永続的に資本収益率を上回することはありえないからである。こうして、ポートフォリオ選

択問題は新古典派モデルでは当然のことながら消失することになるであろう。従って、ここでは経済分析はケインズ以前の「貨幣ヴェール説」の世界、すなわち実物経済と貨幣経済の二分法に後退せざるをえないのではないだろうか。その意味において、ソローが主張したように「恒常成長均衡の問題は新古典派的アプローチにこそ適合する」というのは正しいと言わなければならないであろう。

7. 筆者の主な関心事は、これまで繰り返し述べたように、現代経済成長モデルにおける《資本概念問題》であった。この問題について関心や疑問を表明しているのは上述の5人の論者のうちスワンだけである。トービンは全く疑問を抱いていないし、ソローも特に問題視していない。生産物＝消費財＝資本財という単一財経済モデルでの成長分析が一体、どの程度のrelevancyを持ちうるものであろうか。

次稿においてスワンの当該論文への付録「資本への覚書」を中心にして《資本問題》を考察してみたい。

《註》

註1 James Tobin, A DYNAMIC AGGREGATIVE MODEL, *The Journal of Political Economy*, LXIII, No.2 (April 1955).

註2 その数学的証明については同論文の『APPENDIX』を参照のこと。

註3 James Tobin, MONEY AND ECONOMIC GROWTH, *Econometrica* (October 1965).

註4 T. W. Swan, ECONOMIC GROWTH AND CAPITAL ACCUMULATION, *The Economic Record*, XXXII, No.63 (November 1956).



## 〔研究ノート〕

# 「ネットスーパー」の成長性

光岡 健二郎

2000年に㈱西友がスタートさせたオンラインのスーパーマーケット（日本では「ネットスーパー」と言われる）は、その後幾つもの企業が参入と撤退を繰り返しており、サクセスストーリーを作るまでには至っていない<sup>①</sup>。B2C型のオンラインショップも食料品や衣料品など生活用品市場への浸透は未だ極めて低い。オンラインスーパーマーケットの成長は望めないのか。本研究ノートは、このテーマについて、テスコを先駆者としたオンラインスーパーマーケットの先進国である英国の文献データと、日本の西友ネットスーパーのシステム開発者である㈱アートボックスへの取材をもとに定性的な分析を基に、筆者自身の今後の研究のための仮設定を意図して考察したものである。

筆者の考察結果によれば、オンラインスーパーマーケットの発展の方向は、マルチチャネルスーパーストアの可能性を持つ「テスコ型」、ウエアハウス・オンラインスーパーストアの可能性を持つオカード型、現在アートボックス社が構想していると筆者が推量するデリバリー・スーパーストアの3つの方向がある。しかし筆者の考えでは、この3つの発展の方向はいずれかに収斂するのでも、市場選択されるのでもなく、交互作用を起こしながら進化して、業態としては異なる仕組みを持つ「オンライン融合型スーパーストア」を誕生させて行くであろう。

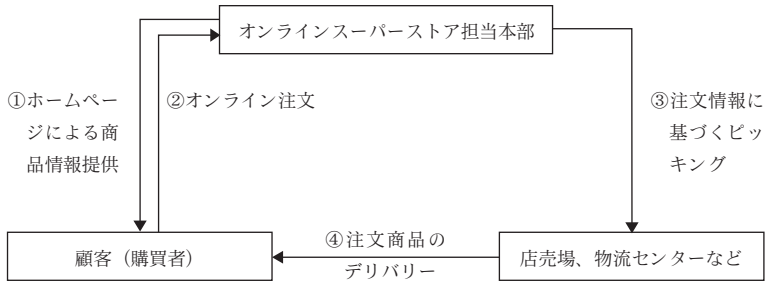
## はじめに

小売業の業態を決める主な要因は①品揃え特性（総合か専門か）、②サービス（価格訴求かサービス訴求か）、③組織形態（チェーンか単独店か）、④販売形態（ワンツーワン型か、マス対応型か）である。①②について歴史が示唆する発展原理は、サイクルを描く（①についてアコーディオン理論、②についてマクネイア理論、真空地帯理論など）。また、③については投資効率と効果の観点から判定される経営の仕組みの合理性で、その点でチェーンストアシステムを指向すると推定するのが妥当で、現実事例もそのような進展をたどっている。

④については顧客ニーズへの適応性の高さが重視される。この点については、近年の情報技術の革新に基づくロジスティクス革新とそれによるeコマースの技術的な進歩は、元来個別性を持っている顧客ニーズに応じることが困難だったマスマーケティングによる商品調達と販売の個別対応を可能にした。これを基礎としたワンツーワン型の電子小売業は、新しい小売業態の発展の方向を示すものである。言うまでもなく電子小売業の初期の時代には、ウェブサイトの設計や信頼性には難点が多く誰でもが信用して使えることが要件となる小売業の仕組みとしては基本的な障害があった。しかしこの点に関する現在の設計の信頼性が著しく改善したことは一般に認められるところであろう。また、すでに2002年現在16%の世帯浸透を果たしているというブロードバンド時代の到来が、画像による商品プレゼンテーションや迅速なウェブ上のやり取りを可能にしたため商品選択や取引手続きの緩慢さによるいらいら感が改善されるなどが促進要因になって、一般の人々を対象にした生活用品のチャネルであるスーパーストアに於いてもオンラインによる販売が模索され始めた。以下の論考の前提として、オンライン販売のスーパーストアの消費者顧客との取引模型を以

下に示しておく。

図1 オンラインスーパーストアの基本的仕組み



購買者は、直接またはホームページ経由で会員登録をした後、店舗サイドの品揃え戦略によって決定されるホームページを閲覧して商品を選択(①)、顧客へ提供できる安心と安全管理が決め手になる手順を経てインターネットを活用したオンライン注文(②)する。店舗側は、注文情報に基づき、店舗または物流センターなどでビッキング専門の担当者が顧客に代わって商品を選択し(③)、配達手順に入る(④)。①から④がオンラインスーパーストア運営の核心となる領域である。

以上のような事情はオンラインスーパーストアの先進国の英国でも同じである。

以下に、英国のオンラインスーパーストアの状況を概観した後、テスコドットコムに焦点を合わせて考察し先進事例が示唆するオンラインスーパーストアの課題を抽出する。その上で、オンラインスーパーストアの重要な経営課題にテスコドットコムと全く異なるコンセプトで対応しているオカードについて検討する。この考察に続いて、日本の「ネットスーパー」進出企業の業態フォーマットを検討したのち、テスコドットコムの事例分析の結果抽出した課題について、将来の発展の方向を仮設する。

## 1. 英国のオンラインスーパーストア市場の概況

英国のオンラインスーパーマーケットは7億3000万ポンド（約1460億円）で英国グロサリー市場の1パーセントを占めるといわれる<sup>(2)</sup>。

この市場の将来性については、見解は多様であり、まだ、収斂した見解が出るに至っていない<sup>(3)</sup>。しかしこれまでの推定実績で見る限り、市場規模は1999年の1億9000万ポンドから2000年、3億2000万ポンド、2001年、4億7500万ポンド、2002年の推定6億ポンドまでその成長率は大きい。この背景として、オンライングロサリーを展開している各社の事業概要の分析から次が指摘できる<sup>(4)</sup>。

- ①顧客の生活スタイル／買い物スタイルの変化
- ②買い物チャネルとしてのインターネットの発展と普及
- ③店舗型スーパーマーケットの売上げの停滞と新チャネルの模索
- ④実用モデルとしてのテスコドットコムモデルの成功
- ⑤ビジネス界全体のワンツーワンマーケティングへの指向

この成長をリードしてきたのは当然ながらインターネットの普及とそれに歩調をあわせたチェーンストア各社のオンライン利用可能地域の地域カバレッジの拡大である。英国のグロサリーの主要チェーンである5社のすべてがこの分野に進出しており、その中でもグロサリー業界でトップの座にあるテスコの貢献が大きい。実際、表1に見るとおり2003年現在テスコドットコムは、英国のほとんどの世帯で利用が可能で、その世帯カバレッジは92.5%を占めている。それをベースに52%のマーケットシェアを得ていると推定される。

## 2. テスコドットコムビジネスモデルの特徴

### (1) 業態特徴

テスコドットコムが1996年にテスコのオンラインスーパーマーケット（グローサリー）として独立した事業部門として設立されてから、今日までの歩みは別表の通りである。注目されるのは、テスコ本社から切り離されて3月に独立した年の2000年末には、取扱商品を食料品以外に拡張して、書籍やCD、ビデオ、金融関連商品、ベビー用品、乳幼児グッズや家庭雑貨なども取り扱う複合電子小売商業としての業態に転換していることである。オンライングローサリーからのこの業態発展を通して、利益を生む店舗グローサリーを起点にしたブリックアンドクリック型のスーパーマーケットを、インターネットを複合カテゴリー商品の販売チャネルとして活用することによって、儲けの仕組みをマルチカテゴリーのブリックアンドクリック型スーパーストアに組み込んだ新しい型のオンライン融合型スーパーストアに転換したのである。海外進出も果たしており、テスコドットコムのオンライン・モデルは2004年現在、アイルランド、米国、韓国、タイにも進出している。

表1 英国オンライングローサリー市場の世帯カバレッジとマーケットシェア

チェーン名	売上げシェア (%)	世帯カバレッジ (%)
テスコドットコム	52.0	96.5
センスベリーズトゥユー	18.0	72.0
アスタドットコム	13.0	40.0
アイスランドドットコム	9.0	90.0
オカード・ウエイトローズ	8.0	..
合計	100.0	..

出典：IRN Research (2004)

テスコドットコムは、この業態進化によって2001年まで続いた赤字経営を2002年度には黒字にし、表2に見るとおり、ヨーロッパ、アジアの海外を含むテスコグループの総売上寄与率では2003年現在1.6%、イギリス国内をベースにすると1.8%ではあるが営業利益率でグループ全体のそれ(4.75%)に迫る2.68%を実現しテスコグループの利益事業部門になった。2002年8月には、ポケットショッパーと呼ばれるソフトウェアを使ったm-commerce(モバイルコマース。携帯電話などの無線環境を利用した商取引)にも乗り出している。

表2 テスコ売上げと営業利益推移(2000~2004) (単位:百万ポンド)

	2000	2001	2002	2003	2004
テスコドットコム売上げ	52	237	356	447	577
年度成長率	-	+356%	+50%	+25.6%	+29.1%
利益/(ロス)	-	(9)	0.4	12	28
マージン総額	-	-3.79	0.1	2.68	4.85
テスコ・グループ総売上げ	20,358	22,773	25,654	28,613	32,989
年度成長率	-	+12%	+13%	+11.5%	+15.2%
税引き前利益	933	1,054	1,201	1,401	1,684
マージン総額	4.58	4.62	4.68	4.89	5.10

出典: Tesco PLC—Annual review and summary financial statement 2003, 2004

## (2) ビジネスモデル

### 1) オンライン融合の複合カテゴリースーパーマーケット

前述のように、ブリックアンドクリックと言われる店舗販路とクリック販路すなわちテスコドットコムの並列である。このモデルの採用により、店舗販路で築き上げた顧客基盤とブランド力に支えられた強力な購買力を伴うマーチャндаイジング力を活用してオンラインショップ展開のためのベンチャービジネスにかかる開発コストを下げる事ができた。こ

とに顧客獲得費用の抑制効果が大きいのは容易に想像がつく。もちろん、既存チャネルの店舗テスコに対するカニバリゼーションは起こったに違いない。しかし、これは2つの道筋で解決することができたはずである。ひとつは購買チャネルが増えることによるテスコグループ顧客全体の購買頻度の増加である。この効果は、テスコ、あるいはオンライングロサリーに限らず、多くの店舗ベースの小売店がオンライン市場に進出するに当たってブリックアンドクリック型でブランド全体の売り上げ増を実現していることで証明されている<sup>(5)</sup>。アメリカからの報告であるが、オンラインショップが店舗小売店と並立で展開する傾向は強まっている<sup>(6)</sup>。

それ以上に店舗とオンラインの複合型がテスコの新しいビジネスモデルになるのは、次の理由による。すなわち、店舗型の現在のビジネスモデルではイギリス最大の売上げを誇るテスコドットコムにしても、次項に続く“ピッキングモデル”の項で述べるように顧客の要望に十分にこたえる品揃えをオンライン店頭で実現することは出来ない。ところが、テスコドットコムは、表3に示すようなテスコの強いブランド力で横断的に統制管理した、12のオンラインカテゴリーショップを展開している。実店舗と電子小売商業を融合した、この品揃えの拡充こそは、次世代型のスーパーマーケットのモデルとなるものである。

テスコの事例が示していることは、オンラインスーパーマーケットを単独で展開しないで、テスコの強力なブランディング政策を前提に、製配販ネットワーク・ショップとして展開することによって総合スーパーマーケットとしてのテスコの力が発揮できるということである。この背景にはテスコのもうひとつ重要な経営仕様の特徴、すなわち、テスコを含むイギリスのスーパーマーケットの特徴とも言えるプライベートブランドによる品揃え強化体制がある。よく知られるようにプライベートブランドの特質のひとつは、商品の企画・製造から調達までのサプライチェーンを自己管理できるところにある。グロサリーを中心としたプライベートブランド

による在庫調整の弾力性とその他の商品のメーカーとのパートナーシップ契約による直接配達方式が、品揃えの幅を広げながら表3に示すように、テスコドットコムとしてのホームデリバリーの円滑な実施を可能にしている。

表3 テスコドットコムのカテゴリショップとデリバリー方式

商品カテゴリー	デリバリー方式の特徴
グロサリー (食品雑貨)	顧客が発注時に申請した時間帯に配達。最短は翌日配達。大規模最寄店でピッキングスタッフがストアピッキングして配達。
ワイン	ワイン専門メーカーとパートナーシップ契約を結び、顧客が発注時に申請した時間帯にウェアハウスピッキングにより配達。注文日から3週後までの配達日時を指定できる。ただし、発注量に応じ、通常は3~4日ないし6日以内。
家電製品	製品によって店頭ピッキング、ウェアハウスピッキングで契約業者が代行配達または提携メーカーから直送。配達指定は注文日起算で3日から15日。
DVD ビデオ 音楽CD コンピューターゲーム	原則として注文の24時間以内の指定に対応してウェアハウスピッキングで契約業者が代行配達または提携メーカーから直送。在庫切れの場合は5日以内に配達。解禁前予告販売のものは解禁後直ちに配達。
書籍	注文を受けて24時間以内にウェアハウスピッキングで契約業者が代行配達。アマゾンドットコムに対抗した在庫点数。万一在庫切れの場合は5日以内に配達。予告販売のものは出版後直ちに配達。
花き	生花業者とパートナーシップ契約、午後3時前の受注なら翌日配達。
乳幼児製品	店舗在庫のないものも受注。契約業者が代行配達または提携メーカーから直送。
パーソナルファイナンス	オンライン購入に適応。
トラベルケア	2002年12月から開始。

注) Insight Research[2003], IRN Research [2004]および筆者の在英協力調査スタッフによる取材結果をもとに筆者が推定。

## 2) 品揃え概要

実店舗のテスコの業態はグロサリーであるから、食料品を中心とした品揃えである。しかし、表3で分かるとおり、テスコドットコムの取り扱ったカテゴリーは、家電を始め、書籍、DVD、ビデオ、音楽CD、コンピュー



ターゲット、花き、また、パーソナルファイナンス、トラベルケアなどの分野にまで拡大している。また、乳幼児製品、ワインなどでは、実店舗ではカバーしない品揃えを顧客の特別需要に応じて供給している。すなわち、テスコグループ全体で品揃えの幅を広げ、また、補充関係を保ち、全体としてテスコの顧客層のテスコグループ外への流出を防ぐとともに、実店舗では大きな構成を占めていないカテゴリー商品をテスコドットコムがカバーしてテスコ全体の売上に大きな貢献をしていることが想像される。筆者が情報収集した限りでは、テスコドットコムの売上の約50%はグローサリー部門が占めるとともに、実店舗の売上の減少は特に報告されていないので、テスコドットコムが理論的には懸念されるカニバリゼーションを起こさないで、テスコ全体の売上げを底上げしていると見るのが妥当である<sup>7)</sup>。

### 3) ピッキングモデル

テスコのカスタマーセンターでオンライン受注した商品は注文者の居住地の近くの店舗に直ちに伝えられ、ピッキング専門担当店員が店内売り場から通常の買い物客が商品を買う物籠に入れるのと同じ仕組みでピッキングするストアピッキングモデルに基づいて集荷される。一般にネットスーパーマーケットのピッキング方式にはこの実店舗内でピッキングするストアピッキング方式と、複数店舗への配送基地となる流通センターでピッキングするウェアハウスピッキング方式がある。実はこのピッキングシステムの違いがオンラインスーパーマーケットの質特性を決定することになるが、このいずれが妥当なシステムなのかは、現在、まだ、結論が出ていない。

現在、日本やアメリカを含め、多くの事例はストアピッキング方式で、テスコドットコムの最高業務執行責任者のグリー・サージェント氏は、テスコグループ全体の総売上の2～5%の現在水準ではストアピッキングモ

デルが経営上の利潤効果を発揮する、と言う<sup>(8)</sup>。すなわち、専用倉庫に在庫を抱えておくより実在の店舗の在庫データをもとにオンライン受注をすることで実店舗とオンラインスーパーマーケットの在庫管理を一元化できるからである。ウェアハウスピッキングについて、ウェアハウス建設と維持のための大きな投資やストアピッキングモデルに比べたデリバリーにおける一顧客あたりの配達距離と時間などを考えると、利用者の大幅な拡大を見ない限り投資効率が低いという判断は当然であろう。ところが2002年に開設して急速に成長してきたオカード・ウエイトローズのニゲル・ロバートソン・ジョイントマネジングディレクターは「我々のビジネスモデルはウェアハウスからの配達（ウェアハウスピッキングモデル）で、オンライングローサリーはこの方式でないと利益を上げることができない」とサージェント氏とは正反対の見解を表明する<sup>(9)</sup>。次節で考察する。

ピッキングシステムに関連して、オンライングローサリーの最大の課題は商品の在庫切れの処理である。

現在の対処法は、希望の商品がない場合は、過去の購入履歴などを参考に店舗側で代替りの商品を選ぶか顧客に問いあわせて代替品を配達する一方、気に入らなければ返還することができる仕組みを採用している。この仕組みはセズベリーなど他のネットスーパーマーケットもほぼ同様であるが、この代替品サービスがネットスーパーマーケットへの不満の原因になっていることが報告されている<sup>(10)</sup>。

注文時に提示されている商品の在庫切れは、技術的にはネット画面の商品情報と在庫の食い違いから起きるもので、在庫情報をストアコントローラーと共有していないために起こる。日本の本格的なオンラインスーパーマーケット第1号の西友ネットスーパーのシステム開発者である㈱アートボックスの森社長はこの問題の解決策として顧客の品選びの最終の実行システムであるピッキングそのものの代行を業務する新発想のオンラインスーパーマーケットを提案するが、第7節で言及する。

テスコドットコムの開業からの経過（テスコ年次報告書などによる）

1996年

ロンドンとリードにある5つの直営店舗でインターネットにより受注する食料品小売を開始した。大手小売業による英国で最初の食料品オンライン販売業である。

1998年

オンライン・ショッピング・サービスを提供する Tesco Direct（テスコ・ダイレクト）（[www.tesconet.co.uk](http://www.tesconet.co.uk)）がテスコグループのホームページに登場し、実施店として22店を掲載した。

1999年

テスコ・ダイレクトのサイトは英国全世界の50%の世帯で視聴できるようになった。サイトに掲載された実施店は約100店。

2000年

テスコのオンライン・サービス拡大戦略に基づき、テスコドットコムとしてテスコ本社から独立することになり、2000年3月8日にテスコドットコムが設立された。2000年末までに、同社の配達可能エリアとして英国の90%の家庭をカバーする230店舗がオンラインショッピングに対応できるようになった。また、この時点までに取扱商品はテスコの主要取り扱い品目のグローサリーから、書籍やCD、ビデオ、金融関連商品、乳幼児グッズや家庭雑貨など、食品以外の商品もオンライン・サービスの品揃えとして拡張した。また、テスコドットコムはアイルランド共和国にも設立された。

2001年

デジタルテレビネットワークの OnDigital（オンデジタル）による食料品販売を開始した。

2002年

2002年初期までにテスコドットコムは、英国の95%の世帯をカバーし、参加店は300店舗となり、既にこの時点までに市場参加していたセンズベリー、アスダ、アイスランドなどの英国国内の大手スーパーストアによるオンラインスーパーストアなど競合他社を大きく引き離すマーケットシェアを確保してオンラインスーパーストアとしての地歩を固めたとみなしてよい。また、この年、公表されている損益計算書表の上で初の黒字に転じた。また、この年までにテスコドットコムはアメリカ市場で Safeway Inc.（セーフウェイ）と提携して、米国で、テスコドットコムモデルによるオンライン・ショッピングを開始した。8月には、ポケットショッパーと呼ばれるソフトウェアを使った m-commerce（携帯電話などの無線環境を利用した商取引。以下、「モバイル・コマース」とする）を開始した。

2003年

この年度の年次会計報告で1200万ポンドの利益を計上した。これは、英国を拠点とするオンライン食料品小売業として唯一利益を収めた会社となった。また、タイでオンライン・ショッピング・サービスを開始する計画を発表。その後テスコドットコムは、アイルランド、米国、韓国でも展開している。

### 3. オカードモデルの検討

前節で、テスコドットコムが品揃えの質量両面にわたる限界と、仕組みの上でこの問題と密接に結びつく在庫切れにあることを指摘した。この課題は、次項で指摘する日本の「ネットスーパー」も同様である。

品揃えについては、テスコドットコムが展開するカテゴリー複合のブリックアンドクリック型のスーパーストアがひとつのソリューションを提示している可能性を指摘した。しかし、ピッキングにおける在庫切れは、日英ともに根本からの解決策の見出せない、深刻な課題である。

この課題について、マークアンドスペンサーから独立した二人のディレクターが英国の老舗のスーパーマーケットであるウエイトローズと提携して2002年に創業し、急速にテスコドットコムに迫る成長をして注目を集めているオカードドットコムは、テスコドットコムが経営政策としては否定しているウエアハウスピッキングこそが解決策だとしている。オカードドットコムは現在ウエイトローズと一体経営となっているので本論ではこのビジネス主体を「オカード・ウエイトローズ」と表現するが、このオカードモデルについてフィナンシャルタイムスのオンラインニュースFT-ITのワールドレポートを参考にその概要をレビューしてみる<sup>(11)</sup>。

オカードモデルは、オラクルコーポレーションの開発協力によるシステムで、スポークアンドハブモデルと呼ばれる。ハットフィールドをハブ(基点)としてここでオンライン注文を集約し、ピッキングされた商品は、ポッズ(pods)とよばれる小型の温度調節装置のついたユニットに入れられ、6個のポッズが大型トラックのトレーラーで、デリバリースタッフが待機している、10,000世帯をカバーするスポーク(spoke)と呼ばれる場所まで運ばれる。最初のスポークは、ハットフィールドから車で約2時間半の距離にあるウエイブリッジにある。

このスポークアンドハブシステムによるピッキングからデリバリーまでの工程が効率よくITシステムにより運営管理されていることが、在庫切れのほとんど起こさない受注を可能にして顧客満足を獲得し、これまでの成長を実現してきたとされる。

ウェイトローズは元来オーガニック生鮮食品に力を入れていたことで分かるように、ウェイトローズ・オカードが展開するオカードドットコムを取り扱い商品は食料品であるが、その品揃えは、約10,000品目でテスコドットコムより広範囲の品揃えをしている。顧客は高所得者が多いとされ、マーチャンダイジング政策もそこをターゲットにしている。

実際の商品はウェイトローズの商品カタログから提供されている。また顧客の問い合わせやクレーム処理サービスは専属のコールセンターに委託し、ここで専門のスタッフが対応している。

課題であるピッキングセンターでもあるウェアハウスの在庫は、顧客の発注情報の詳細分析に従って調整、管理されている。顧客の発注情報をウェアハウスにいるスタッフのピッキング・リストに送るこのマネジメント／オペレーション・システムは、オカード・モデルのシステムによって稼動している。自動式倉庫の中を走る「トレイン」と呼ばれるモノレールは20分ごとに各ピッキングエリアに到着し一定間隔で商品が詰められ、箱は検品の後ハットフィールドかウェイブリッジからの配送へ向け「ポツズ」に詰め込まれる。

ウェイトローズ・オカードの経営陣は、当面の利益よりもより多くのウェアハウスを持つことで業務拡張を実現することを目標にしている。具体的にはウェイトローズとの提携のもとで2003年から3年～5年をかけて英国全土での展開を実現し、この期間にオカードドットコムを利益を生むオンラインスーパーマーケットにすることを目指している。

#### 4. 日本のオンラインスーパーマーケット

経済産業省発表の調査データによると2003年の一般消費者向けeコマース（以下「B2C」）取引額は4兆4,240億円と報告されている<sup>(12)</sup>。市場の大きさとしては小売商業市場全体の1.6%の規模にすぎないものの、小売業態の雄である百貨店の2003年の売上げ規模が8兆1,120億円であることを考えれば<sup>(13)</sup>その規模は既に小売流通市場において無視出来ない段階に至っているといえる。しかもその伸び率は前年度比64.8%増で急速な拡大を見せている。しかし一方、経済産業省発表のデータをもとにB2Cの拡大に寄与した品目を調べると旅行、エンターテインメント、各種サービス、不動産などで、食料品や衣料雑貨など日用品市場への浸透は顕著でない。もっとも、オンラインスーパーマーケット先進国と目される英国も既述のようにグローサリー市場全体の1%程度の占有率である。英国同様、その成長の可能性を含め、模索段階の業態と考えるのが妥当であろう。

##### (1) 「ネットスーパー」の概要

日本のオンラインスーパーマーケットの開発は、1999年に㈱アートボックスが開発した食品スーパー向けインターネット利用の受発注システムであるココデスのスタートに遡る。このココデス・モデルは日本で最初の「ネットスーパー」と言われるもので、このモデルの汎用型の最初の適用が「西友ネットスーパー」で、阿佐ヶ谷店を最初の出荷店舗として、2000年5月1日東京都杉並区全域をサービスエリアとしてスタートした。現在（2004年10月）、20地点まで出荷店舗を広げて西東京のほぼ全域でサービスを展開している。西友に次いで、イオングループやイトーヨーカ堂を含む大手スーパーマーケットも参入した。しかし、実態は、公式の統計データは皆無で、また、新設や閉鎖も多いことであることからわかるよう

に、まだ安定した市場形成に向かったの試行錯誤の段階とっていい。前述のようにB2C型の電子小売商業の食料品や衣料品など生活用品市場への浸透は未だ極めて低い。

その仕組みはどのようなものか。主な日本の「ネットスーパー」の概要を整理してみると表4の通りである。（伊勢丹のクイーンズ伊勢丹，東急ストアのプレッセは、2004年秋現在で閉鎖しているが、両方とも実店舗は高級食材を扱っている店舗であり、参考データとして提示した）

表4 日本の主なオンラインスーパーストアの概要

	西友 ネットスーパー	イトーヨーカ堂 アイワイネット葛西	伊勢丹 クイーンズ伊勢丹	イズミヤ 楽楽マーケット	東急ストア インターネット スーパーマーケット	マルエツ マルエツネットスーパー	ジャスコ aeonshop
							
	<a href="http://www.the-seiyu.com">http://www.the-seiyu.com</a>	<a href="http://www.iwc.com/shop/products.html">http://www.iwc.com/shop/products.html</a>	<a href="http://www.queenstokai.com/bc/ToC/queenstokai/EDC/edc_store_top.jp">http://www.queenstokai.com/bc/ToC/queenstokai/EDC/edc_store_top.jp</a>	<a href="http://www.iw-net.jp/netsuper">http://www.iw-net.jp/netsuper</a>	<a href="http://www.tokai.com/online/shop00.php?tenant_no=0001">http://www.tokai.com/online/shop00.php?tenant_no=0001</a>	<a href="http://www.aeonshop.net/MARUETSU/top.php">http://www.aeonshop.net/MARUETSU/top.php</a>	<a href="http://www.aeonshop.com">http://www.aeonshop.com</a>
サービス開始	2000年5月	2000年9月	2001年1月	2001年3月	2002年10月	2003年7月	2000年11月
主要ターゲット	一般	一般	ベター	一般	一般	一般	やや小さい子供のある家庭向け
サービス形態	即日可	即日可	即日可	即日可	即日可	即日可	即日不可
MD	生鮮・食品・日用品	生鮮・食品・日用品	生鮮・食品・日用品	生鮮・食品・日用品	生鮮・食品・日用品	生鮮・食品・日用品	生鮮・食品・酒・衣料・家具・家電
アイテム数	約3,000	約1,000	約1,300	約1,800	約1,500	約3,000	食品・日用品は1,000以下
価格	店頭価格	WEB価格	店頭価格	店頭価格	店頭価格	店頭価格	店頭価格
送料	525円/回 5,000円以上無料	525円/回	500円/回	315円/回	300円/回	525円/回	500円/回
配送	自社スーパー袋	日通スーパー袋	自社（水曜配達なし）スーパー袋	自社スーパー袋	東急ロジテムスーパー袋	スーパー袋	宅配ヤマトダンボール
お届け指定	当日・翌日のみ有	有	当日のみ有	翌日まで有	当日のみ制限有	当日・翌日のみ有	日付・時間帯指定有
ギフト/拡張性	別途有	宅配版のアイワイネットがあるが運賃なし	なし	別途有	なし	なし	インショップとして有
レシピ	なし	自称レシピがあるが意味なし	なし	あり	なし	なし	なし
支払	クレジットカード代引き	自社カード代引き	エブリデイカードのみ	クレジットカード代引き デビットカード	クレジットカードTOPカード割引代引き	クレジットカード代引き	クレジットカード銀行振り込み
メルマガ	あり	あり	なし	あり	なし	あり	なし

出所：㈱アート・ボックス トレンド総研

## (2) オンラインスーパーマーケット日本モデルの課題

日本のオンラインスーパーマーケットの運営上の課題を顧客側から見る

と、指摘された頻度の高い順に、①規約の分かりにくさ、②品揃えの少なさ、③配達料金の高さ、④商品の内容情報の少なさ、⑤注文手続きの煩雑さが指摘されている<sup>(14)</sup>。

これは国民生活センターが利用者へのアンケートをもとに分析した結果であるが、一番目の「規約の分かりにくさ」は、説明不足など事業者の管理技術に起因する課題でオンラインスーパーマーケット固有の問題ではない。また、2番目の「配達料金の高さ」は、購入量ないし額の多寡によって料金体系を決めている事業者が多く、一定額以上の購入者からは料金徴収をしない事業者が多い。5番目の「注文手続きの煩雑さ」についてもこれは購入のための基礎知識とスキルを必要とする商品に特有の初心者に多い導入期に必然的に伴う課題である。従ってこの課題のうちで、オンラインスーパーマーケット普及にとって重要な課題は、2番目と4番目のマーチャンダイジングにかかわる課題だけである。しかし、実はこれはオンラインスーパーマーケットの将来を決める決定的な課題で、かつ、現在のビジネスモデルをもとにする限り解決の困難な課題である。

すなわち、店舗購買で商品を選択評価するとき人々は視覚を始め五感のすべてを使っており、売り場もそれを意図して演出しているので入手する情報の種類も量も非常に多く、また、顧客自身もそうした多様な情報をかなりの程度、同時処理することが出来る。しかし、オンラインスーパーマーケットで提供できる情報はホームページの上では2次元情報であり、一時にプレゼンテーションできる商品数もモニター画面の範囲内でしかない。事実、前節の2項で述べたように既設の事業者の取扱商品数は、食品雑貨を中心としている通常のオンラインスーパーマーケットでは3千品目前後である。実際の実店舗のスーパーストアを含むスーパーストアが3万品目ないし10万品目前後の、食料品に限定しない多種の品揃えをしているのに比べればきわめて貧弱と言わざるを得ない。

そのような品目限定的な品揃えでも品切れや、希望する商品がネット上



の商品リストにない、という不満が発生するのは、品揃えの豊富さが店舗評価の基本である小売業にとって、致命的な欠陥とさえいえる。多くの事業者は代替品の選択を提案しているが、顧客にとって、それは次善の商品にしか過ぎず顧客満足につながる仕組みでない。注文時の商品情報が不備だという不満も、自分で探し五感を動員して選択する店頭購入との比較において指摘されるわけで、オンラインスーパーマーケットの発展の課題はこの問題の解決策にかかっている。

## 5. アートボックス社の提案

前出のアートボックスの森社長は、筆者の取材に対し同社が開発指導してきたネットスーパーシステムの課題としてピッキングと在庫切れの問題を指摘して次のように言う。

「私たちが開発した『ネットスーパー』モデルは店頭小売業に特化したeコマースシステムであるが単なる受発注システムではありません。すなわち、受注と納品の時間差を活用して廃棄ロスを抑えることで、日配品、生鮮食品など原価管理商品における在庫管理に有効で、しかも受注量を見ながら行う価格コントロールは店頭商品よりも効果的にでき、値下げしないで売り切ることが店頭販売より有効にできます。これにより粗利益率向上が可能です。しかし半面、店頭の棚に商品が並ぶにはタイムラグがあるので、在庫管理がどこまで進んでも欠品は避けて通れないものであることも分かってきました」

一方、受注品のピッキングアンドデリバリーの量的変動をなくすことはできないので、デリバリー要員を常に状況に応ずるように過不足なく配置することはできない。つまり、手待ちコストの発生は避けられない。その一方、ストアピッキングを前提にする限り、「ネットスーパー」の店頭在庫がストアコントローラーの在庫データとシンクロナイズ出来ていない限

り欠品は必ずでてくる。同社ではこれらを解決する仕組みが「次世代ネットスーパー」の条件だと考えて、ストアコントローラーと在庫データの共有をはかる一方、欠品は避けられないことを前提に、これまでの「ネットスーパー」とは独立したデリバリー機能に特化した業者の育成によって次世代型の「ネットスーパー」を開発しようとしている。森氏はこの構想について「このデリバリー業者の機能を高めることができれば、店舗はデリバリー業者のための商品センターという機能を強めることになるかもしれない。そうなると次世代型の『ネットスーパー』マーケットの事業主体者が小売商業からデリバリー業者にシフトすることも予想される」と言う。

この構想では、サービスエリア内の食品スーパーマーケット各店は出荷可能商品を登録しピッキング体制を整備して顧客開発は基本的にデリバリー会社が担う。したがって、一店舗に複数のデリバリートラックが商品をピックアップしにくることも予想される。配達時間も各デリバリー会社の考え方で自由に設定することになる。

「これらのランダムな商品調達を可能にするのが、次世代型のネットスーパーソフトということが出来ると思います。詳しい内容は現在ソフトウェア開発中のため公開できませんが、この狙いはスーパーマーケットのネットスーパーマーケット開発費を最少にし、短時間で『ネットスーパー』普及を目指す点です。また予想される顧客のメリットは、サービスエリア内に複数の食品スーパーが『ネットスーパー』に参入してきた場合に、『ネットスーパー』のポータルサイトからサービスを比較しながら利用することが出来るようになることです。」

アートボックス社のモデル概念を機能面から推定すれば、複数の契約「ネットスーパー」のパートナーとして①顧客の受注開発、②決済管理を含むオンラインスーパーマーケットのシステムサポート、③カスタマーサービスとデリバリーなどを主な機能とするビジネスパートナーモデルと

予想される。

筆者の独断的な解釈を許してもらえらるなら、次世代「ネットスーパー」ビジネスモデルを「オンライン融合型デリバリー・スーパーストア」として登場させる構想と言える。

## 6. 仮説的結論としての次世代型オンラインスーパーストアの3つのモデル

小売業経営の基本課題は商品の取り揃えを中心としたマーチャンダイジング活動である。この点についてオンラインスーパーマーケットも事情は変わらない。その一方、これまでの筆者の考察結果によれば、オンラインスーパーストアの発展の方向は、マルチチャネルスーパーストアの可能性を持つ「テスコ型」、ウエアハウス・オンラインスーパーストアの可能性を持つオカード型、現在アートボックス社が構想していると筆者が推量する「オンライン融合型デリバリー・スーパーストア」の3つの方向がある。この3つの発展の方向はいずれかに収斂するのでも、市場選択されるのでもなく、交互作用を起こしながら進化して、業態としては異なる仕組みを持つ「オンライン融合型スーパーストア」を誕生させて行くであろう。その転換の過程で品揃え機能に関連して次の課題が浮かび上がってくるに違いない。

### ①品揃え戦略としてのチャネル戦略

オンラインスーパーマーケットの特質はメーカーとの密接なパートナーシップ関係を築くことによって自ら商品を企画し製造、供給ができることにある。その柱は、PBによる自己主導の商品開発とメーカーとのサプライチェーンの確立によるブリックアンドクリック型の電子小売商業のチャネル戦略としてのカテゴリーチャネルの展開であろう。

### ②商品情報チャネルとしてのオンラインショッピング機能

ターゲット顧客の生活ニーズに合致した複合的な商品カテゴリーチャネ

ル（カテゴリーコンプレックス）を展開するに当たっては、実店舗で店頭在庫する商品だけでは魅力的な展開は困難である。店頭とオンラインスーパーマーケットとの補完的な機能運用が求められる。すなわち、実店舗は、日常生活の生活の基幹商品の顧客本人と代理人（ピッカー）のためのピッキングセンター機能を果たすとともに、新しい商品を探索する顧客のための販売と陳列のデモンストレーションセンター機能を果たす。一方、オンラインスーパーマーケットは、登録会員顧客のための生活基幹商品の受発注と拡大カテゴリー商品および店頭の在庫切れ商品の、代替品の提案を含む受発注とデリバリーのコントロールセンター機能を果たす。

### ③新商品調達とライフスタイル提案

代替品問題はオンラインスーパーマーケットの解決しなければならない重要な課題である。一方、顧客の顕在化した欲求とニーズに応えることが小売業の役割である。新しいニーズの顧客自身による気づきとそれを促し応えるための商品調達が小売業の役割であるとの認識に立てば、PB開発力をベースに代替品の対応においては、単に代替品の提供ではなく、推薦商品を介した生活提案に切り替えることで、在庫切れ問題を生活提案活動に切り替えることができる。

本論の考察に基づけば、オンラインスーパーストアは、「テスコ型」「オカード型」「オンライン融合型デリバリー・スーパーストア」の3つの方向が、それぞれ上述した3つのマーチャンドライジング上の課題の解決を模索する過程で現在稼動している店舗小売事業と融合しながら次世代スーパーマーケットのビジネスモデルを産んでいくのではないかと考えられる。筆者はこれを「ネット融合スーパーマーケット」と名づけておこうと思う。

〈注〉

1. わが国で一般にセルフサービス形式の小売店舗チェーンを「スーパーマーケット」または「スーパーストア」と言い、オンラインチャネル形式のものを「ネットスーパー」と呼ぶ習慣がある。しかし、本論では、「スーパーマーケット」が英米語で言う“grocery”，すなわち主として食料品の品揃えを特徴としている場合に多く使われることおよび「ネットスーパー」が和製英語であるので使用を避けたいという二つの理由で、一般呼称としては「オンラインスーパーストア」を、特に食料品を主な品揃えとする店舗チェーンの場合を「オンラインスーパーマーケット」と呼ぶことにする。
2. 英国のIGDは、2010年のグロサリー市場の業態別シェア予測として、次の二つのストーリーを提示している。(IGD“FUTURE FOCUS - Future of UK Retailing” 2002, www.igd.com, p.52)  
 註：上表で“Remote Shopping”は、オンライングロサリーを指している。
3. Insight Research “ONLINE GROCERY SHOPPING Steady Growth and Niche Opportunities for Suppliers”, Insight Research, 2003, p.12
4. 英国の主要なオンラインスーパーマーケット各社の事業方針については Insight

Share of UK Grocery Market in 2010

Market segment	Scenario 1	Scenario 2
Destination store	5%	21%
Meal Solution Centre	33%	28%
Remote Shopping	23%	5%
Neighbourhood Shopping	35%	40%
<b>TOTAL</b>	<b>100%</b>	<b>100%</b>

Research [2003] に詳しい。

5. 欧米のオンラインショッピングの店舗が複数販路型で展開する傾向については、小池良治がアメリカの事例を中心に報告している。(小池良治『電子小売店経営戦略』ダイヤモンド社、2000)
6. 米国在住の小池良治氏は、筆者宛の2004年10月12日付けのメールで、次のように報告している。  
 (前略)「先週、ロサンゼルスで米電子小売業協会 (Shop.org) の総会がありました。出席してみると、やはりマルチ・チャンネル・リテラー戦略がどんどん高度化しているのがわかりました。2000年に電子小売店経営戦略を書いたときには、まだまだ、ピュアプレーヤー（専業組）が幅をきかせていましたが、いまや電子小売は店舗系やカタログ系が牛耳っていますね。また、消費者も店舗、カタログ、

電子小売店を回遊して、最適ポイントでショッピングを楽しむ「マルチ・チャンネル・ショッパー」化がどんどん進んでいます。こうしたマルチ・チャンネル・リテラー時代に、電子小売店が求められているのは「タイムシフティング」機能だろうと考えています。これから1～2年は、この方向を模索する大手が増えるように感じます。」

7. Insight Research [2003] , IRN Research [2004] および 筆者の在英協力調査スタッフの取材結果などをもとに推定。
8. Penelope Ordy, Ocado: Grocer grows with hubs, spokes, World Reports/FT-IT, 2003. 2-05, (<http://search.ft.com/search/>)
9. Penelope Ordy : 前掲出
10. Sian Harrington, Online: it's still stalling, The Grocer, ([www.grocertoday.co.uk](http://www.grocertoday.co.uk)), 2003.4
11. 経済産業省商務情報政策局情報経済課 [2004], 「平成15年度電子商取引に関する実態・市場規模調査」 ([http://www.keieiken.co.jp/news/news11/news\\_11.pdf](http://www.keieiken.co.jp/news/news11/news_11.pdf))
12. 百貨店売上高については日本百貨店協会発表の同協会加盟社の2003年4月～2004年3月の売上高合計をもとにした。
13. Penelope Ordy : 前掲出
14. 国民生活センター「ネットスーパー」, 国民生活センター, 2002
15. IRN Research, TESCO-PRODUCT DEVELOPMENT AND JAPANESE STRATEGY, IRN Research, 2004

# 白船・白骨（島々）と四万十川——

## シマル シカル 鯨獣脂・獣皮の視点より

かしわ  
“神集／上高地／海／鮎／鹿／島原”への文化人類学的語源解

郭 安 三

### 序 章

#### 《温泉騒動の別教訓》

この夏(平成16年のこと)、不思議なことに、昔から「海(安曇\*)」、「島々\*」と形容されてきた長野県から始まり、本州・九州(由布院)各地の温泉で問題がおきた。スクープは「週刊ポスト」で、導火線は一昨年にてた松田忠徳氏の『温泉教授の温泉ゼミナール』。

- \* 安曇とは海藻の意。長野県安曇村は全国最大の山葵(ワサビ)栽培地、それを育てる満々たる清流／水車の中にも豊かな水藻が揺れている {「藻」の語源をもふくめ稿末の〈\*補論I〉ご参照}。
- \* ここでは、高砂族——〈\*後注1〉——アミ語・ブヌン語等の「simaR = 脂肪」を「湯ノ花」とみた。通常の島々(アイランド)ないし鯨鯨で説く分は「白骨・白船・上高地とは何か」をのべた Ch.7 に廻してある。

7月、白骨温泉は公共野天風呂での浴剤混入＝偽乳濁＝事件{この温泉がある安曇村の筒木村長は辞職。其の、白骨は草津源泉のホンモノ浴剤・浴精を使用し、楊貴妃も凝脂泉に浸かっていたが、世間の叱りは厳しかった}。8月になると、群馬の伊香保・水上、栃木的那須、箱根、喜多方、名栗などの‘水道水／井戸水’ケース。そして、8月25日、仙台の作並一温

泉<sup>しゅつたい</sup>で出来した‘偽井戸水’話である。

そして、9月1日、群馬・長野の県境にまたがる浅間山が夜赤々と噴火した(16日は東京に降灰)。この御神火(=アガツマ)こそ、丁度、目下全国で崩壊しつつある温泉神話・温泉文化の再建に役だつ救世主的な狼煙<sup>のろし</sup>ではないだろうか。

おもうに、この度の騒動はむしろ“天啓”であり、侃々諤々であった「適否／信用／改善」論とは性質／次元のことなれる討議(すなわち、隠れている氷山深層部への文化的探索・歴史的紀行)をも我々に要求した必須授業といえるようである。

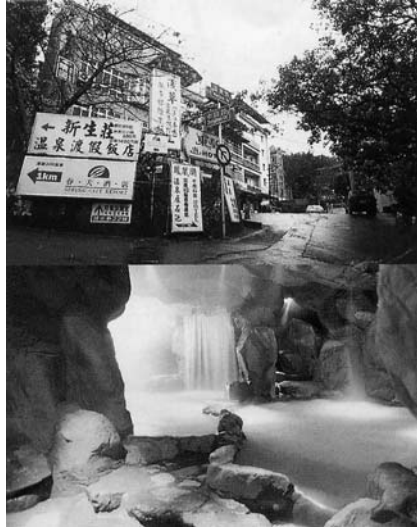


図1 乳白色あふるる台北・新北投(シンパッタウ)温泉。荘主らは皆親日!

必須レッスンとは、

- ①【湯・風呂・吾妻】の語源とか、乳濁物質の縄文期的呼称【脂<sup>シマ</sup>←猪熊鯨の白身】の発掘。
- ②【鯨と山鯨(猪)にある《皮・脂・肉》3層】<sup>シマ</sup>の全一的把握プラス南方(アミ語・マレー語・ジャワ語)的な獣皮称「シカル／クリッ／シシツ」への新認識。
- ③鯨とか土地(作物)に係わる「魚体国土観」「大地母体観」が古代日本にも確存していたことへの学問的鋳入れ。
- ④この海獣(鯨)に因めば、北海道のアイヌ語には14、5例もの鯨<sup>しゃち</sup>——歯鯨の一種——呼称\*があり(知里真志保『アイヌ語獣名集』)、通常の



鯨称はフンペ、リカ、イソ。一方、日本語は両獣種合わせてシャチ、クジラとイサナの三つだけ。この差は数年前からの鯨名探し（すでに30を超した）によって一応逆転したが、鯨称だけを比べれば依然1対15の格差ありの問題。



- \* Ex. 「フンペ・レブン（<sup>神合</sup>礼文島）」「鯨（イソ・ヤンケ・クル）＝鯨を陸に<sup>イソ</sup>追い上げる神」ほか。このアイヌ語例は、北西カナダ・インディアンが建てている「鯨／祖父併せ彫り」のトーテムポール（British Columbia Univ. が蒐集展示）に係わるか？

図2 鯨（シャチ）神。  
——北海道埋蔵文化財センター展示

- ⑤日本語語彙におけるオーストリック的な Ka- / Ki- 接頭辞という【パリ帰りの民族学者・松本信広慶応大前名誉教授を別とすれば、国語学界からは扱われて来なかった】、か細い／か弱いKaとも異なる問題（顔をka- 頬、台湾語のka- 脊）への語構成的接近 {ついでに si- / tsi- 接頭辞（<sup>したる</sup>下流／<sup>したる</sup>設楽／<sup>つかさ</sup>司）も視野に}。そして、
- ⑥“白骨／白船”と直傍の“上高地／島々／山（穂高・安房）”は——それらが何らかのシンボル\*複合（黒潮圏に祖先船avang）であるならば——海神（ワダツミ）信仰を奉じていた安曇族とどう云う関係にあったか等々である。

- \* 「白船」も通常云われる「乳濁した湯舟・木船」ではなくなってくる。果たして如何なる「船」か。

#### 《若干の用語説明、ほか》

オーストリックとは、南洋から西はマダガスカルと東はポリネシアにま

で広がる南島語 (Austronesia) と、主にインドシナ半島およびマレー半島山地部に広がる Austroasia 語の合併称。ウィーン学派の民族学開拓者・シュミット師の命名。なお、オーストロネシア中の Hesperonesian (西太平洋島嶼語群) といえば、フィリピン諸語・バシー海域のバタン諸語・台湾高砂族諸語をふくむ。以下の文中で「南洋語」と記した場合はオーストロネシア中のマライ語／インドネシア語を指し、閩南のアモイ他・海南島の一部・台湾島 (南部が強い)・ペナンとクワラルンプールなどで語られている<sup>ホーローウェ</sup>河雑話【通称台湾語。「雑, laku」はヴェトナム・広東にまで分布していた水路の称——うへの松本師と筆者】のほうは閩系台湾語ないし台湾語でしめす。

この台湾語の中には頗る古い漢語音韻が保存されている【それゆえ唐詩の音読には最適であるし、現在でも李白・杜甫をしのぐのかと評価されている実業家詩人の**歐陽開代氏**も居る】のは多言を要さないが、片や、三分の一 (スワディッシュ表式による計算——安本美典博士と筆者) くらいの、系統出自は多元＝多源である「非漢語」も含まれている。後者の方——若干の日本語語源にも成っている {次の Ch.1 や後注 4 などにも挙例} ——を便宜的に「台 (越) / 台 (南)」で表し、前者の古漢語層をたもつ閩系台湾語の方は台 (漢) で示すこともある。

例えば男子の陽器を示す我等が隠語にマラがあり、松本信広師 (『日本神話の研究』『東亜民族文化論攷』などを著した) は「通常、マラはインドからの渡来とされているが余などは東南アジア山地諸族語 (雲南貴州にも及ぶ) の性器称 'la / lan' に 'ma-' 接頭辞の前添したものがマラと思ふ (一部書き改め)。」と喝破されている。ところが、missing link にあたる閩越～台湾の地でも陽器は非漢語の「lan-鳥, lan-核, lan-pa」で云われ、婦女の方は「ci-vai, ci-vui (沖縄のツビに訛す)」である。また、「大ボラを吹く」ことを台湾語で「pun (吹) ho (虎)-lan = 虎のフグリを膨らます」と喩えているが、日本語の方では道学的にブンホーランを「法螺を吹く」に

直している。このla (♂) にki (支, 1本) が付いて男子称laki (→武, 茸)。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

**客家語**（漢語要素がより濃い）も台湾の苗栗・竹東・美濃や福建の西北部などで喋られている。筆者は斯語に疎いが、カリフォルニア在住でよく来日なざる実業家・蔡連理氏の示益を受け、洞ヶ峠、自由が丘、市ヶ谷などに含まれる「ケ／ガ」とか魚、イサナ（鯨）、岩魚、山女魚、魚垣（ナガキ）、魚群（ナブラ）、真魚板（マナイタ）に含まれる「ナ」は客家語のポゼシブ（所有を示す格助詞）'kai / gai' および魚（ng）＋ビルマ語の魚（nga）に当たるとしたことがある。上の③に述べたような＜鯨体国土観＞論の展開がある場合、海岸／河岸を海唇／河唇（ホイシン／ホーシン）という客家語は興味深い。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

なお、以下の叙述で村山七郎先生 {筆者の私淑をみとめ、華南非漢種族（ヤオ）研究の泰斗・白鳥芳郎師と共に日本民族学会への入会を勧めた。ご自宅の表札は「国際比較言語学研究所」} の語彙例とうをあげる場合、出典を逐一は示さなかった。それは、多数ある村山師著のうち、2, 3冊をのぞき、他のすべては「日本語索引／人物・事項索引／参考文献（ロシア語、ドイツ語、英語）」がほぼ完璧に揃っていたからである。従って、拙叙述によってadvancedな興味をもたれた方は容易に必要箇所へアクセスできる筈である。索引がない2冊とは遺著になった『日本語の比較研究』（三一書房）とサラリーマン向けに書かれた『ことばの考古学\*』（朝日出版社）。

\* この本で、村山師はオセアニアで使われる taboo / kapoo（禁忌）の T- 対 N- 転換が日本語の napo（ナホ／直）と書かれた。筆者は、直（ナホ）はタブーからとは考えず、台湾語（非漢）にある TAPO（男、その性象徴）からのナホとした。一は倫理道德説、一は外形陽器説（男子称 laki も♂+「支」）。

### 《筆者のスダランド的立場——「兄」の語源》

本稿は6月27日、駿河台・中央大学百周年記念講堂内でもたれた怡友会（高雄医学大学卒業生が主体、会長・王紹英医師）の定例講演会（4時～6時、演題：「黒潮圏／スダランドより見た台湾と原日本」）で話した内容の三分の二を整理・拡充し、さらに、その後相次いで発生した温泉乳浴剤事件とか浅間山噴火によってinspireされた思考データを、この2、3年の間に発表できた拙稿内容の誤謬訂正（3ヶ所）および論証不足分への再深化に兼ね用い、全文を構成したものである。かつての旧稿（おもに「月報富士」「琉球新報」とか「富士論叢」）で用いた＜日本語と周辺諸言語との比較対応語料＞がこの度も随所に登場しているが、それらはすべて、新視点／新文脈のもとで賦活され、今般の「安曇／鯨ドラマ」に投入編み込んだものである。諒とせられれば幸いである。

「南島語族の源郷は——いまは可成り水没しているが——スダランドの全域であった。」が筆者の20数年来の考えであり、上の講演会においても《鳥・犬・貝（買ひ）・蟹・鱔・海／藻と漢語の黴》の語料を用いて「南島語族の華南出發説」（P.ベルウッド、張光直など）には相当な矛盾点が存することを述べた（実例は〈\*補論I〉および以下数章に挙げた）。

### 《前号などの訂正》

因みに、松本信広師は邦語「鱔（ワニ）」の語源をクロコダイルを意味する複数の＜b-イニシャル＞南洋語に求めているが、筆者はまづ「顔と卵」を意味するおなじく南洋語のwaniに「鱔（卵生）」の語源を求め（佐久市に鼻顔稻荷あり）、次に、「兄」の語源をwaniからのw-落ち（ワナ→アナ、ワザミ→薊、他）としたのである。この点、「兄」を「蟹」からのk-落ちとした、本誌前号稿での過誤（92ページ）は訂さねばならない。

すなわち、大和武尊 {双子の後生まれ、表向きは弟。南スラウエシの双子観（後出優尊）ならば兄者身分で単胎児の後産（鰐）に相当} の時代にはわが国出生解釈における価値観大転換が存したのである。

この他、同92ページにある「村山説：南洋の kat'ih（親愛ほか）→波之豆麻（愛しい妻）。にはk-落ちの愛鷹山あしたかが強力な応援」の条りにも「抑も、傳く（カシづく）のカシは南洋の kat'ih であった」を加えるべきであった {大野晋師が「傳く」を「頭カシ・ラを付ける」としたのは誤認。「頭カ・シラゆえに」。その他、「海の民バジャウは勇猛な騎馬民族でもあった。」と脚注したマレーシア国立民族博物館展示物写真の所（図6のⅡ）には、「五島の小値嘉島にも騎射を善くする白水郎（アマ）が居た——肥後国風土記。アマは南方での父親称。」を併記すべきであった。

一昨年の本誌47巻1号 {「天・雨・昼の語源ほか」} においての過誤をも訂正させて頂きたい。その稿ではまづ地中海周辺にあった「女性の躰が穹蒼（天空）、——風（空気）神を挟んで——男性の躰が大地をなす」壁画をあげ、次に、殷の時代にもあった「厳めしい老婦の躰の像こそ“天”の象形文字の原形」という林巴奈夫博士の大発見に託け、「アンマア（時には在天）」というアモイ周辺～台湾島～クワラルンプールで語られている祖母称（欠漢字語彙）が山東半島・遼東辺りにまで北上してから韓半島を廻り、わが方に入って「天／雨」のアマに訛した、と述べたのである。……ここまでは訂正不要 {なぜなら大靈女おおひるめむち貴という天空神も女性……「昼」の語源も南洋の biru（青藍紺色）ゆえ} と思っているが、肝心の「アンマア（祖母）」が南インド出自の重要語彙であることを書き落として仕舞った {インド東海岸にある雨乞いセンターことプーリ町の名も台湾西部シラヤ族の頒布利に始まる雨乞い歌、神奈川県大山の阿夫利信仰！}。大野晋師が『新版・日本語の起源』で挙げているタミル語の ammā（婦女）→アンマア（沖縄・奄美の婦女）こそアモイ～台湾の非漢語「アンマア」でもあった次第。そして〈人間⇔自然界〉の別例に「海士あま（父）→海あま」「海あま→父トウ トウ」「dier（古越語

の海) →<sup>テイエ</sup>笹」。

## Ch.1 縄文文化の南限は不明？

以下、本稿のCh.5までは<sup>オーストロネシア</sup>南島語的な立場——就中、高砂族諸語の視点——からの温泉観・鯨(脂)観に文旨を絞っていくが、読者はすぐさま、「貴兄は<sup>シマ</sup>《湯＝島》のような結滞なことを云ってるが、hot-water, hot-spring / スパ, Island のどこが共通？」と訝られるであろう【ここで筆者は、湯谷・島谷2姓および油谷姓／油谷湾（山口県）を挙例したい】。

そして、当然、「縄文期（湯船）のこと／鯨のこと」を学ぶのに、なぜまた、高砂諸文化なのか？という、より根本的な問いをも発せられるであろう。考察の時期枠にもよるが、オホーツク海文化とか青森・三内丸山遺跡（縄文中期）とほぼ同緯度の中国東北部（旧満州）にある興隆溝遺跡へと一部の縄文考古学者（岡田康博・岡村道雄氏など）の目が行っている最中なので……。所で、2001年11月4日の毎日新聞によってスクープされた——旧石器年代が60万年以上も遡って岩手ほか東日本各地にあったという——藤村氏の‘捏造事件’のさい、道雄氏は「藤村さんは幼いときに目が悪く、プロになってからも人数倍発掘現場に通い（これは確か！）、鋭い‘心眼’で地中の石器在処を察知できるようになった（要約）。」と河出書房新社のある本で書かれていた。



これらの質問への返答は、国分直一博士の『日本文化の古層（二葉半の台湾島全図あり）』『北の道 南の道\*』（ともに第一書房）および佐々木高明博士の『南からの日本文化（上・下）』（NHK ブックス）——にある「黒潮がフィリッピンの東を台湾・九州に向かって奔流していくさま」——を一瞥くだされば瞭るとおり、比国のルソン（呂宋）島や台湾島が現時、‘不明’

〔朝日夕刊—7月21日、渡辺延志記者ひく『現代考古学事典』（同成社）における「縄文時代」項目執筆者・谷口康浩氏の言。千島・サハリン方面の縄文境界も不明確〕とされている‘縄文文化南限’の重要な一環をなし、高砂の人々は南島語族中のより古い層をなしているからである。周知の通り、千葉佐倉にある国立歴史民俗博物館の西村豊弘教授は幾つかの発掘結果を踏まえ「縄文社会は母系社会であった可能性が高い\*」と述べられている。アルタイ諸語を喋る北方社会にも弱い母系は拾えようが、現日本の周辺で一番有名なのは何といってもアミ族の母系社会であろう。案外、人間サイドのこれまでの‘縄文南限’勉強不足を、付図3で示した動物界の雄「クジラ」君が——彼（女）等の回遊コースでもって——我々に痛論しているようでもある。

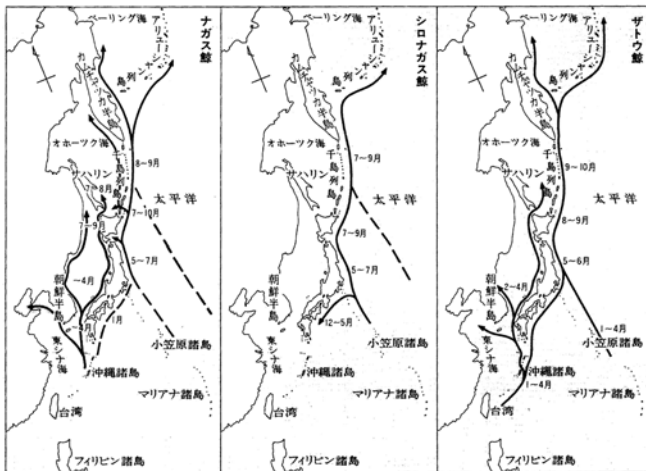


図3 石田好教「列島の捕鯨文化史」、大林太良代表『海から見た日本文化』所収（小学館、1992）より。  
 なお、おなじく図9（鯨しばり）、図14（盤亀台—韓国東南海岸—の海獣蟬集状）とも此の著より戴いた。

\* 10月28日の各紙に「フローレス島で1万8千年前までは生きていた1.6m身長の人類を発見」のニュースが躍った。うへの国分著（の比国・台湾と北海道3

地にあった小人伝承の条)を披読くだされば1万2千年、いや、(比国ならば)現代にまで低背フローレス人の親類が生存してたことが納得できるのである。

- \* 須藤健一神戸大教授は大阪・国立民族学博物館時代に広域南方圏に今なお厳存する母系社会の所在・族名を明示したマップを作られている。縄文母系社会とアミ族のそれは丁度、須藤分布図の北の両横綱に当たる。邦語「母(ハハ)」の語源解も須藤マップの意義を相乗的に高めているので(†補論Ⅱ)に別述した。



所で、クジラの別名はイサナ。このイサナのイサに就きかつて沖縄出身の奥里将建(『古代国語の再建』)は台湾アミ語の鯨称イソからの転訛と述べたことがある{鯨<sup>イソ</sup>→磯、の方が良かった\*。比較言語学の村山七郎師が南洋語で「first/第一」を表す「ot'a」をイサナのイサに対応してるので。そして、「鯨」に含まれる「京」も京極兆億万という数単位のトップ。抑も、鯨は数単位だけでなく、時間の単位に於いても{長久の座、Ex.茨城「磯出大祭礼」の72年インターバル}を占めている。

- \* ただ、地名からは奥里に有利(?)な諫早・鯨伏<sup>いさふし いさなご</sup>と磯砂<sup>いさなご</sup>をだせれる。

以下の部も、先蹤の道を踏んで集め・発表を重ねてきた筆者の別データである。

#### 《実例Ⅰ：日ア対応——Ka-接頭辞など》

まづ、族称のAmisには「優れた方角/季節風の風上/北・東北北」——ヘアをなすtimor/†tsimorには「劣った方角/西・南・東、乃ち非北」——の意味があり、接頭辞付きのka-amis語形もある。このカーミスが沖縄古語のハーミ(川上)、地名の国頭<sup>くにがみ</sup>(沖縄本島、沖永良部、種子島の三例とも島の東北か北端)に入り——tsimorが与那国の「下屋」<sup>チモルダ</sup>をへて——「上下/髪」に収まった。なるほど、「顔(かほ)」も「髪」とおなじく接頭辞付きの「Ka-+頬」<sup>かほ</sup>、また「壁」は「Ka-+壁(piah、へ甲類)、へ甲類立て=隔



て＝隔壁（中・台両語とも）」、「亀（カ・メ乙類）」は「Ka-+蝟<sup>ワ</sup>」であったのか。「顔（kaFo）」を大野晋師：『新版日本語の起源』はタミル語「kavul＝顔」出自とされているが、師は、朝鮮語の「顔<sup>ボッポ</sup>」と昔からあった南洋語「pipi＝頬」Vs「FoFo＝頬」を忘れていた……「頬」は閩系台湾語で phoe/poe。

因みに、アミ語のティモル（南・劣る方角）を与那国島の「下屋（チモルダ、チムダ）」を介して「下（シモ）」に対応させたとき、「南洋のティモルは東を意味し、とくに劣る方角とは云えない」という批判を受けた。筆者は、イスラム化以前の南洋にインドから高度ヒンズー文明が流入してきたとき（今はバリ島に強く顕現）、「西＝優れた方角」という方位観が成立したものと推測している。南洋のティモル（東）には†betanという同義異音語もある。†betanそのまま「ベタ・ヘタ（下手）」に対応し、「父（シシ）」という奈良時代の方言もあるので、「下（シモ）」がアミ語・南洋語からとする黒潮説は今後も引き続き有効であろう。

そして、「母方オジ／潮・塩／成人男子／自由・管督／父親／家／冠辞（丁寧）／本筋直系／陸稻<sup>おかほ</sup>／稻ハサ／鉄」を意味する「vake／kasid・kasin（南洋語 asin）／nai／mama／ama・tama（ハワイもこれ）／loma・ruma／u--／tada／tipos／hatsa／maral」はそれぞれ「xx別・獲支・和気／鹿島（長野）と香椎（潮霊）神社／足尼<sup>かしひ</sup>、石垣島の真邑者<sup>すくね</sup>／気儘・無制止／海士<sup>あま</sup>・多模（倭人伝）／加計呂閩・波照間<sup>う・お</sup>／御御<sup>ただ</sup>（うへの馬淵師は東部海岸のtadaruma地名を調査され、タダ-ruma'と切られ、“意味は由緒ある家か？”と筆者に直話）／高千穂の智舗<sup>ルマ</sup>／架<sup>はさ</sup>／天津麻羅（天磐舟の船員、アンタレスか火星）」に入ってきた。

なお、紀州は潮岬<sup>しおのみさき</sup>そばの大島にある檜野崎<sup>〇</sup>は、黒潮が目の前をとおり、民俗学の宮田登前神奈川大教授が頗る気に掛けていた地名であるが、「樹木ウバメガシ説」（日本地名研究所所長の谷川健一師）のほか「潮野＝塩野<sup>カシ</sup>／海野説」もあって良さそうだ。黒潮がもろに当たる五島列島の福江島にも

樅ノ浦（と後述する<sup>かしわ</sup>柏崎や多々羅）がある。

《実例Ⅱ：<sup>ふいご</sup>鞆は<sup>かわ</sup>吹き<sup>ふいご</sup>革→<sup>かあ</sup>吹革，<sup>つよ</sup>母と<sup>つよ</sup>妻と<sup>つよ</sup>卑弥呼》

つぎに、アミ語には<sup>カワス</sup>神霊〔天地万物，樹木，善悪に分かれて頭の右左／  
両肩にやどる。ヤミ語では<sup>カワス</sup>森林〕に由来した<sup>カワサイ</sup>鯨／<sup>カカワサイ</sup>海岸地名【ka-kawasに-  
aiが接尾。しかも，海浜カカワサイ\*は賞鯨スポットの成功新港漁港に近  
く，陸地に入った池上郷には馬淵師の墓がある】とか，女性家長（tsi-  
kawasai）が供奉を司っているカカワサン（主屋内の霊棚，-anの接尾）が  
ある。チカワサイは沖縄の司（チカー），筑紫と福島<sup>つよ</sup>の2読み（チクシ／ツ  
クシとシマ／スマ）を考えれば「司（ツカサ）」——『岩波古語辞典』は「築  
→塚→司」とみてるが「塚=土<sup>つ</sup>・<sup>か</sup>処。堤=土積み，土筆=土串，筑波=土・  
奇ハ」なのでこの辞書説は困難——にも対応。

- \* <<sup>つよし</sup>藤井直説> この台湾東部の鯨に係わる「カ-カワサイ」地名〔筆者は香西  
姓にあてた（香原姓だと鯨腹か鯨の海）〕につき，東京富士大学の<sup>つよし</sup>藤井直教授  
は備後（福山市）の古海岸にある河佐（カワサ）と柞間（タルマ），有地3地  
名を示益された。タルマのタルは後述する足島神社の如く鯨を意味し，アルジ  
は捕鯨の太地（背骨=柱）に係わるか。市内には鯨に係わる地名の大黒と東・  
西蓬菜もあり，市外には何と海ノ峠があった。付近の笠岡市には大磯（鯨のこ  
と）や寄島町（寄り鯨）もあって氏の見解を強めている。



カワス<sup>てるかわ</sup>は<sup>てるかー</sup>照る日／照る日（沖縄おもろ），天照大神と卑弥呼も母系社会の  
反映！／滋賀県民俗・鏡餅内の円杵=おカワ様，鏡餅に差す箸=お光り様  
／神（昭和天皇が粘菌類をみにいった和歌山の<sup>かしま</sup>神島）／<sup>かべーる</sup>神屋原（屋原はパ  
ラオ～蘭嶼～波照間までの家と原／<sup>かい</sup>神島（伊勢湾の）／<sup>べーる</sup>球磨川の神ノ瀬  
／<sup>か</sup>岩手の上<sup>かしら</sup>遠野／<sup>か</sup>頭（上・白）／<sup>こうべ</sup>頭／<sup>こう</sup>上つ野／<sup>け</sup>髪／<sup>か</sup>大神山／<sup>かあ</sup>婦（「日葡辞書」  
のcaua）／<sup>か</sup>xx枚カワ（xx歳年上の<sup>かあ</sup>姉女房）／<sup>か</sup>母／<sup>か</sup>嬢／<sup>か</sup>おっ母さん／<sup>かわ</sup>側と  
秋田は六郷村の<sup>かわ</sup>側清水 {=馬淵師の「<sup>カワス</sup>霊の両肩分占，右善左悪」——ヨル

ダンにも同様思想による両女性顔面の裏表合体像がある——図版4）／日高見ノ国（<sup>ひだか</sup>襲神＝オーロラの神秘さ）／カ<sup>ぶ</sup>触<sup>かーら</sup>れ／川<sup>から</sup>処（沖縄）と韓国（神<sup>か</sup>処）／川<sup>か</sup>平・川折<sup>おれ</sup>／神<sup>かん</sup>の河（薩<sup>こ</sup>摩）／田<sup>た</sup>川原<sup>ら</sup>／神<sup>かみ</sup>泉（鳥海山の伏流<sup>りか</sup>水）に訛し、アイヌ語「鯨<sup>り</sup>＝の上<sup>り</sup>・頭<sup>か</sup>＝お出<sup>で</sup>額<sup>こ</sup>（マッコウ鯨の巨額？）」にふくまれました。即ち、<sup>こち</sup>東<sup>こち</sup>風も日<sup>こ</sup>霊（曆<sup>こ</sup>の日）であったのだ。<sup>ま</sup>た、鯨<sup>いん</sup>称の？isoもあり、鯨

はアイヌ語に表れ、本州古代人までが神秘的な海獣を<sup>カー</sup>鯨<sup>コウ</sup>・鯨<sup>イソ</sup>（磯）と呼んでたことは無視できない。しかも、南部高砂のパイワン族にはカワスと性質を同じくする神霊ツマスが居て、邦語の稲妻／吾妻＝噴<sup>あづま</sup>火／東<sup>つま</sup>／端<sup>つま</sup>／瀦（折口信夫の「水の女」）等に入っている。

ここで、筆者は、上掲のカカワサイ／カカワサンから<sup>かかあ</sup>「嬬」にka-接頭辞をよむ【古語にも父親を意味する「加曾」がある。「曾」は鹿児島郡名の「曾<sup>ツオオ</sup>於」や熊襲の「襲<sup>そ</sup>」とともに高砂圏3族（サオ、ツォー、アタル中のスクオー支族）の「人」（ツォ・スォ）なのであるが、閩系台湾語でも「自分／背中」を「ka-己<sup>キイ</sup>（カキイ）／ka-脊<sup>chiah</sup>（カチャ）」と称す。その他、台湾語の中には身近の竹／麻製道具とか昆虫名（ゴキブリ他）にka-接頭辞が多い。漢（中国）語には単語語頭の複子音【かつて藤堂明保東大教授は



図4 上像（双頭）はB.C.8500年頃のもの。下像（右傾げ）は裏面にもう一つの顔があり、左傾げ状。同形別像から埃及文字の「善y/f」が出たので右傾げ＝善、左傾げ＝悪を示したか。



“窟窟／穴ぼこ”なる2字語を↑ klong という1語に遡源させた】はあっても接頭辞 (ka-, ma-, ta-) は無かったので、閩〜台湾語におけるオーストリック的／非漢語的な一側面を示唆しよう。



図5 本図は'01～'02年にNHKの番組(アジア Art 紀行)で計3回放映されたもの。この画作「オルホン河」(by Ts. ツェグミド氏)に寄せられた説明文は福岡アジア美術館学芸課長・後小路雅弘氏のもの。モンゴルと台湾原住民両者の自然精霊観(そのイメージ化)が細部まで一致していることに驚かされる。そして、この蒙台一致は、列島縄文人の自然精霊観も画の内容に近いことを物語っている。なお、後小路氏の名文は産経新聞社:『モンゴル近代絵画展』図録、'02年にある。

### ＜鯨と太陽、鯨トーテムの内陸進入＞

アミ語の KAWAs (天地万物にやどる神霊) はたった今述べたごとく鯨<sup>カー</sup>や鯨<sup>コウ</sup>にも衍義するが、上掲・松本師の有名な「犀に似た怪獣に呑みこまれる太陽」図に重ねられるならば、鯨は海上の日とも無縁ではなかった——

夕日を呑み込んでからの「夜の航行（黒）」と「朝の吐き出し（白?）」。たとえば、前掲した宮田登師の「黒潮と民俗信仰」【同氏代表：『黒潮の道』『海と列島文化・Ⅶ巻』小学館，所収】によると、静岡県賀茂郡賀茂村宇久須の御船神事では、赤い装束の猿ッ子（若者）が日扇でイサナ（鯨）を招き、銚突く所作を繰り返している。また、鳥取県梶山古墳の類似図——図版7——にも「日と巨魚と鰻?」（魚腹の空洞は太陽の容れ場!）が見られる。そして、後者の情景の意味構造は後述する旧約聖書ヨナ書のドラマにも通じている。このほか、天照大神と海神を同一視する信仰が根強い三重県鳥羽市界限では、鯨が海から十一面観音を松尾町の青峰山正福寺（天照大神の本地＝太陽の生誕地）にまで9キロも運んだと信じられている——堀田吉雄『海の神信仰の研究』上巻，光書房。



図6 宮田登「黒潮と民俗信仰」、同氏代表『黒潮の道』（小学館，1991）所収。より。なお、拙稿のおなじく図8（鯨の尾分け）、図10の神津島フォトも此の著より戴いた。

ここで、陸地の内部まで鯨（カー、カワス、後述のシカル）が登っていった——例えば北茨城は西・東金砂神社の「磯」（本誌第48巻1号ご参照）とか千曲川中流にある生島足島の「鯨」神社ほか\*（茨城は大洗海岸あたりと以北の沿岸沿いにも多くの鯨関連地名が散在）——と云うことは無視でき

ない。伊勢湾に浮かぶ三重県の神島<sup>こうじま</sup>で行われるゲーター祭り〔専門家の間でゲーターは台湾語という伝聞〔岩田準一〕があるが筆者は芸旦<sup>ゲトア</sup>（女俳優）かと推測〕は、淡白いドーナツ状の日輪を多くの撓る竹棒で叩き落とすような内容なので、こっちのほうが口の大きな髭鯨の太陽呑み込みを象徴していたのか……。

\* 那珂川を上って行った黒羽町と黒磯、栃木は真岡南郊の磯山・和田・八木岡（山羊はヤミ族ゆかりの象徴）、益子の北に連なる星ノ宮・大和田・多田羅（ヤミの小舟）など。

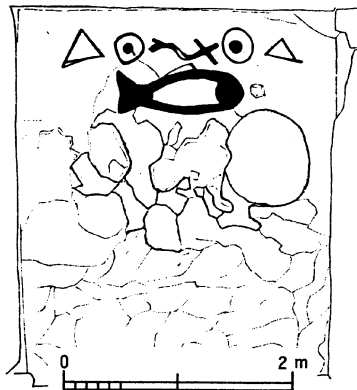


図7 梶山古墳の壁画（国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』朝日新聞社、P.94より引用）。太陽容れのスペースと、伴在する小竜か鯨が面白い。

かくのごとき濃密なく日本語＝アミ語他>関係が例示できる以上、獣（肉）類関連称においても<日ア関係>が存在することは十分予見できる事柄ではないか。

## Ch.2 <sup>しま</sup>脂・<sup>しま</sup>鯨・島三義の水平的併存

### <白（シラ）の語源——多角的・包摂的な立場へのシフト>

ここで冒頭序章の掲題にもどる。白骨温泉から沢渡温泉<sup>さわんど</sup>をへて下流に向かえば島々駅（脂脂）、より上流だと坂巻、中ノ湯、上高地の3温泉。去年おそわった現地運転手のお話によれば、上高地へいく梓川沿いには無名の小秘湯がまだ多く、白骨近辺では梓川にそそぐ支流の湯ノ川も白濁していた。一帯の地貌（球状石灰石）は、前出国際的な村山師がのべた高説：「シラ・シロの語源は南島祖語の \*t'ilak（光輝）から」のほか、<sup>インドネシア</sup>南洋語の sila（石膏）／sira（塩）／puteh（白→普天間）も祖日本語の形成に与っ

てたことを物語っている。おそらく、村山説は「シロ・遠白し（皇威）・著し（イト白し）」のほうだけを専有していて、「シラ」は三語源併存（すなわち光輝、石膏と塩）だったのであろう。

なお、このような非択一的見方ないし複源説〔上掲した「筆者のスタンダード的立場」のところでも触れたむしろ包括的な立場〕は、イナ（稲、南洋語／高砂語の母から）とイネ（稲、イ+孕奶）、クル（粟、南インド語）とクリ（南洋語）、フナ（船）とフネ（舟）、鹿（deerとwhale）、魚のサカ（南洋だと子孫、満州語ならば酢味）という場面に適用してきたが、以下の論述に於いてもそのような stance を守っていきたい。

復唱しよう。「我々の温泉（とくに乳濁した泉面、湯ノ花）には元々‘シマ（脂肪）’という言葉が固有に付いて居た。長崎の島原温泉ならばイコール湯原温泉（群馬）が此までの拙稿の趣旨であった。それゆえ、日本TV・みのもんた司会者がPRした「沢山の病を治すから‘四万’温泉」解釈にはしたがえない〔茨城県海岸の入四間／島名（渚の鯨）も鯨の鎮座、後述あり〕。以下は、かような従来拙旨への証拠〔ただし、序の所でも述べた如く、幾つかの先発的拙稿——〈\*後注2〉——を踏まえての再証〕である。また、先にも述べたが「白船・白骨」についてだけは新たな解釈視点（族祖船の山上降着）による別説明を Ch.7 に用意した。

### 《しま しま 島は脂から》

高砂諸族は、獣類の脂身を 1 > sima' / simal（ブヌン語）/ simar（アミ語） 2 > \*sema 3 > sələm / siyam と称し、1 > の話者がもっとも多い（R.Ferrell, 安倍明義, 土田滋師ほか）。

3 > の二語から再構される \*səyəm——呉越閩出自？——は韓国語のショム（島）とアイヌ語のスム（脂肪）に酷似し、2 > は、壱岐の島子こと倭人伝の泄模觚\*に合致する。すると、1 > の三語は、記紀で「くらげ（jelly fish）成す／如浮脂」と表現された稚き国土<sup>わか</sup>＝大八島＝そのものではない

か。太安万侶も——古事記ノ上では——「<sup>あぶら</sup>脂」でなく「<sup>しま</sup>浮きし脂」とよんでいたのだ——下巻の雄略天皇の箇所で「阿夫良」表記。

\* この<sup>しんぼく</sup>泄模觚につき今少し敷衍した<別資料稿>を用意したが本稿では省いた。



忘れては成らないことが一つあった。村山師は『アイヌ語の起源』『日本語の比較研究』において「脂肪」を意味する原始南高砂語の<sup>アミを含むバイワニック</sup>†simaR（土田滋師の再構形）をアイヌ語のsum（油脂）に対応させたのであった。第一音節に存するi-とu-の差異についてもデンプウォルフ師があげた原始インドネシア語内のgigit/gugut（歯、がりがり噛む）、ibah/ubah（異なる）、ig'ng/ug'ung（鼻）などの6例とご自分の2例（その一は南島祖語のhiRaqa=赤い、と同意味のアイヌ語hure）を誌されている。我々も、茨城のイバラ/ウバラ、筑紫のチクシ/ツクシ、島のシマ/スマ現象を踏まえ、アミ語のチカワサイ（祭司）と沖縄のチカー/ツカーサから本土のツカサ（司）を出した。

折角、アイヌ語「sum（油脂）」の出自を台湾高砂諸語のsimaRに——<sup>・</sup>確実に——求め得ていながら、村山師の考えが、通常和語の「嶋（Island）」に廻って行かなかった{師がここで東北・年輩者の「フクスマ=福島」を想起されれば良かった}理由は、師が「嶋の語源」を早期の名著『日本語の語源』（弘文堂）のなかで既に出して居たからである。「南洋語のsimpang（本体や中心点から分岐・離れて在るもの、枝分かれ道）→シマ」が師説であったが、今日では、現行している<他のシマ（島）語源数説>と共にもう使えなく成ってきたお考えに見えるのだ。

村山師が音韻的には無理のあるsimpangをもちいた理由は「山齋（シマ）」という陸地内の——それも稍聖地っぽい——場所名が有ったからである{民俗学界にある占メ→嶋、説も「海嶋+山齋」を同時説明したかったゆ



え}。しかし、後述する「鯨（シマ）」はかなりの山中にまで登っているし、他に、南洋語の Rimba（王の狩猟地）も「山齋」を十分説明できるのだ（泉井・川本・郭の R::S 対応）。simpang は——語尾 -ng の脱落が保証されるならば（南洋語の erang「系譜・祖先」は -ng 落ちで「偉い」、もう一つの erang「暗赤、褐色」も -ng 落ちで「鰓」に）——むしろ「柴／新発田」に対比したほうが音韻的に自然である {「猿」を意味する南洋語 simpai が「芝居」に成れ、同「黒猿」の lotong も台湾東北部の羅東地名に入ってるので}。

《在来「島」語源説の破産》—蒙古<sup>準正解</sup>／朝鮮<sup>しま</sup>／南インド／南洋／占メー（略）。

《商（アギなふ）・アギ変わりの語源》

〈脂<sup>しま</sup>→島〉を証明するもう一つの例がある。沖縄古語で紺青色に囲まれた美しい島周を形づくる白浜（その中が青茶色の陸地）はアングと呼ぶ（『日本列島言語史の研究』の著者：中本前都立大学教授の遺留ノート。橋尾直和高知大助教授たちの整理上梓）。このアング／安芸（？）／奄美の秋名（↑アギナ）は比国タガログ語の lāngis（脂肪、蘭嶼ヤミ社会を通れば ↑angis）に遡れる。また、弥生人たちの脂肪（アング）への貴重な扱いぶり {森浩一同志社大教授は能登半島は真脇遺跡から沢山出た「イルカ脂肪入れ壺」を重要視。また、佐原真前国立歴史民俗博物館館長も} とか海岸（アング）における沈黙物物交易という民族誌的な実例に照らせば、「商<sup>アギな</sup>ふ／アギ変わり」の原語姿はこの辺に求められよう。大野師は「秋の収穫→商ふ」説であるが、「秋」の語源そのものが南洋語の langit／ヤミ語の angī（天空、上顎口蓋部）、秋田県もかつて鱒田<sup>アギ</sup>だったので「秋→商」解釈は苦しいのではないか。今の論点は、次の二帰結

1 > 「鯨<sup>しま</sup>」という日本語があった（Ch.4 の先取り）。

2 > アミ語の鯨は「磯<sup>ISO</sup>」とアイヌ語の鯨になった（先の実例Ⅱ）。

を踏まえての展述であるが、（鯨＝島）が座礁して灰白の腹 {≒脂肪色、シマル} 台湾でも中年男の膨れ腹を皮肉って「鮪（の）トロ肚」と云う} でも見せれば、

白浜称アング {=安芸。少なくとも和歌山と千葉、静岡(伊豆)、高知4県と神津島に「白浜」地名!} のフィリピン的素性(lāngis)はさらに疑えなくなる——神戸にある明石須磨のsumaも上に見たデムプウォルフ挙例(-i:::-u-)に照らせば simaR(脂肪)の転\*。

\* 11月12日(金)の日経新聞文化欄は地名研究者・吉田茂樹氏の“地名の由来異議あり——9千項目を解釈”「神戸市須磨は砂の浜ではなく摂津の隅から」説が載せられていた。筆者は国と国後(クナシリ)、綱ヒと縄(ナハ)を想起して、「隅から隅(スマ)」も不自然ではないと感服したのである。唯、吉田説は、まづ摂津の須磨田(兵庫県三田市)と山口県鹿野町の須万をあげ、前者は「平地の隅っこ」、後者も「都濃郡の隅」に位置してる{筆者:ここまでは充分正しい}ゆえ、神戸の隅にある須磨も同伝、という論証法であった。ということは、この吉田説に於いては{砂浜・州浜という語成立はなかったとしても、付近に西宮名塩駅がある}神戸市須磨の「砂浜(naa)・白脂(アング)・simaRから」という性格(命名契機)を棄却できない訳である。なお、同氏の「甲斐=川合(カハヒ)」と「茨城の布作郷は節柵(フシサク)のシ落ち」両説にはお考え違いがあったので——<後注3>で修させて頂いた。

そして、「魚獲りのヤス/very long」を意味する呂宋島の「taji/ma-haba」が古語の「蝮(タジヒ)/但馬/真一幅」に訛していると考えられるので、三吉朋十が蒐録したnapo(環礁)——『大南洋地名辞典・1・比律賓』(第一書房)——も、瀬戸内などの直島、能島、能美、能地(広島)、能因島に入ってきたのであろう{lāngisと共に登場した語例!皮膚称のbalatは来てなかったようだ}。

#### 《<sup>しま</sup>鯨も<sup>しま</sup>脂から、白は黒から》

さて、アイヌ語のrikaには<<sup>リカ</sup>鯨・<sup>リカ</sup>脂身>の二義がある(村山)。筆者はさらに鯨→脂身、ならびRIKAの-ka部分はアミ語kawasのkaa訛とした。このような意味連関は、たとえば、《<sup>いのしし</sup>猪/<sup>しし</sup>鹿踊り/<sup>ししほね</sup>鹿骨と宍、<sup>ししほね</sup>鮪とトロ/赤身、<sup>ワニ</sup>豚(沖縄)と肉(閩・台湾語、朝日賞の金関丈夫師説)。因みに、浅井恵倫

師は「沖繩の豚→猪<sup>wah WI</sup>」, 筆者は「南洋の豚→沖繩の豚<sup>war ワー</sup>」にもみられ, 日本語は, 結局, <脂・鯨・島>の三義併存だったのだ。

次に, 上のような兼義（一語でもって全獣と肉／脂肪を表す）を本州側の民俗例に求めてみると, 京都は丹後郷土資料館所蔵の藁製鯨【長さ7・80cm＝復元図＝, できたらこの形によって嘗ての拙説「大分県＝皇板＝鯨の尾鰭\*にご配慮を】が思い浮かぶ。胸鰭の前あたりに銚を刺されているこの鯨作り物は明治10年代頃から大根製に変わっており, 大根はシロナガス鯨\*を表した。

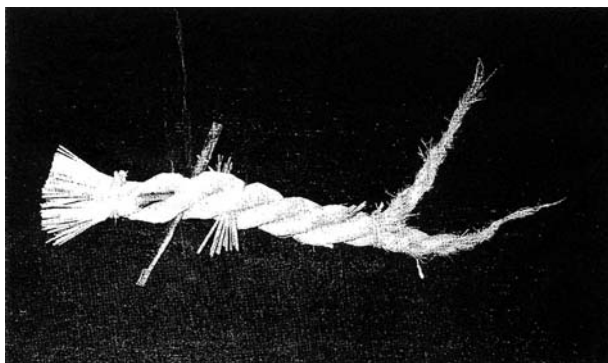


図8 「尾分け」の鯨  
丹後半島の伊根浦（京都府与謝郡）に伝わる鯨突き（板）の模倣行事では, 銚に見立てた桜の小枝2本を, 藁製の鯨に打ち込む。図は作りものの鯨を復元したもの。藁製から大根で作るものになった地区もある。  
神野善治氏「黒潮の漁労儀礼——予祝的呪術の諸相——」より。

- \* 「妹（芋）と葛くずと鯨たち——副題略」, 富士論叢45巻1号, P.23。で<大分おおいた（板）＝鯨の巨尾>を述べた【現行積：この県における土地の古代分配, 大段おおき／大刻おおき→大分】。なお, 高砂語の蛇（クズ）から葛 {は green snake, 湯浅浩史『花おりおり』（朝日夕刊）} と吉野のクズ族. 諺：「ウナギ山に入りて薯になる」の「薯」は「クズ（蛇）イモ」だった可能性がある。「鳥・蛇＝鰻」「鳥・鷲＝兎」ゆえに。若干横に逸れるが, 蛇のkuzuはkudzi訛（月・日・海藻の南洋語 lumu →つき・くち・綿津見）して蛇行がめだつ久慈川やナメクジになったことが考えられる。ただ, 「常陸国風土記」の時代になれば周知の日本武尊の命名伝承

があって久慈は鯨ヶ丘の方に結びつけられている。

- \* 当地は亀山の若衆組である「蓬莱社」社長を22年間勤めた奥長之助さんの貴重な証言——神野善治氏の「黒潮の漁労儀礼——予祝の呪術の諸相——p.526-527」（宮田登編『海と列島文化、第7巻、黒潮の道』小学館、所収）より。蓬莱島は台湾まで指して（台北に蓬莱小学校と近くの蓬莱閣レストラン）いるが、蓬莱2文字は徐福の伝えた捕鯨技術をも意味していた（先述した河佐／杵磨がある福山市にも東・西蓬莱、後述する天竜川にも鯨身に擬せられる鳳来寺山）。なお、「斯様な大根鯨をのせたクジラサンボウ（三方）を床の間にしつらえた座敷に入るとき必ず拍手を打つ」という奥氏の証言は後述する「柏＝神集＝クジラ」拙語積をも援けてくれた。

おもえば、藁製の鯨からシロナガスへの変遷は、アイヌ語での＜鯨<sup>リカ</sup>（ク<sup>リカ</sup>）⇒脂（シロ）＞過程と平行して居た【ただ、三重県海山町の白浦<sup>みやま しろうら</sup>で行われる湾上での模擬捕鯨は大白神社の鯨祭なのでシロナガスであろうし、浜松市白羽<sup>しろは</sup>（羽差し＝捕鯨者。羽は台湾語にある肉<sup>バ</sup>か）の春日神社の社神も白鹿（鹿←鯨については後述）に負われて海を渡ってきたと伝えられているのでシロナガス！……通常の太い鯨尾と今述べた大分（皇板）だと、色からして大黒柱）。すなわち、藁製鯨の段階では通常の黒鯨と考えてよいのではないか。二股大根が登場すれば徐々に「白」が勝ってくるのは当然であるが、黒鯨も一皮剥けば全身白脂肪で覆われた状<sup>さま</sup>を呈す——だからこそアイヌ語での＜鯨⇒脂＞。乃ち、「鯨／鯨類」においては「白・黒」はそれこそ表裏一体だったのである——＜\*後注3＞。

### Ch.3 魚体国土観（含：大地母体観）

#### 《流れ島、お伊勢さま、パラオ》

獣脂→浮島の「sima' / simaR」が「鯨<sup>しま</sup>」の意味をもおびていたことは、“鯨・ジンペエ鯨や大水母<sup>くらげ</sup>など”にもとづく「流れ島伝説」が、宮古島ほか東シナ海各地やアテネにちかい地中海東部\*【黙示録16章20節：島々はみ

な逃げ去り、山々は見えなくなった}に存することか、<sup>おきなわ</sup>南西諸島から五島、瀬戸内、日本海へかけて点々とある黒島、および四国南西部に多い黒南風岩などがすべてゴマ粒小嶋（＝黒鯨）であることから云える {アミ族社会の場合、若者（カッパハ）が乗ってしまった「嶋」は赤みが見えた「白嶋」（動物）であつたり、小耳をもつ鯨（イソノカワサイ）である。鯨耳は、竜宮城への途中、カッパハが息継ぎ出来なくなったときの合図で、その耳を引っ張れば鯨は海面に浮上してくれるのであつた}。

- \* 黙示録は新約の巻末だが、旧約聖書のイザヤ書40章にも「主は島々を埃のようにあげられる。」という島嶼観があり、北海道のアイヌの島嶼観に通じている。アイヌ神話では「海鳥が啄んできた海草と黄色い土（恐らく火山の硫黄）」で「嶋（＝千島列島）」が造られている。

所で、「流れ島」の原像に水母もあることは越前水母の巨きさとその漂遊域（東シナ海から日本海へ）のことを想起させるが、閩系台湾語だと水母を the（テの有気音 t'e の教会ローマ字）とよび、the（＝ t'e,）は胎盤／後産（台湾だと後胎）の胎（<sup>アウテエ</sup>the）——台風のお伊勢にふれる文は〈別資料稿〉に廻した——とまったく同一語である。記紀でも、<sup>わか</sup>稚き国土が「くらげ・<sup>え</sup>胞（胎盤）・浮脂」と表現され、内南洋パラオの〈巨人の膝〉嶋では群れなす水母が創世神話の“原始の時”（遠藤央氏の発表）を表象している {水軍を掌握した「安倍」もパラオの「集会所＝ abai」, ヤップの「石壇の家＝ fëbai」から。波照間では「母屋」をウベ、奈良桜井——崇神王朝本貫の地——に2ヶ所の高屋安倍神社}。

### 《島袋とカシワダゴ、魚体国土観》

こう見てくると、沖縄の島尻・島袋両姓（文学者の島尾敏雄は奄美に永住した）も、それが海獣的な語詞と分かった以上、「島袋＝<sup>しま</sup>鯨袋」——予言者ヨナ（稿末〈補論Ⅱ〉）を3日間住ませた——はペリカン風の「膨ら

み鯨顎(=後述する壱岐のカジワダゴとか毛無山の隣にある飯縄山の口魚<sup>イヒナ</sup>解釈)で説明がつく。そして、膨らみ顎から尻にかけての脂肪似の白腹部<sup>(しま)</sup>にも多数の縦縞\* / 皺 (<†後注4>ご参照)が走っている。ここで、「鯨=島」一致のデータ：

{たとえば、『旧辞記』が述べている「漂う姫島(生き物!)の矛による刺し留め」及び「綱を用いた生きてる壱岐島の八本柱への固定(そのあとは解体作業)」——東急東横線にも綱島駅、綱島温泉}

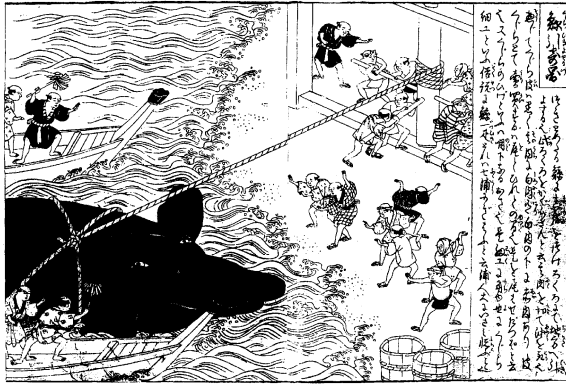


図9 鯨を柱に縛り寄せる様

を考えると、問題は、「沖縄なる称谓までが鯨体を意味していた——台南市の大砂州名:<sup>バクタンシン ラムタンシン</sup>北鯢身, 南鯢身や七鯢身\*もこれに入る。壱岐島は「生き鯨」——という「魚体国土観\*」にまで発展していく。そこで、次節でより具体的な「魚体国土観」の趣旨を彫描するまえに、日置孝次郎前天理大教授が「サバとニシンのシンボリズム(鯖と鯨の象徴性)」{大林太良代表『海から見た日本文化』(1992)所収、小学館『海と列島文化』X巻}に誌した名解説を振り返っておこう：——

[海の神・鯨] 諸民族は鯨を海の神として崇めた。またそれは太陽を運ぶもの、人の魂の墓、或いは人が住む大地とすら見なされた。そ

れは現実に鯨腹中に入る青魚（光り物）を太陽光線、人の魂とみる発想に基づくらしい。写真は、座頭鯨の跳躍。梵鐘のことをクジラともいうが、そう呼ぶに相応しい咆哮を発する巨鯨である（日置）。

- \* 北海道羅臼に特産の「縞昆布」があり、スマコンブ（アイヌ語の油脂はスム）とも呼ばれている。この美味しい昆布は、表面の下から上まで数条の白ばんだ畝溝が走っており、鯨の鯨腹を想起させるものがあった。
- \* 台南の七鯤身という海岸地形は、茨城は大洗海岸で海岸線と直角に成って寝そべっている何体もの長躯の黒磯さながら。「大洗」とはその鯨体（イッ）を大きく洗ったのか。

### 《魚体国土観と沖縄》

本誌の第48巻1号などで述べたごとく、そもそも、オキナファという語義が鯨と係わっていた。著名な伊波普猷の〈沖縄＝沖魚場〉説や外間守善博士の〈沖縄＝大なる地（島）空間〉説——『沖縄の歴史と文化』（中公新書）——も、島＝鯨的に思惟すれば〈翁場〉概念に締められるのだ。捕鯨基地・太地の「海翁」禅寺（で鯨供養！）名に沖縄の翁長（おなが）姓や閩南～台湾語での海翁（ハイアン）（＝くじら。一じ・南島語一も爺／舅／柱）が顔を出しており、アイヌ伝説——知里真志保『アイヌ民俗研究資料第一』アチック・ミュージアム——においても、幌別地方では巨鯨の劫を経たシヨキナ {シ・オキナ＝大・翁。ヤミ語の si- 接辞？} が登場している。また、山田孝子氏の『アイヌの世界観——「ことば」から読む自然と宇宙——』（講談社メチエ選書）によれば、265年前の坂倉源次郎は『北海随筆』（1739、国書刊行会は1972）という書物のなかで「東海にヲキナといふ魚あり、……鯨を呑むといへり」と記録している。旧号でも述べたように、戦前の台湾人学生は「負笈東渡」という表現で内地留学を志していた。また、「瀛州／東瀛」という語詞で台湾・内地日本のいづれをも呼んでいた。それゆえ、「沖縄を翁場」と擬するときの拙見は「瀛魚（おきな）\*」をも念頭に置いてる次第なのである。

\* 「沖繩＝翁（クジラ）場」とするからには「媼」が要求される。幸い、沖繩には「媼の仮面」（『月刊みんぱく』04年10月号）があり、「海・沖合」にも「トオー／オウ」2称があるので、「沖合の魚」は得られていた。去年の本誌で「鯨の海」がある中村市の「常六」地名を本邦鯨名リストに入れた理由は、翁媼につづく尉（若者）にテダイチロク（村山：沖繩の天道＋I（第一）＋南洋・高砂語の若者、筆者：宿六、ろくでなし）のロクが付けば、「尉六」は若鯨カイルカを指した呼称かと思惟したからである。

もちろん、東洋史上、「沖繩＝台湾」とも云われた「東鯤」{この地域称を古田武彦氏は畿内（魚帽を着用）に擬し、森浩一師は吉野ヶりに擬す}の「鯤」にも巨魚（鯨／ジンペエ鮫／大なる地島）が顔を見せており、ポリネシアなどの「釣り上げられた魚体⇒国土」観（松本信広：『日本神話の研究』東洋文庫。島根半島も「国来国来」で引っ張ってきた）に合致している。くわえて、鏡味完二も著『日本地名学（科学篇・地図篇）』『日本の地名（角川新書）』のなかで、日本の岬（xx鼻\*）には根許のほうに「エラ」型が多いと述べており、序章にでた蔡連理氏の客家語でも、なぜか地形の「海岸／川岸」を動物的に「海唇／河唇」と呼んでいた。そして、死期を悟ったアミ族の長老（翁）が海岸の崖で鯨を待つという古風習（上述した『原語による臺灣高砂族伝説集』）もこの際興味深い。

\* 筆者：この岬／鼻は巨魚の顎に相当（伊勢志摩の英虞湾のアゴも大きい）。なぜなら、村山七郎師は日本語「鼻（英：nose）」の語源を南島語で「本体から離れてあるもの／顎」を意味する *pana* に正しくも措定されたからだ。いわば、鏡味師が蒐集した「エラ」は「鯤」（南洋語の *erang* = 暗赤色）であったのだ。

### 《大地母体観と「島，島原」の語源》

国語学者の中には「原っぱ→腹」を唱える向きが居られるが、南洋語の PADANG（原野）を「肌」に、また、アミ語等の *tutuH*（燃烧）からの「焼き畑」称ツツガ／筒賀を皮膚赤斑の「ツツガ虫」に対応させた筆者として



は大賛成である【松本信広師はこの PADANG を「島」のパタに対応されたが、誤認。「島」の語源を川本崇雄師は南洋語で「2, 双」を表す *pata* にもとめ、「切替え畑」的な耕地使用から称谓成立と大阪千里の国立民族学博物館で述べられたが、<sup>パタ</sup>双地使用説は佐々木高明博士（のち館長）の是認を得られなかった。筆者の見解は南洋語の「*batas* = 畝・小堤 = 島」 + 「*tuno* = 焼き畑 = 南九州の都濃神社や四万十川上流の都濃」であった】。

これは、いわば、自然環境を呼ぶ語彙が人体称に縮小現出するという経緯である。例えば大地母神を表したポリネシアの *PAPA* は「母」に（補論Ⅱへ戻られたし。ポリビア語のジャガ芋も <sup>papa</sup>*papa*）。また、「棟から」と云われてきた「胸」は<sup>むね</sup>「身嶺」、素戔鳴尊の韓国における抜毛植樹の故事から「野／毛」は「木」から〔木（ケ）は南洋の木：*kayu* → *kai* → *kē*〕。

ここで想起されるのが藤原明 {『日本語はどこから来たか』と「近畿大学教養部紀要」におけるア行～マ行までの連作}・大野晋の両先達が唱道された印度はドラヴィダ語の *paravai*（海原）→日本語 *hara*（原）という卓説である。お二人は、*paravai* が台湾東部にも上陸してアミ語 *para*（原野）に成ったことのほうは見逃されていた。アミ語 *para* / <sup>アバラ</sup>*avara*（肩）→日本語 *hara*（原）／<sup>アバラ</sup>肋は安倍明義の喝破するところ〔筆者も、シヴァ神の妃デヴァの名がアミ族の聖壺称デヴァスに入った（それは「ホトケ」の原語姿——〈\*後注6〉——でもある）こと等を屢述した。菅原七郎師（『ことばの履歴書』）はデヴァ妃→出羽信仰。すなわち、「原／腹」という日本語には暗々裏に「海(<sup>para-</sup>*para-*)」という観念が付随していたのである。

このほか、折口信夫は「腸（はらわた）のワタ（人体称）が「海（わだつみ）」のワダ〔台中サオ族語 *wadaqan*（海）→和田〕であるのは、「海面の澎湃ぶりが腹式呼吸による下腹部の起伏宛らゆえ」と快説されたが、海人族（「父親」を *ama, tama*）が大海原（沖縄・高知・アイヌまでの「海（トォ-）」は「父ちゃん」）を見渡したさい、二百度なり三百度くらいの視界に入ってくる円い水平線も人間の円腹部を連想させたようだ。とすると、「島原」

なる称謂も、1つ目は《四万十（鯨の海）とおなじ意味の鯨ん海 {鯨勇（諫早）湾をもつ}》、2つ目は《鯨の縞腹》、3つ目は《陸地内の海原に脂肪／舟（温泉）が点在し浮かんでる。》意味に復元できよう。

#### Ch.4 脂と穴・皮(sikar/kulit)の三層一体——《鹿・海驢とは》

さて、過ぐる大戦当時から「sisi/cici/titi/əsi（赤身肉、英語の meat と lean）」という広域南島語が、猪／牛／谷羊と着羊（かもしか）／背柱穴に刻印されていることは人々に熟知\*されていた。亦た、比国と台湾の脂肪称が縄文期の日本に到着していたこともこれまでの屢述で瞭らかになった。確か、ソジシ／ソジシシは聞き慣れない語彙ではあるが、実は、柳田・谷川両翁が椎葉村までそれを追っかけて食した file 肉〔テカテカ無脂肪の肉＝大腰筋＝台湾語の腰内肉＝鯉ならば子ガツオ肉〕のことである。因みに、（谷川健一著によれば）柳田翁は——筆者：背（ソ）に着目し脊椎骨を意味した柱（ジ）が念頭になかったので——椎葉村の狩り人から猪の外背の肉だけを貰って食べ「不味かった」（『後狩詞記』）との印象を残している。

\* インドネシア 南洋語の darahdarah（血）をふくむ肉・穴等への知見〔merahmerah（赤→メラメラ燃える）とかジャワ語の surat（書字、手紙→すらすら）をも含め多くの戦場復員兵士が承知〕は終戦後まもなく出た安田徳太郎の『人間の歴史、6巻』（第2巻は「日本人の起源」）を6年間もベストセラー（安本美典氏の計算）に据えつづけた一主因であろう。

だが、「肉」とは「三層肉（閩・台湾）／三枚肉（沖縄）」がむしろ本来の姿（台北故宮博物館には玉製の三層肉がある）なのである。肉・脂につづく皮革はどこに行ってしまったのか。

このチャートを眺めると、穴／獣脂とセツトをなす皮革称や背柱穴→山背・後ろ・\*代・社、肩→肋、原→原・腹【4ルビともアミ語、筆者と安倍明義】という意味関連のほうは何と60年間も人々から閑却されていたこと

が瞭る。なお、南洋語の「皮」はクリッ、ジャワ語だとシシッ、ヤミ語だとコリッ——焼鳥屋 {都立大学駅傍らの「鳥半」からは数多の馬淵東一門下が巢立った} のミノ焼きとか豚耳食いのコリコリ感。

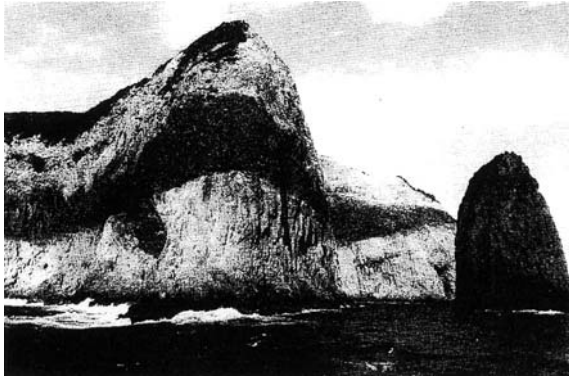


図10 三層肉を想わず神津島の岩肌。

皮革がシカル（シシッ）と称されていた事実はある書物のことを想起させる。『鹿と海——歴史の深層紀行』（戸井田道三著，毎日新聞社）という——「鹿は，時たま海を泳ぐぞ・・・」のような目撃話をふまえた——名著である。しかし，アミ語の獣皮称シカルは宮城は牡鹿半島<sup>おしか</sup>と秋田は男鹿半島<sup>おが</sup>の二鹿がどうも泳ぎ下手なdeer（角も沈む）ではなかったことを示している。すなわち，元々，アミ語にはcikacikという「流木・漂着物」称があり，このチカチックは黒潮がもろに当たる五島列島の小値嘉島，松浦半島の値嘉崎と博多の志訶島\* {飯付からも遠くなく，神功皇后はこの島を「近きかも」と表現} に名をとどめている。そして，獣皮称のシカルは漂流木の枝（海面に浮かぶ）とともに「鹿（deer）」を髣髴／連想させたのであろう。戸井田氏は，志訶神社の裏側にまわって夥しい鹿の角が積み上げられているのを目撃されたが，これなど今述べた連想（樹枝と角の混淆）がそこに働いていたことを物語っていよう。そして，最後は，岸に上陸できる海獣の

アシカ<sup>あ・しか</sup>／足獣<sup>あしか</sup>?が居る。

\* 志賀島には石井忠氏の「漂着物展示館」があり、博多湾を渡った向こう岸も板付の地！ なお、茨城の潮来が板来（イタコ）だったのは重要。

### 《鹿・狩野と鯨（シカル）——鹿が whale であること》

今日、「鹿 (deer)」の字だけに和訓シカがあり、海驢<sup>あしか</sup>と羚羊／河鹿(?)をのぞけば「熊<sup>しか</sup>・猪<sup>しか</sup>・狸<sup>しか</sup>」はない。それは、後者には流木<sup>チカチック</sup> (⇒志賀島)の枝に似た角枝がないことと、弥生時代以降、西日本に相当数 (Ex. 仇, 臣, 安 (氏族: モンゴルのな安河原, 安見しし大君), 国, 流鏑馬等の語彙を携え) 入ってきた主に満州語<sup>ツングース</sup>の中に、馴鹿・馬・駱駝など大型獣の鬣から背筋・尻尾にかけて一本通る黒模様の呼称 SIKa があることと係わっている {氏族の yasud / yasun はチュルク (突厥) 語, 安見は国見}。注意したいことは、流木・海驢<sup>あしか</sup>のみならず、鯨<sup>シカル</sup>までが獣皮<sup>シカル</sup>の印象から「鯨」と称されていたことである。

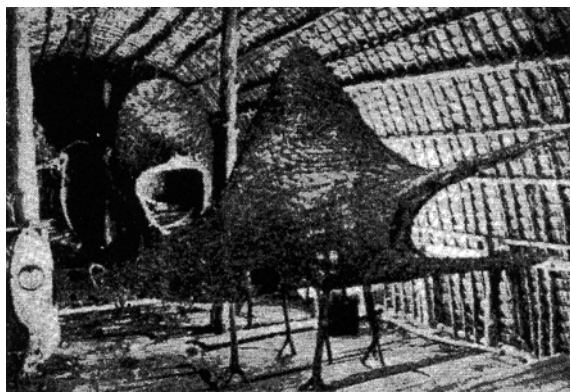


図 11 鹿屋 (かのや) の原型<鯨 (カ) の屋>  
宮田光雄『キリスト教と笑い』(岩波新書) より。

例えば、鹿児島湾に近い鹿屋体育大の「鹿 (鯨) の屋」などもパプアなどにある「鯨を族祖とした成年男子のイニシエーション」——図版参照

——を髣髴させ、団体成員になった「鹿（鯨）の児」らの活躍舞台が桜島（カゴシマ）ということで日本・南洋相呼応するのである。

なお、台湾アタヤル語のカノブ（鹿）が日本語にも曾存してたこと<sup>\*</sup>を村山師は述べておられ、「鹿（カ）」は kanop の ka 部分と指摘された {この部分に筆者は別意見を持つ——シカル（鹿）からのシ落ち／神が春日信仰を受容した茨城の鹿嶋へ乗り移る}。もちろん、＜アタヤル語と日本文化の関係＞も＜アミ語と日本文化の関係＞とは異なる意味で重要であるが、鯨話とは離れているので＜<sup>\*</sup>補論Ⅲ＞に委ねた。

## Ch.5 四万十とは——鯨（磯）と神集

'96年の夏、筆者ら一家は四国のトンボ自然公園見たさに高知県中村市に寄ったことがある。驚かされたのは、大人5千円という鯨眺望不定期船の看板が出ていたことであつた。待てよ、高知と上高地とは「鯨霊<sup>\*</sup>」だったのか……その他、四万十の河口には地名の名鹿・大名鹿（土佐清水寄り、ナは浜辺——ミクロネシア語の naa, 本誌第48巻第1号に「naa 海浜町」あり。奄美の秋名もこれ）と浮鞭（大方＝大瀨町）、市内にも地名に磯ノ川<sup>\*</sup>／口鴨川、河の中流寄りには楕円筒状の石二躰をおく「島神社」があつた。なんと豊かな“鯨象徴”であることか。

\* 理論的かつ風土的にも高知県は「樹木／森霊<sup>こうち</sup>」或いは「海／潮霊<sup>こうち</sup>」でも良かった {ヤミ語で kawas = 森、ブユウマ語では樹木。また、アミ族の海拝み、奄美平瀬の海拝み（マンカイ）、伊豆諸島（新島若郷）はウンバア仲間による浜イサメ、“潮霊”神社。筆者が「鯨霊」に固まったのは「土佐」の語源<sup>\*</sup> losa が「塩／潮」と知れたからである。甲子園に見える高知商業野球隊なども常に黒潮打線。

\* 「磯と韓国語の海岩（徐廷範氏）＝アミ語やアイヌ語共有の鯨＝海面に出没する曾根・大曾根」「油壺湾の浜諸磯」「漁船を転覆させる恐いイソナデ」「イルカの磯部詣り（鯨への挨拶、伊勢の伊雑宮——松前健博士）」と「香椎（潮霊）

／漂流木<sup>チカチツク</sup>については河童<sup>カコバハ</sup>研究家の大野桂氏や落語家の一竜齋貞水師（のちに人間国宝）らと共に'93年夏NHKでラジオ対談をした。

そうか、磯ノ川とは鯨ノ川\*（実際は海豚ノ川）だったのだ【事実、四万十川は海水が河口から10キロも入った地点の底層にまで沈んでおり、海の生物＝クロダイ、アメフラシ等が棲んでいる】。この他、北九州は宇佐神宮まで赴いた神功皇后の前に——海底から——現われ、皇后一行を韓国【多<sup>la</sup>多<sup>la</sup>良の津／新羅？ 因みに、福江島に多々羅と玄魚鼻、瀬戸内のは多々良、福岡市と益子の北に多田羅。ヤミ語の小舟＝tatalaから】にまで案内した顔の醜い<sup>いそら</sup>磯良も藤壺つきのコク鯨か座頭鯨\*。もちろん、四国にはさらに著名な香川県や香西姓（鯨<sup>コウサイ</sup>）がある。香川は「鯨川・神川・母川」のいづれだったか（香取神社は鯨<sup>か</sup>獲り）。

- \* このような鯨ノ川は、信濃～千曲川とか、天竜川、久慈（くじら）川、糸魚川（後述）もそうであった——Ch.7（白骨とは）で再述。
- \* 周防灘の荒潮に苦しんでいた神武天皇の舟師を助けるため現れた塩椎<sup>しおつちじい</sup>爺（海神）もマッコウ鯨の化身に見える。椎は槌（ハンマー）ゆえ。

在来、<sup>しまんと</sup>四万十川の語義につき、物理学者・寺田寅彦\*の‘四万十’アイヌ語義説——「<sup>シ・</sup>頗る・<sup>ママタ</sup>美しい」の語訛——がNHKのアーカイブ（9月13日の深夜番組も放映）で取り上げられたりして、こっちの方も懸案扱いだっ

た。

\* 「災害は忘れた頃にやってくる」で世に知られた寺田博士であるが、博士はなお、「火山にかんする比律賓の地名」を集めたり、「四国の地名をアイヌ語で解く」仕事を残した {岩波文庫に5冊の随筆集。寺田以前から「かなりのマレー語語彙のL-語頭を外してみたら日本語に対応した」という発見があったことは村山・川本・崎山師とも見逃していた驚きの事実である}。この寺田以前説を援用すると南洋語の「la (q) ut, 海」は沖縄語からアイヌ語まで入っている「トオー（海）」のほか、台湾や福建などの「アウ／オー（湾入り＝澳）」と沖

縄古語の「オー（海）」「日本海側にある一青姓の青（トオ）」を想起させる。

しかし、我々が唱えている文化人類学的な考え方だと：－

前段のような鯨（シマ）に、沖合・湖称のトオ——村山：海はインドネシア語 laut（海）の l- 語頭→t- 訛，福岡市の唐の原<sup>とうのぼる</sup>，岩手の遠野，青森の十和田，アイヌ語のオンネ・トー（湖沼）にまで定着——が後添して《鯨<sup>しま</sup>の海<sup>とお</sup>＝四万十の汽水域にニタリ鯨が十余頭つねに集まる》が得られ，あわせて，薩摩半島西岸（02年正月，鯨14頭が座礁）にある十柱神社と十走神社の社名も解けたのである（十柱は直立した鯨尾）。



図12 ニタリクジラの跳躍——四万十川のすぐ沖合い

「十柱」：たとえば，本論叢の45巻1号と49巻1号では，ヤミ族の‘半潜水艇’風の半地下式主屋<sup>ワガイ</sup>＝船<sup>フカイ</sup>を紹介した。段が高まった奥部屋（納屋）には，通常2本【有力者だと3本，ハワイ古代双胴船<sup>カタマラン</sup>の高艫（沖繩オモロ／奄美古謡の高艫？）を思わす】の，正面から見て真っ黒な‘八’字型をなす厚板太柱‘tomok’がやや後方に反る形で立てられているのだ——慶応大・近森正教授などの調査。必ず山羊の両角をデザインしているので，筆者は海人‘八木’族の出自とか東九州の大伴（友）姓と沖縄の友寄・友利2姓〔南洋語の diri＝柱。は dii / lii 語形にも訛す→友利。「おじ／じいちゃん／くじら」の3ジ〕を連想し，船尾‘艫（トモ）’の語源をもこれに求めたのである。南九州やトカラ列島の民俗に詳しい下野敏見博士はトカラの建屋儀礼のなかでの「 sunkujira」作法に注目され，「木をクジル（削る）→クジラ」が「 sunkujira」

と解されている。しかし、鯨尾がtomok的な柱に見立てられている（十柱神社など）以上、「 sunkjira」は「<sup>(スム)</sup>潜りゆく鯨の尻尾=家の主柱」に釈義できまいか。台湾のホェール・ウォッチング場所図——図版13——と小川徹博士の「十柱」誤解釈。



《神集と膳——拍と柏の違い》

ところで、うえに神功皇后がでたが、王権と鯨ということになれば、いにしえ、難波の浜辺で実修された天皇即位式にかかわる「八十嶋<sup>まつり</sup>神事」がある（岡田精司：『古代王権の祭祀と神話』・田中卓博士も研究）。筆者は、端的に、これは八十鯨が祝賀のため大阪湾に集まったのであると思っている——「富士論叢 48 卷 1 号」。神事に密にかかわる長野県・生島足島神社<sup>やそじま</sup>の祭神「大八洲の霊」が池中の裸島一軀（金井典美『諏訪信仰史』）だったからだ。

集まったのが群鯨（やそじま）ならば、古語の「集<sup>うご</sup>侍」も——〔屋久島 / 潜<sup>つま</sup> / 然<sup>〇</sup>からは / 売<sup>〇</sup>る / ki-sali（アイヌ語の耳）～<ki-<sup>ダクス ツマス</sup>については\*別資料稿にも>～〕の語源である〔樟<sup>ダクス</sup> / 神霊<sup>ツマス</sup> / sika（=の如く） / vulvul（バナナ） / tsalinga（は村山説）〕を保持している——南台湾パイワン語の「鯨（vunko）」ではなかったか。

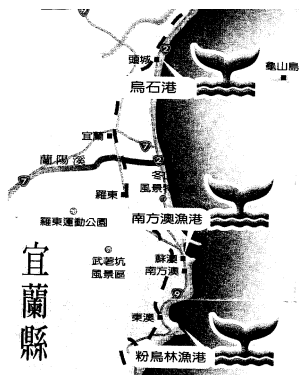


図 13 海（トオ）の尾柱。  
薩摩半島の「十柱神社」とは。

話はすしし休むが、筆者の隣近所に拍谷と拍崎の両家（木ヘンでなく手ヘン）が居られる。拍倉・拍原も珍しくない。もちろん、神社前の拍手は柏手ともかく。この「拍」は「神集」〔集は南洋での数詞siwa（9）→多<sup>さわ</sup> / 皴。——<\*後注5>ご参照〕ではな



いか。

たとえば、長崎・松浦半島の神集嶋\*、親鸞の師・法然の流錫予定地であった四国は幡多郡\*の柏島（イルカと南洋魚が蝟集）、地名鯨伏がある壱岐のカシワダゴ【先の松本師は‘顎’の語源をオーストロアジア語族の dago = 顎、に求めた。魚集め顎\*】、樽見鼻（鯨）や海面の黒南風をもつ四国・南宇和郡の柏崎、福江島の柏崎、そして、蓮池氏夫婦ほかが北朝鮮工作員に拉致された新潟・柏崎市の鯨波海岸／鯨波町等を考え合わせると、「集侍なわった」のは鯨／鯨（ウゴめく。葺めくのヒシも牛に係わり、満州語から）の可能性は高いと思惟されるのである。

- \* 近年、この神集嶋を柏嶋（ダイバーのスポット）と表記する地図／TVが多いのは「集」の湮滅を招く（死語になる）ので憂慮される。なお、筆者が扱った地図は昭和53年版の「日本分県地図地名総覧」（人文社）。
- \* 幡多（鱸）郡の柏島には、周りに黒南風、裸（海豚？）島、ツブラ南風、幸島、蒲葵島があって黒潮の香り豊かである。
- \* 雑魚（ざこ）の魚は南洋語 ka / ikan（食物、魚）からできた烏賊、干鯛にあるカ。転。日も日、東（東風）。メジ魚（黒魚）も南洋の黒。

ここで、先の柏・拍の混淆 {拍谷／拍崎姓など} を踏まえると、社前の拍手ならば「神よ集いませ」の合図、柏崎の鯨集まりならば「胸びれの海面拍ち」を追加できるのも面白い。そして、松浦（半島）党がもっぱら係わった宇野御厨（彼らは島名「神集」の語義を先刻ご承知）の重責役目である朝廷料理長の「膳」も食材／料理をとわず南洋語の食物に係わろう {ミヤゲ／朝ケ／夕ケのケは kai から、干し鯛／烏賊のカは ka- から}。では、次頁に、韓国東南部盤龜台遺跡の鯨集岩刻図を掲げる。

## Ch.6 海人（嬖天下の男達）の湯舟観と鯨の入山

Ch.1 掉尾の〈鯨トーテムの内陸進入〉の箇所でも幾つか挙例したごと

く、海人達が本州内陸部に入った証跡はおおい。秋田県の雄物川（雄物は鮭のボス「大助」か!?）をかなり遡ったところにある船頭峰越<sup>せんどうみねごえ</sup>、船玉神社や船岡地名などは云うまでもないが、史家の黛弘道学習院大教授\*は、白村江ノ役後（約1千3百年前）、多数の安曇族（彼らは鯨トーテム信仰を保っていた）が日本海側から穂高\*村入りしたことを詳論された（元東京教育大教授の北見俊夫博士も他の角度から指摘。論文名は後掲）。因みに、瀬戸内は呉の西南にある岩国市・柱十二嶋（四島は愛媛県にはいる）は安曇族の活動基地で日本海軍の停泊地でもあった（黛師）。ここで、海人達が自分たちの船呼称（複数）を携え内陸部へ進出していったことは——すぐ見る如く——大切である。

\* 黛師「海人族のウヅを探り東漸を追う」『海人の伝統』（日本の古代8、大林太良編、中央公論社、1987、所収）。この不朽の論文内には筑摩郡から糸魚川下流、新潟県にかけて青海神社が数カ所もあつたことに注目している。これは、かつて長野は海であったという言い伝え（Ch.7でのべる）とか、穂高神社を中心に挙行される「御船祭り（船の原型はゴンドラ風）」が50ヶ所弱の関連他社でも行われていたという壮大な史実と如何なる関係にあつたのか。一度、天智天皇（弟は大海南皇子）は長野に遷都を心掛けたが、その時の「長野の海」はもう退いた後だったのか……。

\* 近年の日本民族学会（四月から日本文化人類学会）の営みは、ヤミ族の船（尖り舳先と粟穂飾り）文化がふかく柱十二嶋（その一つが諸島<sup>もろしま</sup>）他の舳先象徴（船

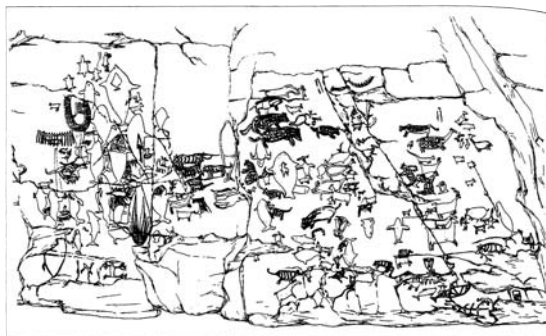


図14 韓国の岸壁彫刻  
この彫刻には虎、狼、猪、馬といった陸獣と、クジラ、イルカといった海獣が描かれている。弥生時代ごろに、日本海や朝鮮海峡で捕鯨が行なわれていた例証となる。彫刻には陸と海の大狩猟獣が対比されており、古代人のコスモロジーを見ることができる。（黄壽永・文明大『盤亀台岸壁彫刻』、東国大学出版社、1984年より）——後藤明

穂郷→穂高)に顕現していることを証示した——本誌前号所収の【「平成・黒潮の道」考——<穂高神社とYami族のチヌリクラン>——】ご参照。チヌリクランは尖った高舳先の準構造船で→柱十二嶋の中の竹の子嶋……安曇村の隣、穂高神社(特別な勝男木の舟屋根造り)の社名ホダカは黒潮圏ヤミ族のチヌリクラン舟{装飾と建造・進水儀礼を伴うイパニティカ/そうでないイピロアウン二種類の中の前者}の粟穂に根差す。その進水儀礼では、抜身の刀を持った舵取り一名を船に乗せたまま禪男大勢で海岸にまで担いでいくが、このヤミの船担ぎ習俗も穂高神社の御船祭りが穂高・等々力二村だけの男によって執行される旧慣に面影を残している——南洋語のtodo(刀剣)とjari(指)は「ロキ届く/等々力(刀の男)とキール鑿(ヤリ)」。当舟の切っ先みたいな竜骨舳先が新潟側の郡名「頸城(首木)」と瀬戸内海は柱十二嶋の「情島」名(ナサケは渚が裂ける)に訛していることも記憶に留めておきたい。



図15 ヤミ舟放り上げ儀式、刀持ち男は既に下船。

太平洋側から登場したグループも居る。彼等の多くは、

【シマ(脂・鯨・嶋) / イソ(鯨) / シカル+クリッ+シシッ(3語とも獣皮)、および<海→原>——これはCh.3の掉尾にある<大地母体観>にも係わる——の意味関連と‘クジラ’(-ジ-は柱/背骨)の語義】

を十分知悉し、自分たちの船称(perahu / siko / wago / oti / bangka, baka / lopi)をも行く先々の岩舟ブラウ(と盾付き醜シコ(舟) / 茨城の大歩ワゴ(諺:「ジャンカアタマジャンツノ双脚踏み双船」) / 小千→越智水軍はか / 墓トヒ / 土肥)に充てた痕跡が濃い。我々も、当時の内陸移住民的な感覚と認識レベルに立って何とか列島文化史の空白数ページを埋めたいのだ。この点、黛師はいみじくも「田畑耕作民は海民になれないが、海民は容易に耕作民になれる」旨を述べられた(上掲論文)。なお、舟(ブラウ)→風呂。とする拙旨に示唆を与えたのは旧日

本民族学会の祝<sup>いわい</sup>静氏(故人)が‘岩風呂’のテーマで2度発表され、大意を要旨録に残されたからである——白骨温泉も別名白船。

こうなると、温泉(湯舟)<sup>アロウ</sup>だらけ——言い換えれば脂<sup>しまじま</sup>だらけ——の島原半島(鯨海や縞見<sup>しまぼら</sup>せの鯨腹の可能性もある)とか鯨象徴に富む伊勢志摩は横綱格として、他にも、静岡県の富士市に香西町(鯨)<sup>こうさい</sup>、富士川を遡上すると鯨野(≒磯野)があつて気を魅く。

富士川の次の大井川だと、掛川市に久居島<sup>〇〇</sup>\*, 佐夜中山に雄鯨山/雌鯨山/佐夜鹿/大鹿(≠deer), 大井川岸にも島(地名)があり、北茨城や栃木県、岩手県の3地点にとべば去年の「磯出大祭礼」で知られた常陸太田の鯨ヶ丘とか那須温泉群にちかい黒磯[nasuが高砂語ならば穴戸/獵師に相当する。弓射に長けた那須与一? 「矢を射る/放つ」はアミ語で mi-panah], および三陸界限は船越湾の<鯨山/鯨峠ペア+黒島>がある。

\* 「久居」の表現は面白い。去年の北茨城「磯出大祭礼」でも、西金砂神社から2日さきに出発した雌鯨(雌雄は筆者の推測)の行列は、途中で、東金砂神社からまだ出発してない雄鯨一行に向かって何本かの矢を射放ち、「さあ行こう。ぐずぐずしないで」と催促していた。

### 《利根/吾妻とは》

ところで、霞ヶ浦ちかくに阿見町(アミ族は戦後まで母系社会)がある。この辺りから利根川をのぼって群馬に入った磯部(温泉)<sup>いそべ</sup>の人々も、四万湯原<sup>しま</sup>や四万温泉(舟→風呂。古語に‘船湯’)<sup>アロウ</sup>に着いたであろう。群馬は万葉集(母父)<sup>おもちち</sup>の時代から嬭天下で知られ、男性から畏怖(人差し指2本を頭頂においてドカーン)されていた吾嬭(山上の神靈=赤い噴火=ハワイの噴火女性)<sup>べレ</sup>が威張っていた——“あづま隼”{日本武尊が東国を去るとき榛名山などを振り返っての感嘆。なお、温泉が7, 8ヶ所以上ある島原半島は雲仙普賢岳の北側にも吾妻岳あり}。

茲で、少し利根川の名前を考えてみる：—

アミ語の「太陽」固有称は tsidar, 天神（但し万物および頭・両肩手にやどる）kawasからの転称例は⇒沖縄のテルカワであることなども屢述した。しかし、もう一つの転用例のほうは述べてなかった。即ち、アミ族社会で日常活動している女神 donge（ド n ゲ）も屢々太陽称に用いられるのである（馬淵）。平塚雷鳥：「元始、女性は太陽であった！」、卑弥呼が示す太陽（天照大神＝姉神，安本美典）も女性なので、アミ族の民俗社会文化はかなりの程度、邪馬台国の同文化に入っているかと推察されるのである。阿彌村を擁する利根川の「利根／刀禰／ド n ゲ」を想う次第である【魏志倭人伝において倭人の弓は上長下短と書かれている。高砂族の弓射は水平射と縦射の両方ともあったが、縦射の弓は上長下短！】。

### 《鯨の潮吹きと鹿教湯》

さて、当時の火山力・婦人（＝大地）力・湧出力なら、全国のそこかしこで、いまの羅白温泉（知床半島）、川俣温泉（栃木）、足湯で有名な諏訪湖畔温泉や湯田中温泉・渋温泉地獄谷（ともに長野）にある鯨の潮吹き様の間欠噴気泉\*が見られた筈だ（渋温泉のほうは間断なき噴気と聞いた）——これに温かい岩肌（野沢温泉の毛無山）、地揺れ（地震）と硫黄穴（肛門・糞）／硫化水素臭（屁）が揃えばまさに山中の鯨一頭（＝山齋？）だ。案外、長野の鹿教湯温泉は鹿（deer）の教えた秘湯ではなく、＜鯨（カ、シカル）の潮吹き＞が教えた場所ではなかったか。

\* 噴気といえば、黒船第一次来航のさい、下田の人々は伊豆大島（三原山）が泳いできたと驚愕している。黒船煙突の蒸気が原因であろうが、「流れ島伝説」も潜在心理的に働いたであろう。下田には夷子島と遠国島があって尊崇されている。エビス／エベスはよく鯨——「サカナ」の語源と併せて稿末の〈補論Ⅶ〉ご参照——を指しているので夷子島を鯨の寄り着きとしても誤りなろう（遠国も沖縄のニライカナイを思わす）。そして、伊豆大島にも潮吹き鼻とか鯨体内部に似た大縞状地層がある。

たとえば、民俗学者兼画家・早川孝太郎の『猪・鹿・狸』（講談社学術文庫）——文化人類学者の安藤真氏が披読を薦めた——によると、天竜川をのぼった設楽郡\*山地のある古老は「鳳来寺山（郭：船着山との間に大海／有海の2地点、山北に鳳来湖。また、近くに大島（鯨）川）にもくもく雲が湧いて見えた。目を凝らしてみると数千数百の鹿がドドッと走っていた（要約）」と早川師に述懐している。鳳来寺山は鯨の蓬莱島／山を思わせ、天竜川を挟んだ静岡との県境寄りにも二座の浅間山がある。富士吉田の浅間神社には南九州が活動舞台であった木花開耶媛（コノハナサクヤヒメ）と捕鯨の徐福が祀られている。また、設楽ではシャチと称される山の神がいた（早川師は獵矢＝サツヤ、獵果＝サチ（幸）からのシャチと考えていたが、海民史的に捉えれば山ノ神が鯨（シャチ）であっても抵抗は感じない。有名な俗信：「山ノ女神が醜魚オコゼを好む」も「魚王の鯨がオコゼを好む」に翻訳できるかも知れない——醜魚を差し上げて美魚を授かる）。

こう見てくると、古老の観想は始めっから、「巨鯨（シカル）一頭が躰を揺すっていた」という話で良かったのではないか。たとえば、地震の古語「ナ居震る」は新村出（村山師も）によって「満州語のna（大地）＋居（雲居など）の揺れ」とされ、大野師（岩波古語辞典）も従っているが、「魚体国土観」的に云い直せば、「魚（ナ）居の身震い」でも全然可怪しくない——詳細は次のCh.7で。

- \* 設楽をヤミ語／アミ語の接頭辞を使ってsi-tala（魚のシシャモもsi-?）と分析できれば、talaは、①梵語の「音楽等の拍子を合わせる、sa-talaとも」、②カンボチャ語の「船」になる。設楽近辺には船着山もあるが、現地特有の花祭り（早川著に『花祭』）から今は①に傾いている。

鯨（シカル）の山入りを支える狩り言葉もある。体脂肪が厚く海もよく泳ぐ「ヤマクジラ」の命名経緯もこの辺にあったのか（山鯨は「猪」の別

名。比国ルソンの猪海峡とバブイ島、沖永良部島の「jerabun（猪の巢）」意。たまたま、『国分直一博士古希記念論文集<下>』にも安田宗生氏の「海を渡る猪」という沖縄古俗を踏まえた短稿がある}。

## Ch.7 《白骨／白船——「塩の道」：糸魚川／天竜川は「鯨トートテム」の道》

これまでの論述では、「白船＝湯ノ花(脂)が浮かぶ風呂舟」<sup>しましま</sup>「脂脂＝島々」で通してきた。だが、本章ではもう一つの角度「白＝海彼からの祖先／村山説の「<sup>シラツク</sup>光輝」から「白船・白骨」を見ることにしたい。本当に、「白船」に「族祖船」, 「白骨」に「その船の竜骨（穂高船の場合だと特に首木＝頸城郡）」みたいな語義が隠されていたのだろうか{但し、以下の叙述では「竜骨」語義解にはもう触れず、別の解釈の可能性に入っていくことにする}。

まづ、「白」の恩恵が気になった（宮田登著に『白のフォークロア』がある）。12年に一度の沖縄・久高島イザイホー祭り（すでに2回停止）が举行される前日の晩、祖先（鯨？）が白馬（蒼波の波頭、朝廷でも「<sup>あおうま</sup>白馬ノ節会」）に乗って来島し、<sup>かべーる うどんみやー</sup>神屋原の御殿庭とよばれる祭場の裏山に入って待機する例がある。奄美の秋名海岸で行われる平瀬マンカイ行事（「<sup>おや</sup>祖つ神」を海彼から招く）でも参加する女性は皆白衣を着る。また、沖縄から奄美に掛けて根強く歌われている“高鱸に白鳥（カモメ）の居ちゅん＝祖先が我等の航海を庇護してくれてるぞ”（蘇畑卓郎東京富士大教授の賜益）という歌もある。この他、太陽を運ぶ巨魚——図版7——とか、前掲日置論文（鯨の白黒重視）を参照するならば、白み掛かる朝の鯨と落日時の鯨で二色を表せられよう。そして、富山の白山信仰の六道（地獄）巡りなども生者の魂をrefreshさせている。

### ＜メソポタミア・南洋的な同舟共済（呉越同舟）＞

「白船＝族祖船」とする背景を述べたい。周知のように、トルコのアラト山はメソポタミア大洪水（旧約の創世記）のさい、箱船に乗って難を逃れたノアの一族8人が漂着できた推定場所である。片や、河内国の哮ヶ峰（何者／コウチの咆哮？）に物部一族の祖先たちが天ノ磐舟〔馬淵師：族祖漂着を記念する船形石座に各部署の村人クルーが坐って船漕ぎ儀式“バランガイ”を行う比国の事例に相当〕にのって降着した事例を筆者は何度か本誌及び「月報富士」等において倉敷市鶴形山阿智神社にある大磐座とか岩手県の「石ノ巻」に対比させてきた。阿智神社の＜廣舟歩燈臺＞碑を2回実見できたからである。そして、村井吉敬上智大教授に見せていただいた東インドネシア・アルー海域の小島丘にある船形石環〔stone circle, 大小二座。ヤミ族も大人船と子供船〕の写真（門田修氏の『漂海民』にも収載）こそこれらの事例のアーキタイプに近いと唱えておいた。「石環」ではないが家屋に入って窓から櫂を出し「みんな力を合わせて漕ごうよ。オランダ官憲を恐がるな、天国は近いぞ」の儀式はトラジャ付近でもあり（馬淵）、儀式は廃れたが櫂出し窓だけはしっかり残している長屋例はスマトラのニアス島に健在……沖縄は与論島の別名‘かいふだ（櫂屋）’にも反映。

そこで、穂高神社の社史を読み直すと、安曇人の祖先はまづ穂高の山稜に到着、山地部を経略してから梓川流域を経営し、徐々に穂高村の方へ展開したことになる。伝承の間では、ニギノミコトの高千穂降臨とか台湾に数力所有する「あの山からわが祖先は発祥した」型の伝説に等しい＜高みから平地＞という動きだったのである。とすると、現在アルプス山稜に残っている安房、穂高、船窪という黒潮由来の信仰的船（岳）称は穂高神社の建立以前からあったということさえ考えねば成るまい。また、「族祖山頂降着legends」においても船使用かどうかまで弁別する必要は出ていよう。先代旧事本紀に登場するニギハヤヒが引率した天磐舟グループの河



内国哮ヶ峰（山頂）降着は船使用タイプ。



図 16 大人船・子供船と山羊角



この辺で「白骨」の論議に移る。白骨は白船温泉からの換骨奪胎，大正の文学者・中里介山が『大菩薩峠』（「都新聞」に大正2年から連載）のなかで“白骨の巻”を設けたことに始まる……が，今夏の入浴剤騒動以降，各TV局・大新聞が‘白骨’にあたえた解説であった。しかし，産経新聞は抜きんできていた。8月21日當紙の温泉教授・松田忠徳氏の調査寄稿\*によると，江戸時代の文人もこの湯治場に喜んでいき，当時，必ずしも白船称だけではなかったのだ。すなわち，明治26年，W.ウエストンは『日本アルプス登山と探検』のなかで白骨温泉をつかい，同33年刊，吉田東伍の『大日本地名辞書』でも「白骨の温泉，白船の湯とも云う。大野川より一里半……」と書かれていたそうである。

\* 氏が温泉浸かりを“禊ぎ”に類喩された点には語学的に賛同しにくい。湯温と水温の違いは別としても，禊ぎは“身殺ぎ”ゆえ。

昔から「白骨」があったという事実は黙過できない。それは，クジラという語詞の成立とも係わるからである。すなわち，本誌旧号で鯨のジは南島語の「柱：diri／diü」，クは「巨／メラネシア的「貴」／九から」と何回

か証述。大腰筋の背柱肉（ソジシシ）に背骨と柱（<sup>ことじ</sup>琴柱・<sup>たかくらじ</sup>高倉下）の両意味が参加している。たとえば、日本書紀の国生み譚の箇所は（一旦、八尋殿とか天ノ御中柱を造ってから廻る）古事記とは違い、直接、オノコロ島を国中の柱となしてイザナキとイザナミを廻らせている。沖縄（翁場／<sup>はいあん</sup>海翁／くじら）、宮古島や長野県木曾郡の両「島尻」も書紀風に扱えれば「鯨の髻」から一步進んで「島の<sup>しり</sup>diri／<sup>しま</sup>鯨の柱」と読めよう。このような鯨柱ならば、塚とか丘（江戸川区の<sup>ししほね</sup>鹿骨＝<sup>ししみ</sup>鹿見塚、平塚の<sup>ししみ</sup>鹿見堂と<sup>（かもめ）</sup>前鳥神社、久慈川の語源を留める常陸太田の<sup>いさふし</sup>鯨ヶ丘、<sup>いさふし</sup>沓岐の鯨伏）を成すので男女が左右から廻るのに支障はない。

そして、沿岸部ではない上高地（<sup>しまのとお</sup>四万十／<sup>こうち</sup>鯨の海がある高知は鯨霊）や島々谷川一帯にもそんなでっかい<sup>く+じ</sup>巨背骨が存したふしはあるのだ。上高地の明神池畔には穂高神社（安曇族が創建し、綿津見命は三祭神の一）の奥宮が設けられ、下のほうの「御船祭」（昔は7月27日、穂高町から松本市界隈の全域で50社近くが挙行）に合わせて明神池にも竜船（ゴンドラの残影）が浮かんでいた。7月27日の意味はまだ解明待ちであるが、一応は、アモイ・泉州・台湾平地での「閩鬼仔門（nクウワイ・クイアムーン）」の日取り{年に一度、ご祖先が人間世界に戻ってきて（日本ならば那須馬・・・）歓待を受けあの世に帰る日}に直近している。



《信州は昔の河内湖（内海）と同じ？ 江戸期の信濃郷名は<sup>ふるみ</sup>古海！》

「長野は海。それゆえ島多し（海ノ口、海尻、小海の3駅、海野姓＝世界的なバオリニスト、塩尻駅、塩沢、塩野ほか）」が民俗学畑ないし巷間伝わる言説である。かつて、『梅干と日本人』で知られた樋口清之國學院大教授は、現在の河内国は少なくとも弥生時代までは内海であった、海石榴市という万葉集にある定期市の名も一証左（当時の人は舟で交易）。海拔50<sup>くらい</sup>の場所に弥生遺跡がぐるっとある（自らの発掘経験）のでこの「河

内海（湖）」の水深は現在の地面を引けば10数<sup>うつみ</sup>はあった……と主張された。こうなると、内海という地名をもち樋口条件に合うようなデータを有する沿岸の場所は昔は湖水面であったかも知れなくなる。オランダ人と同じく日本人も嘗々と干拓＝陸地造成を続けてきたのであろうか（戦後は八郎潟を潰してる）。しかし、長野は内陸なのだ。

全地球猛暑（海面は1千年間も容赦なくじわじわ上昇）、南方スダンランドからの脱出航海民はかの「巨大スケールの洪水伝説\*」を代々伝えつつ（東京江戸博物館は約5千年前いまの埼玉県の半分くらいまで海進がきてる模型を展示）、この信州にも入植した……その結果が《長野の海》！ という様に、筆者としては論旨を広げていきかけたのであるが、よりコンパクトで合理的な説明もある。乃ち、本州各地にどでかい足跡を残したダイダラボッチ的な巨人が長野にも居て、海水を囲む堤を蹴り裂いたところ、群馬側\*に水が流れ込み今の地形になったという「蹴裂物語」〔裂く⇒佐久市、佐久町（現在は「防柵か馬柵」説）。海瀬・海尻・海ノ口も此処！〕である。『湿原祭祀（八ヶ岳の御射山々中の湿原から稲作）』他の著者・金井典美師だったか諏訪考古学会のどなたかに、このやうに伺った覚えがある。うへの北見俊夫博士も雄篇「東シナ海の海人文化」〔小学館、叢書：『海と列島文化』のIV巻『東シナ海と西海文化（代表：網野善彦）』所収〕のなかで、「安曇平だいらの水海説」を穂高町の木崎湖・青木湖などの存在およびフォッサ・マグナ地質構造線（糸魚川や'04年末に臨時ダム湖が3つできた芋川が此に沿っている）に潜む未知の「力」から肯定的に受容したき旨を述べ、そこに、『善光寺道名所図会』（天保14年、1843）にある

「祭礼（郭：穂高神社の御船祭り）ノ節ハ氏子ヨリ船ノ形ヲ作り色々ノ美服ヲ以テ是ヲ飾ル。コレ往古此辺湖ナリシ時ノ余波トイヒ伝フ」

という史料を付け加えられた。こうなると、糸魚川沿いの大町に（西）海ノ口と鹿島、そして野尻湖の信濃町にも古海、穂波ふるうみと御鹿山、諏訪湖の南に高遠藩（トオは海）があって見逃せない。アルプスの稜岳名（鹿島檜）に

までなった鹿島は——潮来<sup>いたこ</sup>／板来の語義見直しから——<sup>かーしま</sup> 神鯨／<sup>かー</sup>鯨島だった可能性が浮上する。因みに、糸魚川\*沿いには小谷村<sup>おたり</sup>があるが、南洋語の「tali ayaer (糸紐・水) = 奔流・クリーク」が想起される。音義的にも tali は「谷(タリ)」に近いし、伊豆<sup>したる</sup>の下流も si-tali からか〔南洋語の walin (水), walil (川) からの「割り／掘割り」もある〕。

- \* Ex. 海拔1千<sup>の</sup>の山地に住む高砂族でさえ洪水伝説をもち、地球物理学の知識が進んでいなかった戦前期の移川子之蔵博士〔台北帝大教授、馬淵師も教わった。当時、アメリカ発の「Culture Anthroplogy」なる学問名を「文化人類学」に訳した人物。同一語訳は東京にて西村真次早稲田大教授によっても成され、内地・台湾の距離も手伝いお二人の関係は微積分を発見したライブニッツとニュートンのようなケースになっている〕をして——台湾中央山脈にしょっちゅう発生する大雲海が「洪水譚」の原因、霧島山脈も川霧→雲海。だからタイヤル族若者夫婦の高山地帯における尾根道沿い新天地探しは記紀高千穂神話にあるニニギノミコトの(南九州) 国探しの原型——という決して端倪できない論文(松本信広編『日本文化の起源・民族学編Ⅱ』平凡社がそれを収録)を書かせている。
- \* 筆者は学童疎開で5ヶ月くらいお世話になった上信電鉄の群馬は丹生村・桃林寺(曹洞宗)に戦後2回お邪魔し、丹生湖という用水池が桑畑やコンニャク畑よりもかなり高く水面を張ってすることに気付いた。終戦前、B29は銀紙を撒きながら富岡辺りの工場を狙っていたが、もし爆弾が逸れて丹生湖ならば決壊・水浸しだなど、怖じ気づいたことであった。佐久でおきた蹴裂は、或は、多量の流木(巨大地震)によって出来た数カ所の土砂堰堤→天然ダム→千曲川中・上流の「小海(駅名)」がある日、決壊して何十、何百年ぶりに平地が再出現したという筋書きだったのかも知れない。
- \* 抑も、糸魚川が鯨川であった形跡がある。糸魚(イトヨ)／南洋富魚(トミヨ)があるのでタヒ、コヒ、カレヒ、ウグヒ、エヒ、ソヒ、漁り(ヒ・ジャリから)のヒ(台湾でもヒィ)が「糸」に後接しての「糸魚(イトヒ) = 鰻の幼魚」なども候補に浮かぶが、イトは「細小」でなく「第一」をも意味していた。乃ち、イトはイサナ(鯨)のイサ(南洋語の əsa = 第一・族祖から。村山・川本・郭)に相応し、徒然(イタヅラ、単調)のイタ、「イト高し、イト悲し、イト深し」のイトでもあったのだ(イタナ・<sup>いさな</sup>鯨／イトナ／イトヒ)。博多湾の西にある糸島半島にも志摩(鯨)町があるので、「糸島 = 第一の魚」。

### ＜真那板山は皇板（おほいた）＞

小学生でも空に鯨が浮かぶ絵画を描く時代である（戸山小学校で何枚か見た）。平地沿岸部の鯨ヶ丘・鹿見塚・大名鹿・島（鯨）名だけでなく、「長野は海ゆえ鯨（シマ、シカル、シシッ）も居た。上高地は山之上にある鯨霊」という古代トーテム信仰的な情景をも再建すべきではないか。鯨波海岸（柏崎）がある新潟寄りの北信州地帯になるが、噴気泉の湯田中温泉付近から西の富山県に向かっては古海付近の御鹿（鯨）山のほか、毛無山（鬼無里温泉を含む、鬼怒川＝毛野川）が4ヶ所もある。その1つには直傍に下樽（上田市の生島足島神社は鯨島）と大平峰、2つには傍に飯縄山がある。イヒナファは「口魚場」と解せ、前掲の「沖繩＝翁（鯨）場」を思い出させる（イブは朝鮮語の口、「云ヒ」の語源——大野師）。富山県に近づくと大渚山と真那板山（＝鯨尾、皇板）、すぐ北傍の新潟県内にもマナイタ山\*がある。富山県内に入ると毛勝山と猪頭山、小鹿熊山があり（男鹿半島のオガ？）、クジラの毛無しに対してのヤマクジラ（猪）の毛有りとも思わせたが、毛勝山は二座の猫又山（mataは南洋で目）に挟まれているので美しい雲豹（maayaa, Ch.8 参照！）の毛柄であったか。

\* 下野敏見博士、野村孝文『南西諸島の民家』など：薩南・トカラの古風家屋では、大黒柱は土間と主部屋の間とか台所によく建てられる。筆者：大黒柱はハワイ古代の2、3本ある船尾の突っ立ち／ヤミ族主（船）屋のtomok柱／速鞆神社のトモどうよう鯨柱！ 大伴氏、友寄姓。

あつみ  
渥美半島（となり知多半島の知多はインド語で「木綿」、栽培の盛況が想起される）・天竜川（磯出大祭礼の一主役である東金砂神社の近くにも竜黒磯という地名、奥穂高の袂にも竜船）方面から上ってきて南信州、そしてあづみ  
安曇村というルートも考えられる。こっちの途中の鳳來寺山がじつは鯨山（麓近くには大海と有海、泰阜村には川沿いに黒見）ことは先程の  
おおみ  
べた。より上流の下伊那にある阿智と和知 {w- 落ちで阿智\*, watiは南方

で「宇宙／森羅万有」の2地点も途轍もないスケールの思惟（倉敷市・阿智神社の西にも和知）の痕跡と云えよう。すると、安曇村自身に何らかの鯨象徴が存したと相成ってももう驚かない。

- \* 「兄／足<sup>アボミ</sup>／薊<sup>アボミ</sup>／穴／アタシ／阿蘇（犬）と阿曾」も「鰐／鷺？／ワザミ野<sup>ワナ</sup>／罾<sup>ワナ</sup>／ワタシ／ワツォ（川瀬のヲソ）」から。我妻も2読み。この音則から「汗・蟻・悪シキ」の原語姿も手繰れるか。なお、「鷺」の語源につき小澤重男博士の著名な「モンゴル語の足掴み／‘バシ（掴む）’から」がある。

ゴンドラ型舟の前後両舳先の穂飾りが穂高の山稜名に投影されるくらいなら、同じ海面を遊弋していた祖先鯨がこの辺りに鎮座（奥穂高の南の<sup>アボウ</sup>安房山＝ヤミの<sup>カシマ</sup>avang船，北アルプスの船窪岳と鹿島槍，<sup>カシマ</sup>神鯨）していても奇異ではない。

思えば、穂高神社の祭神は穂高見之命、（彦火の<sup>ニニギ</sup>瓊瓊杵之命\*、綿津見<sup>カナ</sup>之命の三柱、傍神は宇都志日金柝命（映し日天空で咲く）。一、二の両柱はチヌリクランの高い舳先とそこを飾る粟穂（モロン→柱十二嶋<sup>もろ</sup>の諸島）、ウツシヒカナサクは舳先両側に彫られた日輪と知られてきたが、本誌前号の段階において、ワダツミの語義を＜海藻神＞の次元で済ませていたのは筆者の不明であった。

- \* この命には通常「ニニギ＝丹熟」語義解がある。ただ、天津彦彦火之という冠辞には夜間トビウオ漁に不可欠な松明男のイメージも出ているので、ニニギの語義にはその漁に用いられる何かの竿の可能性をも秘めている。

<sup>わだつみ</sup>「海神／海底神」は海底から神功皇后の前に現れた磯良例（また、上に引いた日置孝次郎氏の名解説）の如く、鯨体として顕現しても良かったのである {鯨のほか鮫川大主という旧沖繩国王の例もある。抑も、沖縄での海神称ウンジャミは海鮫→ウンザミ→ウンジャミで釈け、タヒチでも鮫齒<sup>なぎなた</sup>長刀もちの首長がいた——図版 17}。また、漁労民族学の大家・秋道智弥

氏も所著『海人の民族学』（NHK ブックス）のなかで、コドリントンの名著『メラネシア人』などを繙きつつ、ソロモン諸島の「海の霊（半人半魚の形をとったり、威力ある魚で顕現）」はカツオなどの魚を支配し、カツオ釣りの名手の死霊（agalo）もサメと化し、人々の海上安全と海幸の豊かさをもたらす云々と現地の信仰を報告されている（筆者：まさに鮫川大主！

また、この事例は「サカナヤカタナ」の語源にも係わる）。すると、穂高神社（含むワダツミ）の奥宮は上高地の明神池畔、高地は鯨<sup>カワチ</sup>霊であるので、此の（鯨明神の）池は生島足島神社の鯨池に相当しまいか。

## ポリネシア文化の誕生



図17 鮫歯長刀をもつタヒチ首長葬儀用コスチューム（国立民族学博物館近着展示品。印東道子教授蒐集）。台湾の土著道教の師公（サイコン）が持つのはその俣ノゴギリ鮫の鋸突棒。共に沖縄中山王国の鮫川（神）大主を想わす。

### <白船＝白骨ベア>

さて、白骨温泉の少し下流にある島々谷川には鍋冠山・黒沢山・小嵩沢山などの山腹から転落してきた礫石で川岸／川中そこかしこに白い堆積が形成されている（現地および角川版『ランド・ジャポニカ』の「島々谷・駅」語釈の元）。しかし、同様な姿は上高地界隈の梓川でも焼岳・六百山・霞沢山からの礫石によって形成されている。そこかしこの白い堆積は白<sup>シマル</sup>脂肪の連続とも執れ、大きな脊椎骨の形とも見れよう。この他、大正池辺の浅い梓川の中には写真家が見逃さない白枯れの小巨木（焼岳の噴火による）が沢山立っている（台湾新高山＝現玉山＝の頂上近くにも日本統治時代が始まった頃（百余年前）の森林火災で焼け残った「白木林」がある）。<sup>しろきばやし</sup>

鯨体国土観を想起すると、それらの白木柱は体の横側にでてる肋骨にも見える。根こそぎ横倒し状の枯れ木ならば頭部の髭と云い(根)、肋骨(枝)、尻尾(梢)と云い正に江戸川区の鹿(鯨)骨／白骨である。我々は知床半島の宇土呂岬に横たわる稍曲がった鯨島がアイヌ語で「オンネ(朽ちた)・フンベ(鯨)」と表現されることを知っている。同様なことが上高地(鯨霊)で生じていても不思議ではない。鯨トーテムを奉じていた安曇族と雖も、南安曇郡に籠もって1千3百年、ほぼ四十世代は過ぎた。黒皮何十トンもの鯨が具体的に如何なる形態であるかは忘れて仕舞ったであろう。ただ、祖先伝来の「クジラ」呼称とその意味(巨柱)だけは後世まで伝承された……。

すでに「四万十」他の条で<鯨=島>関係は疑えなくなった。これを巨視的に捉えなおすと、上高地における「島々(鯨々)」は、そのまま「白骨=トーテム鯨の巨柱、礎(いしじ、沖縄語)の連続」となり、目を挙げて仰いだところにある“白船山”こと穂高連峰【村山:「光輝」のt'ilakが「白」、白縫(シラヌヒ)は逆語序で「日の光」。ヤミ船の日輪4マークは「映し日天空で咲く】と対になれるのである。前稿における筆者の失念であったが、ヤミ族が(旧・新両教を問わず)会堂内部の正面壁／緞帳にチヌリクランをデザインするさい、必ず鯨を伴わせていたのである(船の下支えが鯨、或いは聖餐卓そのものが巨尾=頭下尾上の潜り態)。もちろん、かような「鯨祖伝説」はヤミ族・蟹民(羽原又吉『漂海民』)のみならず、将来は呂宋島、内南洋(ミクロネシア)、インドネシアにまで視野を広げて博捜せねばならないであろう。

## Ch.8 「湯」の<満州語源説>? —— 「夏油／縞」の語源

山鯨(猪)のシマ(脂)が浮かべば熱→透明、冷→白くなってくるが、草津・箱根の湯ノ花(石灰・硫黄)ならば常に白か微黄色で泉面／泉中に濁



遊・沈殿し、岩にこびりつく〔温泉でなくても島根は加賀潜戸の内部は明瞭な層理／縞\*をなし、愛媛県砥部川のシマ——手で握れるほどの灰白層状砥石——も脂状〕。ただ、岩手夏油温泉のゲトウは、夏島（脂）／夏湯（←油）とも可能（油谷／島谷／湯谷3姓、島津と日南市の油津港）なので、ぜひ、静岡の安倍川沿いは＜油山温泉、油島、湯ノ島、油野＞の地名変遷に詳しい故老の記憶を辿りたき所以である。

\*「縞」の語源は上に述べた擬白脂状の鯨腹および南洋語の「虎」にある方言「虎」（sima）の2ルーツ合体と推定したい。

さて、「湯」の語源にもどれば、村山・福田昆之両師の満州語「duul\*（暖める／日が昇る）」説——福田：『日本語とツングース語・改版』——がある。ただ、語成立の際、漢字語の「油」も触媒として働いては居なかったか。少なくとも野外の「湯（温泉）」ならば白（豚骨ラーメン様）・赤湯（米沢藩）・黒（東京湾をめぐる綱島／有馬／厚木温泉など）・青緑やピンク（登別の大正地獄）・泥茶・透明と揃っていて室内料理の「湯」（t'ang= 中国語／t'wng= 台湾語）with 油脂」宛らだからである。

\* 若干のD語頭をもつアルタイ語彙がY語頭の日本語語彙に訛したという立場。前東京大言語学科主任教授の服部四郎博士は満州文語の dobori 「夜（night）」から「yo／夜」を、また村山師も「4（ヨ、ヨン）」の語源をd-語頭の中期モンゴル語（4 = do:r-ben）とトルクメン語（do:rt）にもとめた——村山：「日本語の系統をどうとらえるか」『日本語学』1983, VOL.2, 明治書院。

### 《アグネス氏の浅勉強？》

所で、よく、漢族文化圏では温泉が乏しいので、「お汁ではない純 hot water」だと沸騰／非沸騰別に「開水と熱水（中国語）」「滾水と烧水（台湾語、温泉は台湾に多いが）」と称し、一語の「湯」だけで自前天然および卓上の「hot water」を示せる日本語とは違いがある……「湯煙（銭湯マーク）」の暖簾を見たとき、当初、「日本人はスープ（湯）に浸かるのだから

うか。」と不思議であった……とのべる人は居られる（9月11日のNHK教育テレビ「暮らしに生かす水と緑——黒部川扇状地からのメッセージ」（富山シンポジウム）におけるアグネス・チャン氏の披露もこれ）。かような文化比較は中近世以降ならば当たって居ようが、古代に遡り、かつ、「湯」という日本語がまづ野外の温泉地（<sup>ブラウ</sup>船）で成立した多様な存在態……という事情をも考え合すと、それほどシャープで深みのある文化比較ではなく成っていよう。

「週刊ポスト」点火による今夏の温泉事件は、凶らずも、我々に、黒\*白褐（赤身）3層からなる鯨体／魚体国土観や<sup>カシワメゴ</sup>袋顎、<sup>クリッ</sup>巨大な背骨跡（白骨）への認識をより強めてくれたようだ。

- \* たとえば久里浜、但し付近には海獺島もある。おととしの初夏、大洗海岸で80余頭のハナゴンドウ（体長2<sup>メートル</sup>）が打ち揚げられたが、九十九里浜は先ほど述べた八十鯨（島）に発想に近い90鯨？ 或いは90アシカ？

## 《後 注》

注1： 本稿で高砂族という称謂を使い台湾原住民／先住民を用いなかった理由：周知の通り、オーストロネシア系の台湾原住民は、第二次大戦後まもなく日本総督府時代の「高砂族」、大多数の平地台湾人が戦後使いだした「山地同胞（soaNte tongpau）／山胞（soaNpau）」「高山\*族（kosoaN dzok）」という3呼称を嫌い「台湾原住民（＝臺原）」——日本側の学者だと「台湾先住民」——を用いるよう力唱しだした。ただ、筆者は、「高砂」をアミ族居住圏のタツキリ溪とか基隆近郊の金瓜石、金包里、九分仔にかつて多量に産出した砂金を指して呼んだ「貴砂」だと解釈しているので、当時の日台交易の史実\*を風化させたくない気持ちで、今しばし「高砂＝砂金」称を用いようと思惟した次第である。もちろん、安倍明義：『台湾地名研究』では「タカサゴ」に別語釈を与えているが。

- \* 豊臣秀吉は「豊臣秀吉高山国招諭文書」を持たせて原田孫七郎を台湾に遣わしている（1593年々末、92年は呂宋国へ）。富士山より高い山が七座、3千<sup>メートル</sup>以上の山が30座も犇めいている（数字は馬淵師より）宝島＝高山国の消息は秀吉の耳にも入っていたのであろう。当時のポルトガル船長達が台湾に向かって「イラ・フォルモッサ」（イラはIsland、麗わしを意味するフォルモッサはform

と同じ）と叫んだのも直なる哉であった。

- \* 天理大学・天理参考館の中村孝志師が同大出版の「南方文化」誌に詳報。恐らく、安土城の天守閣などを金箔で貼らねばならなかった織田信長は——鹿皮・煙硝まで供給できる——台湾から来たポルトガル宣教師により親近感を抱いたのであろう。序でだが、南洋語のサドル（鍍金）が中尊寺貼金のころ金を生産しだした佐渡島の名に、また、東欧より東のアルタイ諸語圏にまで露頭しているOXI（牛）という語詞も隠岐の島名に訛していないだろうか——佐渡の普宿で『牛のきた道』や『縄文の地名を探る』ほかを出された本間雅彦翁（台湾方面軍司令官で比律賓に転出した雅晴陸軍中將のご長男）のご賛成はまだ得ていないが……。

注2： 40巻2号の「寺・島・鯨…語源考」、2001年4月1日の台湾教会公報（稿）、本誌48巻1号の「磯・嶋……」（研究ノート）など。

注3： 日経新聞文化欄で世間に公表されたこの吉田説は一気に数十万読者の目に入ってしまいますので、末輩ながら早めにより蓋然性の高いと思える案を併示させて頂くことにした。氏が「甲斐のカヒ（hi）は峽（カヒ）」を排して「斐はヒ乙類でhi」とまで述べたのは是肯すべきである。次に、「山梨は全国有数の大盆地、それゆえの川合（カハヒ）→kahī」とされた点は音韻論的に無理。私どもが授業中で教え試験に出しているのは「甲斐の力は接頭辞ka-か例の神（カア）——甲（コウ）の字音も台湾でkah——なので、甲斐の第一解は南洋の「apoi=火」（アイヌ語もこれ）を足した“ご神火”，第二解は“ka-phuin（果実、東チモール語）、柿もka-khi”，khi-ā（柿）は台湾語。所で、本学学校名の富士もインド出自のpuji（賛美）……。次に、「下総・上総の総（フサ）は麻の植生があったから」に賛成されない吉田氏は「川が塞がれ入江が塞がれる千葉県地形からの塞（フサ）」を提示し、手賀沼そばの布佐などで節柵（領地の境）→フサクと述べている。ここで氏は発作（ホッサ）を忘れられていた。現に美浦のすぐ側に布瀬と発作（ホサ）の地名がある。布作と書いてもフサと読めたのだ。日経文化欄の掉尾で吉田氏が「恵那峽の恵はwe（彫）、彫穴→恵那」とされたのは素晴らしい。台湾でも小刀のようなもので壁・机等に穴を作ることを「we chit khang（画一坑）と云い、彫・画（絵）の通底を氏から教えられた。ただ、「彫・大地（満州語のnal）」も使えるか。

注4： もし、シロナガスないし白海豚（金沢文庫の八景島マリンランド）のような希見動物に拘るならば、鳥羽市の目の前にある大山島が見逃せない。この島には白崎と黒崎があり、鳥羽側の加布良古崎とペアをなしている。蕪（カブラ）と白海豚の頭頂はおなじ言葉だった可能性はたかい。上で見た「頭」に「白色」

を意味した南洋語の buraka / burang が付いたのがカブラか …… 九州に「田油津媛」という女酋もいたので、「アープラ」という語構成は無かったものか。定説の適否検討に戻れば：

「油（アブラ）／炙り」の語根推定形 \* ampu- の語源は村山師によって比国語の「apoi（火）」、台湾ツォウ語の「pouju（火）、師は apoi の a- 落ちとする」に比較対応されている（師は -m- 入れと -i 捨ての二仮定を措いた）。閩系台湾語でも「炙る」はツォウ語によく似た puu であり、漢字「焙」？

注5： 南洋語 siwa (9) → sawa (多, 皺?)、と考える根拠を挙げたい：

バシー海域語の pilad / palad (共に「掌」, 「開クと蝶々?」の語源。蝶々はタミル語ではないと思う)、国と国後、拾フと拾フ、堅塩媛と堅シ、キリストとハリストス (露西亞正教)、妣 (漢語) とパパ (母) と南洋のパパランギ {大地母神と天父神。I- 落ちのヤミ語「天空」は「秋」に}、浅井と金関両師による wi 乃穴 / waa (豚, 沖繩) = bah (猪肉, 台湾やベナン)、川本師による wi (井戸) と wai (水, 南洋語)、千葉の高家と長野の高家、「明日 / 散らかす」を閩・台湾語で「明仔早と明仔早 / yi と ya」、罷免と罷免、皮 (ピ) と頗 (パ, ポ)、KI- / KA- と SI- / SA- 接頭辞などである。

注6： 佛 (ホトケ) の -ケが土器 (カワラケ, \*サラケ) とは柳田民俗学の知的財産。この -ケを南インドの kēl (土器) に求めたのは藤原明氏 (『日本語はどこから来たか』講談社) の功績である。なぜか? スンバ島の霊屋には祖先壺 (kēl) が屋根空間に安置されており、三品彰英博士も韓国における類似例を撮影されているからだ。しかも、台湾高砂社会の中では少なくとも台南シラヤ族 (国分直一博士の『壺を祀る村』)、パイワン族、アミ族が壺を聖器扱いにしている。国分著評を書かれた金関丈夫師は一度筆者に向かい「しーっ、仏教大 (仏陀は男性) の先生も学会にみえてるので言いづらいが、私はホトケは女性名詞 …… 語義は釈けました！」とご著作では綴ってない見解までを賜益くださった ……。筆者が「台南シラヤ族の雨乞い (puli 誉め) 歌」の中からタミル語の patukar (水田) と「be carefull / safe」を意味するパトロン (庇護者? 台湾を三十数年間植民地経営していたオランダ人の語かも) を拾えた理由は、アミ族の内輪自族称 pantsah、潜水若者称 kappah 及び聖壺称 devas を印度語の「5, 拳」「水壺」および「女神の Deva」に遡原できてたからである (アミの人々のインド人似の風貌と合唱は素晴らしい)。Deva 女神の称が山形の出羽三山信仰にきたと書いたのは菅原七郎の好著『ことばの履歴書』。「天 / 雨」の語源が南印度にあると睨んだ大野晋博士の先見 (語料えらびに小失敗はあったが) は正しかったのである。あれほど藤原 = 大野説に厳しかった村山師が晩年「(語彙レベルで云うならば?) 日本語の中には矢張りインド渡来のものも有ったよう

です（略旨）」と呟かれたのが印象に深い。

## 補論 I 《安曇／塩とは》

'93年2月8日の朝日夕刊には増田義郎千葉大教授の「環太平洋的な海藻文化（略題）」があった。ペルーの高地民が塩分／ミネラル摂取のため海藻を求め（また、貝紫利用のためにも）、海岸地帯まで降りてくるという貴重な報告であった。安曇村が、日本海側からだ塩尻を通して来、太平洋側からならば天竜川をのぼってくる“塩の道”（宮本常一・亀井千歩子）のほぼ終点にあることは周知の通りである。驚くべきことに、増田師は、ポリネシア語の *limut*（海藻）をあげ、ペルーのかような海藻交易文化は環太平洋的な現象、と提唱されたのである。リムーはメラネシアで *lumi* に母音転換し、海藻神の実物が伝統文化陳列館に残されている {台湾の加禮宛語でも *lumiyán* = 塩、藻塩焼く (\*この点後述あり)}。ここで、泉井久之助博士の有名な <L 語頭:T 語頭> 音則が適用されるので、ルミは綿津見のツミ【ワダツミの綿・和田は台中サオ語の「海」<sup>wodagan</sup>、海／阿波／アワビ（鮑）はバシー海域や台南シラヤ語の「海／海」<sup>hawa abas</sup>、藻（モ\*甲類）は台湾語の毛（mo 甲）／水毛＝藻】と知れるのである。

我々は、国分師が門司側の速鞆神社で発見された本邦初の海藻神のこと（『日本文化の古層』）を知り、安曇／渥美の語義をも知った以上、鯨がケルブ（海藻・草）なしには良く生きれないと云うことをも安曇族の鯨信仰<sup>トワツム</sup>に加えるべきではないか。速鞆の神官は引き潮の海で採れたワカメ／アカメ類を社神に供えているが、「隼鞆＝鯨尾」なので社神は鯨と云うことになる。また、下関側の赤間神社（正面は竜宮城づくり）でも三方にのせた海胆（ウニ、粒数は少なかった）を社前の関門海峡に生き放していた。速鞆・赤間はペア神社（国分師）なので赤間は長時間潜水したマッコウ鯨などの充血した目ではないか。

なお、「塩（シホ）」の語源につき村山師は高砂諸語をふくむオーストロネシア語の *asin*（塩）からシ-（川本師も同説）、「先っぽ／シッポ」から-ホ（細粒）とされた。筆者は、閩・台湾語の「魚-pó<sup>トイ</sup>、菜-pó<sup>ツアイ</sup>」（乾魚、干し野菜）にある pó（「干す」の語源！）をシホの-ホに宛ている【魚は鯛・鯉<sup>カレヒ</sup>・鱈<sup>ネヒ</sup>・鱧<sup>ネヒ</sup>・鱧<sup>ネヒ</sup>とか魚醬・糸魚川<sup>いぐ</sup>・魚繰り網のヒ／イ】。この稿の本文中でも触れてあるが、アミ語の *kasid*／*kasin*（塩）は「香椎（潮霊）神社」「鹿島神宮？」{他考も可能。吉田東伍の<船の係留杭＝カシ・マ>説が有名}の「潮（カシ）」に入っている。

因みに、今年の6月、東京外語大で持たれた「日本文化人類学会（元日本民族学会）・第38回研究大会」の場で京都大学の山田仁史さんは《神話における塩、交易品としての塩——台湾のオーストロネシア系諸民族を中心に——》という

興味深い報告をなさった。塩代替植物の利用とか、アミ／ヤミ両族の土器による海水煮詰めなどの紹介があったが、「海藻の燃やし灰」からの製塩法には言及がなかった。筆者は、太平洋の各地において、＜同一語彙による「潮・塩・海藻」3概念の表示＞という経済人類学的例証を増やしたいと期待していたので、その点だけは些か残念であった【9月30日付の日経新聞朝刊の文化欄にはカメラマン片平孝氏の注目すべき世界各地「塩」産出場行脚記が載っていた。もちろん、渋谷の「塩とたばこの博物館」には中南米の塩代替植物のスライドなど資料は豊富である】。

## 補論Ⅱ《ヨナと鯨——旧約聖書約拿書の巨魚腹中に対する欧米学者の伝統的 見解》

筆者が幾つかの場所で「ヨナはナガスクジラみたいな巨大髭鯨の口腔内（鼻腔下）で3日間生き延びた。」と述べていたら某先学から強い指正を頂いた。趣旨は、「長い西洋思想史における伝統的で重要な解釈ではヨナは巨魚に呑まれたのだから胃袋の中で呻吟していた……従って、当時の大都市ニネベの浜辺に吐き出されたとき、彼は体中酸に侵され上半身は白く見えた……確か、上野の西洋美術博物館にも小幅の油絵があり、浜辺で跪き悔い改めているヨナは白く描かれていますよ。」との御内容であった。慌てた筆者はデイビット・ポーソン著（伊藤和代訳）『イエスの復活（The Resurrection）』をとり寄せ、巻末資料を読ませて頂いたら気になる叙述が中にあった。

- 1例> 1891年2月、アルゼンチンに近い南米フォークランド島沖でバートウレイという男が水中に投げ出された……、当の鯨が捕獲され、解体されているときに意識不明で皮膚がひどく爛れていたバートウレイ氏も胃袋の中から助け出され、徐々にではあるが捕鯨船の船長室で完全に回復した。
- 2例> ポーソン師はカリフォルニアの「マリンランド」で鯨の調教師から驚くべき動物生態の映画を見せてもらった。イルカが死んだとき、同じプール仲間の鯨が3日間そのイルカを口にくわえて離さず、しかも、イルカに呼吸をさせようと水面にbodyを押し上げ続けていたのである。

結局、ポーソン師は第2例のほうが約拿書のケースに当たると想定され、テキスト（ヨナ書2章5～6節）にある「水は私の喉を締めつけ、深淵は私を取り囲み、海草は私の頭に絡みつきました。私は山々の根元まで下り、地の門がいつまでも私の上にあります。」という情景を海底のシーンとみなし、ヨナは急溺死（仮死？）の状態で、3日後、クジラに銜え助けられ浜辺に着いた。とい

う顛末に読者を導いていきたい訳である。

実は、5～6節（版によっては6～7節）の情景は「山々の根元まで下り」をのぞけば、その他すべての文言はヒゲクジラの口腔内の情況にも合うのである。特に「ヨナの頭上にあつた門」は「強い軟骨で出来ている弓なり状の長棒」ではなからうか。この弓棒から左右両口縁部にクジラの髭が生えているのである【この生体解剖図までを理解していないので、現行の旧・新両教「新共同訳聖書」当該箇所訳文は1955年改訳版にある「貫の木」3文字を捨ててしまい、文意を却って曖昧にしている】。



図18 吐き出された白肌のヨナ  
宮田光雄『キリスト教と笑い』（岩波新書）より。

'02年の9月、筆者は豪州パース市の国立自然歴史博物館で巨鯨骨格の展示を——ほぼ毎年、厚岸や能登・種子島などに来て海草（sea grass）の分布調査を日豪共同で実施しているDr. John Kuo博士（東京生まれ）の説明付き案内で——見せて貰った。現場で5髭はある鯨の口腔下にもぐり、うえのごとき考えを強めえたのである【当館の一角にホルマリン漬け5髭弱の巨大怪魚を展示。'70年代から世界で7例ほどの報告有りとの説明だったが沖縄と小笠原、南米、パース他。当館は江戸時代に幾例かの人面魚捕獲があつたことをまだ知ってなかった】。ただ、再度、太地の「くじら博物館」等に赴いて口腔写真を撮ってくる必要は有ろう。

ヨナの頭部と顔がすっぽり鼻腔の穴に入ってしまうと、クジラは口唇呼吸が忙しくなり（アップアップ）、3日間、潜水は不可能——ヨナの生存も保証されたのではないか。

### 補論Ⅲ《エビスと鯨、サカナの語源》

漁労神エビスは鯛を肩に担ぐ福々しい漁翁で表現されている（恵比寿駅）。また、通常は兵庫西宮市の西宮（戎）神社が総代ごとく商売繁盛の拠り所で

ある。しかし、トカラ列島は悪石島エベス小祠の鋸歯文様付き鳥居をくぐるとき「神ニマス鳥居ヲ入レバ、コノ御代ニ、ヒツギノ宮ゾ安ラケク」と唱えている——下野敏見師（郭：鋸歯紋を吉野裕子博士はパイワン族の祖先である百歩蛇のウロコとされる。唯、鋸鮫の鋸歯とか齒鯨の齒ではどうか）。また、ヤミ族のすぐ南に住むイトバヤト（島）の人々は、自分たちの死後、近くのhawa（海の意。台湾平埔語のabasと共に阿波、淡路、鮑）に棲むamong（巨魚）の腹中に吞まれてマリアブ（平安）になると信じている——山田幸宏<sup>元</sup>高知大教授の踏査（日置：死者の家の白黒幕は‘鯨幕’）。こう見ると、柩ノ宮は鯨腹に対応し、海神・魚王のクジラが諸々のよき子分魚（子孫親類を意味する南洋語のsakaからサカナ、ただ、満州語説も可能——内容は既述）を人間に贈ってくれたようだ。鯨ご本人も大量の脂肪（アング）をもたらして呉れるので正に商売の神様の資格十分といえる。

「恵比寿・大黒」信仰の根底には「海の靈力・海神の力（郭：鯨）」への信仰が横たわるとする下野師は、鳥居の鋸歯文はヤミ船チヌリクランの鋸歯文と同じ、悪石島祭礼のさい、この鳥居を大工司<sup>でーくじ</sup>がまず祀らねば（郭：ヤミ族の造船儀礼！）誰もくぐってはならないと聴査。これなど鯨と建柱儀礼（スングジラ）、鯨と船擬き半地下式家屋（の奥柱＝トモk）、鯨尾＝十柱神社の関係を重要視している拙稿の立場を強めてくれた。最後に、北見俊夫師ひく『五島民俗図誌』によれば、中通島の飯ノ瀬戸郷には平素海水に隠れた親子白岩<sup>しろえびす</sup>があって白蛭子様と尊称されていた。親子ともに姿を現すときは豊漁の前兆であり、皆は狂喜せんばかりであった（白海豚？）。

#### 補論Ⅳ《縄文酷暑期スングランドからの北航実例》

本誌49巻1号にある拙先稿——「平成・黒潮の道」考——<穂高神社とYami族のチヌリクラン>——は幸いにも東京富士大学・岡本慶一教授の命名に与ったものである。その稿と今回の稿とを併せて、より多くの<南方語・南方文化::日本語・日本文化>の例証を挙げようと心がけた心算であったが矢張り重要なデータ——特にコドリントンの<海の精霊像>図——を漏らしてしまった。以下、項目別にそれらを補わせて頂きたい。

- 1) '05年7月26日の朝日夕刊には80年後の黒潮のスピードが今より3割早まっているとの日本海洋研究機構の発表を報道。この流速より若干早かったのが縄文酷暑期のそれと推測でき、当時の黒潮の運搬力の確かさを知らされた。
- 2) ヤミ族の「地底国伝説ならび其処の尻尾あり人間」は信州の甲賀三郎型伝説と神武紀にある「有尾人」に対応。
- 3) ジャワ島とボルネオ島の間に残っている浅海底の（嘗ての）河川の両岸域など



に例えば与那国島（6mから27mの深さ）や台湾・澎湖島の近海に今残っているような石造り遺構と等しい人造構築物が発見できるか否か。南島語族の生活の証跡！

- 4) 「海とメ藻」「黴（バイ）」の語源。南方は limut（海藻、藻塩）の lumi 形（台湾の lumiyán）からアヅミ、ワダツミの津見。南島語の l- 語頭は邦語で t- 訛するが、ゼロ訛も良くあった。メラネシアの「海藻神」観念が速鞆神社の神祇に現れているからには、海藻神の lumi「津見」と umi「海」は並立！ 南洋の mahi（海）が北上して古越語の mai（海）と長崎他の「海（メ）」に成ったことは '04 年にのべた。ならば「藻（若布のメ）」も mahi「海」からでないか。面白いことに漢字語の「黴」はマイに遡るが、「黒色」を意味する「mahi-何」は北セレベスに多いのである。
- 5) 「鮎、アユ」は南方の「halus（皮膚・肌の美しさ、生地・織地の細かさ）」から。中国語と台湾語でも鮎は「傑れたケツ魚」。
- 6) 大赤蟻のクレンガイからクレナイ「紅」。この蟻は寒い弥生期日本では絶えた。
- 7) ニューギニアの大鱸ことバタからトカラ列島などの巨魚ハタ。
- 8) 南方のパナナニ称「ウティ、ボレ」から邦語の「家」と「惚れ（木花開耶媛伝説の共通から）」。
- 9) Riak-riak（漣、水の波紋）からセセラギのセセ。r-::s- は泉井・川本法則。
- 10) 今稿の図4にヨルダンの双頭土偶を古代日本（がわ側清水など）とアミ族に共通せる左悪右善（kawas）の例としてあげたが、近年エジプトから「両手のみを左右に開けた（身体なし）」kaa（カー）とよぶ像が出土しており、「アミ族のkawasは印度出發かも知れない」（私信）との馬淵東一師の先見力に驚かされた次第。



図19 海の精霊像（コドリントンによる）

- 11) コドリントンの The Melanesians (1891), Oxford に日本語の「刀、太刀魚、槍、届く、等々力、蟹と鎧（魚のヨ足す胴着のロヒ）」の語源をヴィヴィッドに示している図があったので松本信廣師の「南海の釣針喪失譚---再説豊玉姫説話」, 1975より孫引きさせていた。なお、同様の「海の精霊」（Tamate）像をコドリントンは図示しているが、南九州の「玉手（箱）神社」につながる。



## 平成 16 年度研究業績一覧

本業績一覧は、本学専任教員が学部長宛に提出した「研究業績リスト」をもとに、編集委員会が再整理したものである。

研究業績などのうち「投稿中」のもの、未発表のものは発表のあった時点を基準に掲載することとし、当該年度中の業績でも本誌の「業績一覧」からは除外する。

### 研究業績

- (1) 著書（単著／共著，以下同様），翻訳書
- (2) 論文，研究ノート，書評など
- (3) 学会発表・調査報告書など

それぞれに「タイトル」，「発行所」（発表場所），発行（発表）年月を記載する。

## 足立 行子

—著作

「ナレッジかアートかセオリーか」(論文), 国際ビジネスコミュニケーション学会年報, 2004年10月

## 網本 尚子

—著作

「仏教と笑いの芸能」(研究ノート), 能・554号・京都観世会, 2004年7月  
「野村狂言座演目解説」(解説), 野村狂言座上演プログラム第26, 27, 28, 29回, 2004年4月, 8月, 11月, 17年1月

## 井手 健二

—著作

『会計の世界』(本学共同研究費による共著), 白桃書房, 2005年3月  
「英国企業における財務業績の開示実態」(論文), 武蔵大学論集第52巻第3号, 2005年3月

## 伊波 和恵

—著作

『写真でみせる回想法』(共著), 弘文堂, 2004年8月  
『顔研究の最前線(『顔と化粧』)』(共著), 北大路書房, 2004年9月  
『新・痴呆性高齢者の理解とケア—old culture から new culture への視点—(第6章『痴呆性高齢者への療法的アプローチ』中, トピックス⑤「化粧を用いた心理的アクティビティ」)』(共著), メディカルレビュー社, 2004年9月

—学会発表

「ライフレビューブックを用いた個別ケアの試み—高齢者と介護者の関係形成のために—」(共同), 第5回日本痴呆ケア学会大会, 朱鷺メッセ(新潟), 2004年9月  
「ライフレビューブックを用いた介護者研修—高齢者と介護者の関係形成のために—」(共同), 第5回日本痴呆ケア学会大会, 朱鷺メッセ(新潟), 2004年9月  
「生活に根ざした写真を用いた回想法の開発1—写真選定について—」(共同), 第5回日本痴呆ケア学会大会, 朱鷺メッセ(新潟), 2004年9月  
「Development of "Reminiscence Clues" for the Elderly People with Slight Dementia: Using Pictures in Showa 20s-30s (1945-1960)」(共同), 20th International

Conference of Alzheimer's Disease International 2004 : Kyoto, 2004年10月  
「The trial of caregiver staffs education using : Life Review Book Form」(共同), 20th  
International Conference of Alzheimer's Disease International 2004 : Kyoto,  
2004年10月  
「中高年者の「お墓」観 : 成人期後期以降のライフ・イベント (1)」(共同), 日本発  
達心理学会第16回大会, 2005年3月  
「ラウンドテーブル話題提供 : 生涯発達における死の意味 (共同), 日本発達心理学会  
第16回大会, 2005年3月

### 岩 田 康 成

—著作

『日経で学ぶ 実践! 企業会計』, 日本経済新聞社, 2004年6月  
『会計の世界』(本学共同研究費による共著), 白桃書房, 2005年3月  
「会計情報とリーダーシップ」(論文), Fuji Business Review (第26号), 2005年3  
月

### 浮 谷 秀 一

—学会発表

「EQ測定のための基礎的研究 —共感性に関する質問項目と顔写真との関係—」(本  
学共同研究費による共同研究の結果報告), 日本応用心理学会第71回大会(日  
本大学商学部), 2004年9月

### 太 田 さつき

—学会発表

「学生の職業意識を変化させる教育—2時点のアンケート調査による分析—」(共同),  
日本社会心理学会第45回大会(北星学園大学), 2004年7月  
「若者層におけるフリーター志向(1)—フリーター志向の構成因子と規定要因—」(共  
同), 日本心理学会第68回大会(関西大学), 2004年9月  
「若者層におけるフリーター志向(2)—フリーターを題材とした教育がフリーター志  
向に及ぼす効果—」(共同), 日本心理学会第68回大会(関西大学), 2004年  
9月  
「就職活動に対する自己効力—測定尺度作成の試み—」(本学共同研究費による研究  
の結果報告), 日本応用心理学会第71回大会(日本大学), 2004年9月

「Effect of career education on college students' attitudes toward work」(共同),  
2005 Hawaii International Conference on Education, 2005年1月

## 岡村 一成

—学会発表

「就職活動に対する自己効力—測定尺度作成の試み—」(共同), 日本応用心理学会(日本大学商学部), 2004年9月

「若年層のキャリア意識の形成要因に関する探索的調査」(共同), 日本応用心理学会(日本大学商学部), 2004年9月

「EQ測定のための基礎的研究—共感性に関する研究—」(共同), 日本応用心理学会(日本大学商学部), 2004年9月

(上記3点とも, 本学共同研究費による研究の結果報告)

「メール文字のイメージ解釈についての研究」(共同), 日本応用心理学会(日本大学商学部), 2004年9月

「中小企業における従業員の経営革新行動に関する一考察 —挑戦促進行動を中心に—, 産業・組織心理学会(日本大学経済学部), 2004年9月

## 岡本 慶一

—著作

『現代のマーケティング戦略1 製品・ブランド戦略』(共著), 有斐閣, 2004年9月

『マーケティング用語辞典』(共著), 白桃書房, 2004年10月

「広告的<知>の考古学6」(論文), 日経広告手帖, 2004年4月

「消費経験とコミュニケーション」(論文), 日経広告手帖, 2004年11月

「ブランド・エクスペリエンスのためのフレームを考える — 社会的知識としてのブランド」(論文), FUJI BUSINESS REVIEW, 2005年3月

—書評

「ADVERTISING & MARKETING BOOKS (連載毎月)」, 毎日新聞SPACE, 2004年4月~2005年3月

## 小川 達也

—著作

『環境マネジメントハンドブック』(共著), 日本工業新聞社, 2004年12月

## 河野 英子

### —著作

『商社の新実像—新技術をビジネスにするその総合力』(共著), 日刊工業新聞社, 2004年7月

『国際ビジネス・エコノミクス—新しい研究課題とその方向性』(翻訳書, 共同), 文真堂, 2005年2月

「新分野に挑む商社」(論文), 『日本貿易会月報』, 第614号(社団法人日本貿易会), 2005年5月

### —科学研究費調査

サービス多国籍企業の人的資源管理—カルフルの国際展開を事例として(共同), 科学研究費研究課題「アジアIT革命の進展とサービスマルチナショナルズの現状と課題」, 2004年5月

## 篠崎 香織

### —著作

「意思決定における社会システム観の影響—原子力発電の利用をめぐるパブリック・アクセプタンスの決定要因に関する実証分析—」(論文, 共同), 日本リスク学会誌・15巻2号・日本リスク学会, 2005年3月

### —学会発表

「社会システム観と信頼の機能—原発立地地域での調査をもとに—」, 科学・技術と社会の会(東京大学学士会館分館), 2004年7月

### —書評

「Knowledge Management Foundations」, 経営行動研究年報第13号, 2004年5月

## 関口 和代

### —学会発表

「若年層のキャリア意識の形成要因に関する探索的調査」(共同), 日本応用心理学会第71回大会(日本大学), 2004年9月

## 蘇 畑 卓 郎

### —著作

「経済成長理論 再訪(i)」(研究ノート), 富士論叢第49巻第1号, 2004年6月

## 高 石 光 一

### —著作

「日本のベンチャーキャピタルの特性に関する考察」(論文, 共著), 実践経営2004年, No.41, 2004年4月

### —学会発表

「中小企業における従業員の経営革新行動に関する一考察」(共同), 産業組織心理学会 (日本大学経済学部), 2004年9月

「ベンチャー企業とビジネスマッチング」(共同), 実践経営学会 (亜細亜大学), 2004年9月

### —学術調査

「商店街活性化事業における事例調査研究事業」(共同), 同左, 2005年3月

「平成16年度異業種交流グループ情報調査活動事例集」(共同), 同左, 2005年2月

## 田 畑 智 章

### —学会発表

「学生の職業意識を変化させる教育」(共同), 日本社会心理学会第45回大会 (北星学園大学@札幌), 2004年7月

「降水量デリバティブの価格付けに関する研究」(共同), 日本経営工学会平成16年度秋季大会 (金沢工業大学@金沢), 2004年10月

「Measuring the Shift of the Efficient Frontier using Multiplicative DEA and CFA」(共同), INFORMS DENVER, 2004年10月

「Effect of Career Education on College Student's attitude toward work」(共同), 2005 Hawaii International Conference on Education, 2005年1月

「Huffモデルを応用した医療機関評価モデル」, 未来医療政策研究所H16研究報告会, 2004年7月

## 土 井 充

### —著作

『「国際会計」『会計の世界』』(本学共同研究費による共著), 白桃書房, 2005年3月  
「会計システムの本質的機能に基づく会計職能の類型化」(論文), 三田商学研究, 第47巻第1号 (慶応義塾大学商学会), 2004年4月

### —教育資料

『財表理論 最終点検 新会計基準「穴埋め」問題集「退職給付会計」, 「税効果会計」』,



税経セミナー8月号(第49巻第12号) 別冊付録, 税務経理協会, 2004年8月

### 富岡次郎

—学会発表

『英語スピーチコンテスト実施に関する一考察』, 日本英語コミュニケーション学会, 2004年10月

### 根岸欣司

—著作

『2005年版土地建物・マイホームの節税対策』, ぱる出版, 2004年4月  
『会計の世界』(本学共同研究費による共著), 白桃書房, 2005年3月

### 花尾由香里

—学会発表

『環境ホルモンに対する企業のコミュニケーション対応』, 産業組織心理学会市場部門研究会, 2004年5月  
『内分泌攪乱物質に対する消費者と企業のリスク認知とコミュニケーション対応』(共同), 日本社会心理学会第44回大会, 2004年7月  
『外因性内分泌攪乱物質に対する消費者のリスク認知(2)—テキストマイニングによる分析—』(共同), 日本社会心理学会第44回大会, 2004年7月  
『外因性内分泌かく乱物質に対するリスク認知とコミュニケーション』(共同), 産業・組織心理学会第20回大会, 2004年9月  
『外因性内分泌攪乱物質に対する消費者のリスク認知と企業のコミュニケーション対応』(共同), 第29回日本消費者行動研究学会コンファレンス, 2004年11月

### 速水昇

—著作

『政府の役割と租税』(編者, 共著), 学文社, 2005年3月

### 広瀬盛一

—著作

『流通新論』(共著), 八千代出版, 2004年4月

- 『基本マーケティング用語辞典』(共著), 白桃書房, 2004年11月
- 『エッセンスで読むコトラーのマーケティング入門の入門』, あさ出版, 2005年2月
- 「消費状況に基づいた広告への態度について—快楽主義と実利主義尺度の適応可能性—」(論文, 共同), 吉田秀雄記念事業財団 第38次助成研究報告書, 2005年3月

## 藤 尾 美 佐

—著作

- 「インターネットを利用した英語力の育成 —翻訳サイトの有効な利用法」(論文, 富士論叢・第49巻第1号(東京富士大学学術研究会), 2004年7月)
- 「Silence during intercultural communication: a case study」(英語による論文・海外のジャーナル), Corporate Communications: An International Journal Vol. 9 No.4 (331-339頁)・Corporate Communication Institute, 2004年11月
- 「Communication Strategies for Interpersonal Involvement」(英語による論文), 言語情報科学・第3号(145-158頁)・東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻, 2005年3月

—学会発表

- 「インタラクションにおけるコミュニケーション・ストラテジーの役割」第3回FLTA・TALK 合同研究会(早稲田大学), 2005年1月 (FLTAは東京大学大学院外国語教育学研究会, TALKは早稲田大学田辺英語教育学研究会の略)
- 「The Impact of English Communication in Global companies in Japan」(本学共同研究費による研究の結果報告・英語による発表), ABC International Conference(中央大学), 2005年3月 (ABCはAssociation for Business Communicationの略称)

## 藤 森 大 祐

—著作

- 「スロー」の行方」(研究ノート), 富士論叢・第49巻第1号(東京富士大学), 2004年7月

## 松 本 公 文

—著作

- 『会計の世界』(本学共同研究費による共著), 白桃書房, 2005年3月

## 光岡 健二郎

### —著作

- 『ITによる流通変容の理論と現状』（共著），お茶の水書房，2005年3月  
「経営者に求められるリーダーシップの新しいあり方とリーダーシップモデルについて  
の若干の考察」（研究ノート），フジビジネスレビュー，NO.27（東京富士大  
学経営研究所），2005年3月

## 武藤 篤生

### —著作

- 「Receiving Characteristics of the Electromagnetic Interference on DC Power Supply  
Line with Inverter Gate Load」（論文，共同），Proc. of 2004 Int'l Symp. on  
EMC, Sendai, 2004年6月  
「A Generation Mechanism of Electromagnetic Noise on the Circuit due to Ground  
Potential Variation（論文，共同），Proc. of 2004 Int'l Symp. on EMC, Sendai,  
2004年6月

## 安田 賢憲

### —著作

- 『経営戦略論』（共著），創成社，2004年4月  
「ソリューション・ビジネスに伴うソフトウェア生産の標準化の進展」（論文），富士  
論叢第49巻第1号，2004年7月

### —学会発表

- 「ソリューションビジネスに伴うソフトウェア生産の標準化—S社システムの事例か  
ら」，東京富士大学学術研究会（於東京富士大学），2004年9月  
「ソリューションビジネスに伴うソフトウェア生産の標準化—S社システム開発標準の  
事例から」，日本経営教育学会第50回全国研究大会自由論題報告（於九州産  
業大学），2004年10月  
「ソリューションビジネスにおけるソフトウェア生産の標準化問題について—中堅イ  
ンテグレーターP社の事例から」，2005年1月度企業経済研究会・部会（於中  
央大学），2005年1月

山口 哲 朗

—著作

「異業種交流からの事業開拓」(論文), 信用保険月報・2005・3, 2005年3月

山口 善 昭

—学会発表

「企業における差別的待遇」, 経営行動研究学会全国大会(日本大学), 2004年7月

山 下 達 哉

—解説

「アライアンスで新事業・新製品開発」, 『合理化』No.447, 2004年10月

—書評

「商社の新実像」, Fuji Business Review 第15巻第1号, 2005年3月

米 田 正 巳

—著作

『会計の世界—この一冊で会計のすべてがわかる—』(本学共同研究費による共著), 白桃書房, 2005年3月

『平成16年度版 税務計算マニュアル』(共著), 新日本法規出版, 2004年9月

—学会発表

「東京都の公開制度改革」, 地方自治研究学会第21回研究大会全国大会(早稲田大学), 2004年8月

## 執筆者紹介

上野 麻美 東京富士大学非常勤講師  
郭 安三 前 東京富士大学短期大学部教授  
蘇 畑 卓郎 東京富士大学教授  
光岡 健二郎 東京富士大学教授

---

綱本 尚子 岡本 慶一 (委員長)  
蘇畑 卓郎 土井 充  
根岸 欣司 藤森 大祐

---

第50巻 第1号 (通巻85号)

平成17年9月1日 発行

編集 東京富士大学富士論叢編集委員会

発行 東京富士大学学術研究会

代表者 岡村 一成

東京都新宿区高田馬場3-8-1

☎ 03-3368-2154

---

印刷者 豊文社印刷所

## 編集後記

- 「クール・ビズ」が話題になっています。温暖化の悪循環を断つために、せめて服装だけでも涼しげにしようという環境意識の高まりも背景にあるでしょう。小池環境相を旗振り役に小泉首相など政治家の方々がノーネクタイ姿で「クール・ビズ」をアピールし、アパレル業界も降って沸いたようなビジネスチャンスに期待を高めているようです。
- しかし、街を歩いてみると、一般のビジネスマンの反応は今ひとつです。30度を大きく超えるような不快指数の高い町中でも相変わらず上着にネクタイのビジネスマンが目につきます。テレビでもクール・ビズを奨励するコメンテーター自身がネクタイをしているというようなちぐはぐな光景も目に付きました。
- もともと衣服は暑さ寒さから身を守るという本来的な機能とは関係なく、「記号」としての役割を負わされてきました。お得意先との商談、改まった会議、自宅でのくつろぎとは異なる緊張感を必要とするとき、男性の場合はネクタイをつけることで、役者が舞台衣装を取り替えるように比較的容易に気分転換が可能になるわけです。
- ネクタイにスーツという「スタイル」を変えるためには、単に「暑さから逃れる」という機能性を訴えても効果はあまりなく、衣服に関する「コード」（社会的な約束事の体系）そのものを変えていく必要があるということでしょう。西欧型のビジネススタイルが「スタンダード」だと思っている人が多いうちは、せっかくのクール・ビズも定着するには時間がかかりそうです。

(岡本慶一)



<p>つて、そのお金で仏を供養した。そのとき聞いた涅槃經の一偈のおかげで無傷無痛だった。</p>	<p>214 五大弟子と須跋陀の因縁譚。六人のうち、五人は稲の花を仏に供養したが、一人だけ稲の実がなるのを待った。五人は五大弟子となり、待った一人は釈迦涅槃のとき、やと悟った須跋陀となった。</p>	<p>234 舍利弗は婆羅門に両眼を与えるが、婆羅門はそれを捨ててしまう。</p>	<p>244 作(伊)羅鉢龍王(優鉢羅龍王?)は、頭を七つもち、その上に生えた木が、波に動く痛みで苦を受ける。</p>
<p>*なし ★注好選中8) ◆</p>	<p>*なし(☆大智度論12)(☆大蔵一覽集2) (☆私聚百因縁集1 3) (☆聖覺四十八願積11)</p>	<p>*なし (☆根本説一切有部毘奈耶雜事21)</p>	<p>*なし (☆根本説一切有部毘奈耶雜事21)</p>
<p>大經直談要註記4</p>	<p>大經直談要註記10</p>		

〔使用テキスト一覧〕

【出典】

『増一阿含經』大正新脩大蔵經2 / 『法句譬喻經』大正新修大蔵經4 / 『法華經』岩波文庫 / 『大智度論』大正新修大蔵經25 / 『出曜經』大正新修大蔵經4 / 『觀心三昧經』大正新修大蔵經15 / 『阿育王經』国訳一切經印度撰述部涅槃部 / 『釈迦譜』大正新修大蔵經50 / 『付法藏因縁傳』大正新修大蔵經51 / 『根本觀經』大正新修大蔵經50 / 『阿育王經』国訳一切經大蔵經50 / 『觀無量壽經疏』浄土宗全書2 / 『大唐西域記』白氏文集 / 『新釈漢文大系』 / 『心地觀經』大正新修大蔵經3 / 『林間録』国訳禅宗叢書1|2 / 『大蔵一覽集』昭和法寶總目錄3 / 『往生要集』日本思想大系 / 『注好撰』新日本古典文学大系 / 『私聚百因縁集』大日本仏教全書 / 『了普古今序註』日本文学論究46、47 / 『聖覺四十八願積』大正大学蔵元禄三年版本

【聖職著作】

『鎮西宗要本末口伝鈔』浄土宗全書10 / 『禪林小歌註』続群書類従19輯下 / 『大經直談要註記』浄土宗全書13 / 『小經直談要註記』浄土宗全書13 / 『当麻曼陀羅疏』浄土宗全書13 / 『五重聞書』浄土伝灯輯要・上 / 『往生拾因見聞』大正大学図書館蔵



	ろは								
10	は								
13	は								
13	は								
14	は	4						13	
16	ろろ							23	
18	は は							16 21	
19	は							16	
19	は	9							
19	は								
20	は								

7ウ	周梨槃特は物覚えが悪いので、釈迦に箒を 与えられ塵を掃くことを行とし、「守口損意 ：」の十四文字だけを覚え、羅漢の悟りを 得た	*なし (★聖覚四十八願積7) ◆	大経直談要註記 2 10
7ウ	聖徳太子は八人の人の話を聞き分けたの で、八耳の王子と呼ばれた。	*なし (★聖覚四十八願積7) ◆	大経直談要註記 10
8ウ	阿難は多聞第一の弟子で、釈迦一代の説法 を聞き持った。	*なし (★聖覚四十八願積7) ◆	大経直談要註記 10
8ウ	殺された蘇我入鹿の首が、皇極天皇のここ ろへ向かって行った。	*なし (★聖覚四十八願積8) ◆	大経直談要註記 10
8ウ	武内大臣は讒言によって筑紫で処刑される ことになるが、そっくりな身代わりが殺さ れ、その後、無実が証明された。	*なし (★聖覚四十八願積8) ◆	大経直談要註記 10
9ウ	王昭君、胡国へ赴く。	*なし (★聖覚四十八願積9) ◆	大経直談要註記 10
9ウ	年老いて熊野詣が出来なくなった奥州の老 女に、熊野権現が「道遠し…」歌を託宣す る。	*なし (★聖覚四十八願積9) ◆	大経直談要註記 10
10ウ	真如親王は、東大寺と高野山で学び、超昇 寺を建てる。靈鷲山を目指して天竺に渡る が、羅越国で客死した。	*なし (★当麻曼陀羅疏引き了普 草)	当麻曼陀羅疏 5
10ウ	周の穆王は八匹の駒に乗り、靈鷲山に釈迦 の説法を聴聞に行った。	*なし	当麻曼陀羅疏 23
10ウ	目連は釈迦の声の届く範囲を確かめようと 飛んで行くが、飛び疲れて彼が落ちたところ	*なし (☆増一阿含経29)	

74	周槃槃特は物覚えが悪いので、釈迦に箒を 与えられ塵を掃くことを行とし、「守口損意 ：」の十四文字だけを覚え、羅漢の悟りを 得た	*なし (★聖覚四十八願積7) ◆	大経直談要註記 2 10
75	聖徳太子は八人の人の話を聞き分けたの で、八耳の王子と呼ばれた。	*なし (★聖覚四十八願積7) ◆	大経直談要註記 10
84	阿難は多聞第一の弟子で、釈迦一代の説法 を聞き持った。	*なし (★聖覚四十八願積7) ◆	大経直談要註記 10
85	殺された蘇我入鹿の首が、皇極天皇のここ ろへ向かって行った。	*なし (★聖覚四十八願積8) ◆	大経直談要註記 10
86	武内大臣は讒言によって筑紫で処刑される ことになるが、そっくりな身代わりが殺さ れ、その後、無実が証明された。	*なし (★聖覚四十八願積8) ◆	大経直談要註記 10
94	王昭君、胡国へ赴く。	*なし (★聖覚四十八願積9) ◆	大経直談要註記 10
97	年老いて熊野詣が出来なくなった奥州の老 女に、熊野権現が「道遠し…」歌を託宣す る。	*なし (★聖覚四十八願積9) ◆	大経直談要註記 10
104	真如親王は、東大寺と高野山で学び、超昇 寺を建てる。霊鷲山を目指して天竺に渡る が、羅越国で客死した。	*なし (★当麻曼陀羅疏引き了普 草)	当麻曼陀羅疏 5
104	周の穆王は八匹の駒に乗り、霊鷲山に釈迦 の説法を聴聞に行った。	*なし	当麻曼陀羅疏 23
104	目連は釈迦の声の届く範囲を確かめようと 飛んで行くが、飛び疲れて彼が落ちたとこ	*なし (☆増一阿含経29)	

14ㄗ	三河入道寂照、鏡を売って食物を得る。	*なし		
14ㄘ	延昌僧正（正行僧都）の母は、髪を切つて売り、食物を得て、山上の我が子に送つた。	*なし		
15ㄗ	三人の梵士、無常を厭い、空・海・山に逃れるが、死を逃れることは出来なかつた。	法句譬喻經（1）		往生拾因見聞
16ㄗ	狸寝入りをしていた野干が「頭を切るぞ」と脅かされて驚き起きた。	出要經		
17ㄗ	世尊、比丘たちが無常をどう理解しているかを問う。	*なし		
17ㄘ	恵、。に「出る、入る」を	*なし		
18ㄗ	の、死のをる。	*なし (3)		
18ㄘ	の、生のをう。	*なし (3)		
20ㄗ	山の出。人が「子」といっているのを見てした。	*なし		27
3ㄗ	のの子、子、人となつてを出る。が、人のた、人となつてに山に上さなかつた。	*なし		
7ㄗ	は、母を得て、母の生なかつた。を見	*なし (4) 3 1	因	

97	毘瑠璃王は父波斯匿王を殺し、祇陀太子も殺した。	(☆大蔵一覽集4)	大経直談要註記 11 当麻曼陀羅疏 11
97	師資大臣は財宝・妻子を捨てて山に籠もる。その財宝を弟が狙って山中の大臣を殺そうとするが、盗賊が同情して、謀略が露顕する。	*なし	鎮西宗要本末口伝鈔
97	毘瑠璃王は舟に乗って海で死ぬ。	涅槃経二十(大般涅槃経)	
107	訶梨底母、愛児を隠されて反省し、王舎城の子供を喰うことをやめ、仏弟子となる。	訶梨底母経	大経直談要註記 24
137	提婆は、仏弟子を集めて象頭山で説法したが、舍利弗と目連に仏弟子を取り返されることがかった。	*なし	当麻曼陀羅疏 10
137	提婆は、阿闍世に頼まれ切利天の畢波羅花を取りに行くが、花守に断られて落胆し、神通力を失って、阿闍世の前に落ちた。	涅槃経(大般涅槃経 34)	
147	大施太子の如意宝珠を童宮に探しに行った蛤は、大海を吸い込んだ。	*なし	
147	儒童菩薩は、雪山に法を求めて、羅刹に喰われた。	*なし (☆心地観経 1) (☆聖覚四十八願釈 46)	大経直談要註記 16・21
147	釈迦牟尼の時、仏道修行のさい、諸天が憐れんで如意宝珠を授けた。	*なし	

ㄆㄨ	唐帝は反魂香を焚いて楊貴妃の姿を偲んだ。	*なし (☆白氏文集4) (☆聖覚四十八願積4)	大経直談要註記9
ㄆㄨ	漢王は李夫人の絵を見て故人を偲んだ。	*なし (☆白氏文集4) (☆聖覚四十八願積4)	大経直談要註記9
ㄆㄨ	吉峯家定(宗貞)は深草院の死後、山に入り遍昭僧正となった。	*なし	
ㄆㄨ	積迦入滅の様子。	*なし(☆涅槃經) (☆積迦譜4) (☆大蔵一覽集1)	大経直談要註記6 当麻曼陀羅疏2
ㄆㄨ	帝釈天は忉利天の善見城に在るが、常に阿修羅と戦っている。	*なし (☆観仏三昧經1)	
ㄆㄨ	積迦は提婆に石を投げられ怪我をし、阿闍世王に命を狙われ、央崛摩羅には指を切られそうになった。	*なし (☆大唐西域記6) (☆大蔵一覽集7) (☆注好選中4)	大経直談要註記15
ㄆㄨ	阿闍世は生まれる前に相人から「父母を殺す子だ」といわれ、未生怨という名をもつた。	*なし (★観無量寿經疏2)	当麻曼陀羅疏10
ㄆㄨ	俱那羅太子のこと。父阿育王の病を治すため両眼をくり抜く。	*なし (☆積迦譜5) (☆付法蔵因縁伝4) (☆阿育王經4) (☆大唐西域記3)	五重聞書
ㄆㄨ	阿育王、八万四千の后を殺すが、その後、仏教に帰依して、八万四千塔を立てる。	*なし (☆阿育王經)	大経直談要註記20 当麻曼陀羅疏45

19	上陽人は、十六歳のとき上陽宮に幽閉され、六十歳になった。	*なし (★白氏文集3)	大経直談要註記9 当麻曼陀羅疏11
20	夜塚鬪體のこと。元暁は、野宿のおりに水を飲んで甘露のようだと喜んで飲んだが、翌朝、それが鬪體にたまつた水と知つて、具合を悪くする。	林間録(上)	大経直談要註記21
20	客孟弓影のこと。盃に映つた弓の影を、小さな蛇だと思ひ、それを飲み込んだと勘違いした人の話。	林間録(上)	大経直談要註記21
21	玉泉坊のこと。比叡山の玉泉坊は豪奢な坊に暮らしていたが、主の没後、坊は荒れてる。んなだところ、坊に人の没後、坊は荒れて歌	*なし (★注)	禅林小歌注 当麻曼陀羅疏18
1	になつたので、そのままに、を	*なし (十4)	大経直談要註記9
2	のこと。にり込のをはらすた、を思うに、はりがのらるるをす。	*なし	
3	とと思ひ、つていたとき、吒、をてくして	経(十六大)	大経直談要註記24
4	だ。はにのをんでれをしん	*なし (注上55)	当麻曼陀羅疏29

# 『厭穢欣浄集』所収説話出典一覽

※1 底本は龍谷大学大宮図書館蔵本  
 ※2 出典欄の記号：無印―本文に記載された出典名  
 ☆―直接の出典と認められる ☆―参考にした可能性がある  
 ◆―高橋伸幸指摘 ●―近本謙介指摘

巻		説話内容	出典	聖諭著作
上	下			
24	19	草提希夫人、幽閉された頻婆沙羅王を救うため、身に薬を塗り瓔珞に甘露を入れて、牢に入る。それを知った阿闍世王が母を殺そうとするが、普婆大臣と月光大臣が諫め、幽閉に留める。	*なし (★観無量寿経疏2)	大経直談要註記11 当麻曼陀羅疏10・11
34		地獄の様相	往生要集(上)	小経直談要註記4
74		舍利弗と目連の神通力でも、無間地獄の火は消せなかった。	毘那(耶)律(根本説一切有部毘奈耶雜事18)	大経直談要註記9
114		北天竺の堅惠菩薩、徳尸羅の海辺で五百の餓鬼に会い、「弥陀如来摂取不捨」の一文を授け、餓鬼たちを救う。	*なし	
134		唐の国の人の母、馬に生まれ変わる。	*なし (★大蔵一覽集4)	当麻曼陀羅疏13
154		修羅道の因縁。阿修羅王の娘、舎脂女を帝釈天が略奪したので、阿修羅王が反撃した。	*なし (☆観仏三昧経1)	
194		老いて醜くなった色好みの清少納言のこと	*なし	



（付記）

貴重な資料の閲覧をご許可くださった龍谷大学大宮図書館と大正大学図書館に、深謝申し上げます。近本謙介、高橋伸幸両氏の口頭発表については、近本氏ご本人と福田晃氏にご教示をいただいた。心より感謝申し上げます。

〔注〕

- (1) 「人間文化研究年報」二七号、二〇〇四年三月
- (2) 「国文」一〇二号、二〇〇五年一月
- (3) 前掲注2
- (4) 水野弥穂子『林間録』に關する一仮説―正法眼蔵との關連において―（『宗学研究』二三号、一九八〇年三月）
- (5) 以下、『厭穢欣浄集』本文は龍谷大学大宮図書館蔵本に拠る。清濁は原文のままとし、句読点を私に付した。
- (6) 高橋伸幸「講經の中の説話」（『中世文学』三六号・一九九二年六月）
- (7) 本文は『源信』日本思想大系6に拠った。
- (8) 上野麻美「当麻曼陀羅疏」所収説話出典考」（『人間文化論叢』四卷、二〇〇二年三月）
- (9) 近本謙介の口頭発表「浄土宗談義書における説話 西普聖聡作『厭穢欣浄集』をめぐる」（『説話文学会平成二年度大会・平成二年六月』と高橋伸幸の口頭発表「大谷大学図書館蔵『厭穢欣浄集』下巻執筆上の典據に關する報告」（『仏教文学会・説話伝承学会合同例会・平成二年九月』。大変残念なことに、高橋はすでに故人となり、発表からすでに十数年が経つが、両発表とも活字化されていないゆえ、両氏の発表資料をもとに指摘箇所を示した。
- (10) 成篁堂文庫蔵。
- (11) 真福寺善本叢刊1『真福寺古目錄集』臨川書店、一九九九年十二月
- (12) 本文は浄土宗全書第十卷に拠り、読み下し文に直した。
- (13) 山崎誠「天台談所と和漢朗詠集」（『中世文学』三三号、一九八八年六月）
- (14) 前掲注9
- (15) 『厭穢欣浄集』について」（『聖聰上人典籍研究』山喜坊仏書林、一九八九年十二月）
- (16) 前掲注9
- (17) 本文は浄土宗全書第十三卷に拠り、読み下し文に直した。
- (18) 前掲注9
- (19) 「東寺観智院本「注好選」管見―今昔研究の視角から」（『国語国文』五二卷二号、一九八三年二月）
- (20) 前掲注1

とを比較して、気付く点が二つある。

まず、第一は、推定される出典には経典の注釈書や抜き書き集などが多いが、本文に記された出典にはそれらが全く含まれないという点である。注釈書や抜き書き集などは、宗学を研究する学僧の間で享受されるもので、在家の信者の知るような書ではないと思われる。三部作が出典を明記するのは、それらが学僧向けの書であるため、研究の一助とすべく出典を明らかにする必要があるためと推測される。一方、『厭穢欣淨集』の読者である在家信者にはそのような必要はなく、むしろ読者に馴染みの薄い難しげな書名を示すことを、聖聡は敢えて避けたと考えられる。

さて、第二は、本文に記された出典の多くが経典だという点である。説話部分に限らず、『厭穢欣淨集』全体を見渡しても、この傾向は顕著である。これを第一点での結論から逆に推せば、それらの経典が在家信者に親しいものであったことになる。ところが、なかには『出要経』など当時の享受の様相がつかめない経典も含まれるうえ、挙げられた各経典を在家信者がどの程度知っていたかは不明である。むしろ、多くは彼らが実際に紐解いたこともない経典だったと想像される。しかし、たとえ在家信者が全く知らない経典であっても、『経典』を出典とするところに説得力があったのではなからうか。

以上、『厭穢欣淨集』所収説話の出典について私見を述べた。本稿では、聖聡の全著作内部に見られる典籍に限定して出典の推定を行ったため、まだ出典不明のままに残されたものもある。それらのいくつかについては、拙稿<sup>(20)</sup>に紹介した同類話を詰めていくことで明らかになると予測されるが、これは今後の課題としたい。

として単独にあつたものを聖聡が引用したと思しい。

## 7 注好選

『注好選』は平安末期成立の説話集で、『今昔物語集』や『源平盛衰記』のほか『法華懺法私』『説教才学抄』などの仏書にも引用されている。

『厭穢欣浄集』が『注好選』を引くことは、すでに高橋伸幸が指摘している。<sup>(18)</sup> 聖聡は本書を三部作のほか、『往生拾因見聞』にも引いている。『注好選』は現在のところ編者未詳の書であるが、聖聡は『大経直談要註』巻四で「注好選の中に云く〈弘法大師作三卷書也〉」と示しており、本書を空海の著作であると解していたようだ。

『注好選』は、聖聡の師聖岡が『二蔵義見聞』『伝通記糅鈔』で引用しており、聖聡は聖岡の影響でこの書を用いたと考えられる。『注好選』は、真福寺蔵『大福田寺目録』に挙がる、説教に使われたと思しき一群の書のなかにその名が見える。今野達が指摘することく、<sup>(19)</sup> 法然門下だったとされる聖覚、『私聚百因縁集』著者住信、そして聖岡、聖聡と、いずれも浄土宗の談義唱導と深く関わった人物が本書を享受している点に注意される。

## IV おわりに

以上、『厭穢欣浄集』所収話の出典について概要を述べた。本文に明記されている出典と、推定による出典

中する引用部分を指摘した。<sup>(16)</sup> 両氏の指摘によってほぼ尽くされているが、卷中一丁表「王昭君説話」、四丁裏「楊貴妃説話」、四丁裏「李夫人説話」なども、これを出典とする可能性があることを加えておきたい。

『聖覚四十八願釈』は、『無量寿経』に説く阿弥陀仏の四十八誓願を注釈した書である。聖覚作を疑うむきもあるが、聖聡は『当麻曼陀羅疏』で本書を「聖覚四十八願抄」と呼び、『大経直談要註記』卷八で「聖覚法印四十八願釈」とすることから、聖聡が本書を安居院聖覚の作と理解していたことが確認できる。聖聡は『大経直談要註記』卷九から卷十六にわたって本書を随所に引用しており、彼が重要視した書のひとつである。聖覚は天台宗安居院流の僧であるが、『四十八巻伝』など法然伝のほとんどが彼を法然の門下として扱い、浄土宗では聖覚を宗門の人とみなしていた。聖聡も『大経直談要註記』卷八に「法印（聖覚）は上人（法然）面受の上足也。所積定めて、正伝あるべし」とし、<sup>(17)</sup> 聖覚を法然の直弟子と認め、その発言を重んじている。聖聡にとつて、『聖覚四十八願釈』は宗門の先人の著作という点で、重要な書であつたとともに、説話を豊富に含む点も、談義注釈を役とする立場にあつて興味深い書であつたらう。

## 6 了誉草

『厭穢欣浄集』卷下十丁表に載る「真如親王説話」は、同じ話が『当麻曼陀羅疏』卷五にもみえ、そこでは「了誉草」と出典が記されている。『当麻曼陀羅疏』には「了誉草」と出典を明記した割り注をもつ説話が三話あるが、そこにいう「了誉草」は特定の書名をいうのではなく、「了誉聖岡作の説草」の意であると思われる。説草とは説教の手控えをいい、その性格から原初形態のまま保存されている例は少なく、『当麻曼陀羅疏』が引く「了誉草」に關しても、現在知られる聖岡の著作にはこれらを取めたものはない。それぞれ「了誉草」

僧侶が学ぶ仏書を内典と呼ぶのに対して、『白氏文集』は外典に分類されるものだが、こうした外典の教育も学僧教育の場である談義所で、教育の一つとして行われていたらしい。たとえば、こうした外典の教育がなされていた例として、天台宗の談義所で『和漢朗詠集』の講義があったことが知られている。<sup>(13)</sup>

#### 4 了誉古今序注

本書は、了誉聖罔が著した『古今和歌集』の序の注釈書で、多くの興味深い説話を含むことで知られる。聖罔は、聖聡が常陸の談義所で師事した浄土僧である。前述の『白氏文集』同様、こうした詩歌の教育が談義所で行われていたことが推測できよう。

『厭穢欣浄集』卷上二二丁裏の「玉泉坊説話」が本書を出典とすることは、すでに近本謙介が口頭発表にて指摘している。<sup>(14)</sup>『厭穢欣浄集』の本話所載部の末尾に「此事ヲ古今ノ序ニ歌ノ道ニハ鬼神モ和キ心ヲトラカス中ニ鬼ノ正ク歌心ニトラケル証拠ニソナフ」と記し、古今集序との関連を説明している点から考えても、『了誉古今序注』を出典とすると断定できる。

また、聖聡は同じ「玉泉坊説話」を『当麻曼陀羅疏』卷十八でも引用している。そこでは出典を示していないものの、同書卷十一の「富士山異名由来譚」の出典を「古今序註了誉集」と明示しているため、卷十八所収の「玉泉坊説話」も同じく『了誉古今序注』を出典とすると断定してよからう。さらに、聖聡は『禅林小歌註』でも「玉泉坊説話」を引用しており、本話は彼が大変好んだ話だったようだ。

#### 5 聖覚四十八願釈

『厭穢欣浄集』が『聖覚四十八願釈』を引くことは、最初に永井隆正が一部を指摘し、高橋伸幸が下巻に集

いるが、善導の『観無量寿経疏』を出典とすると考えられる。

## 2 大蔵一覽集

『大蔵一覽集』は大蔵経の要文抜書を集成した書で、説話を豊富に含む。本書には応永十年刊の五山版が存在することから、<sup>(10)</sup> ちょうど聖聡の時代に流布したことが推測される。また、真福寺蔵『大福田寺目録』（文和五年奥書）<sup>(11)</sup> のうち、『言泉集』や『古事談』など、唱導に用いたと思われる一群の書名のなかに、『大蔵一覽集』の名が見え、その使われ方が伺える。聖聡は『小経直談要註記』『当麻曼陀羅疏』『大経直談要註記』でも本書から説話を引用しており、説話の取材源として活用していたようだ。

聖聡の住した関東の談義所に、どれほどの書籍の備えがあったかわからないが、地方の学問寺にあって『大蔵一覽集』のような説話を満載したコンパクト版は、重宝な書物であったろう。

## 3 白氏文集

『厭穢欣浄集』には『白氏文集』に取材したと推定される説話が五話ある。『厭穢欣浄集』下巻八丁裏には、「白楽天ノ言ニモ」として、『白氏文集』巻四所収の新楽府のひとつ「天可度」に依拠した「天ヲモハカリツヘシ、地ヲモハカリツヘシ。難レ計人ノ心也。李義符力咲ノ中ニツルキ有リテ人ヲ害スト矣」という一節を記している。この他、聖聡は『大経直談要註記』巻四、『往生拾因見聞』（大正大学蔵）にも白居易の詩を引いている。また、聖聡は『鎮西宗要本末口伝鈔』で、『白氏文集』の巻立てについて「此の例有り。文集の第一、第二を古楽附と名けるが如し。第一をば上巻と云ひ、第二をば下巻と云ふ。又第三、第四をば新楽府と云ふ。而に三、四の巻をば新楽府上下と云也」<sup>(12)</sup>と記しており、本書が聖聡のよく知るものであったことが伺えよう。

### Ⅲ 推定される出典

『厭穢欣浄集』所収の全説話六十七話のうち、五十四話には出典が示されておらず、本文からは説話の取材源を探ることはできない。しかし、これらの説話と同じ話を、聖聡の他著作では出典を明記して引用している場合が多く、『厭穢欣浄集』所収話の出典を推定することが可能である。『厭穢欣浄集』所収説話出典一覧」の出典欄で（）内に記した典籍名は、上述の方法で推測した出典である。出典の記載がない説話のうち、すでに高橋伸幸、近本謙介<sup>(9)</sup>によって出典が指摘されているものについては、該当箇所を一覧に記号◆●で示した。出典と推定される典籍のうち、☆が付いているものは、本文と原典の距離があるゆえ、直接の出典とは言い難いが、聖聡が他の著作で引用している書籍ゆえ、参考にした可能性があるものとして挙げた。また、★を付けたものは、内容や字句の類似から、直接の引用であると断定可能な典籍である。以下、直接の出典と断定される典籍について概要を述べよう。

#### 1 観無量寿経疏

『観無量寿経』については慧遠の『観無量寿経義疏』や吉蔵の『観無量寿経義疏』、法聰の『釈観無量寿仏経記』など多くの注釈書が著されたが、日本の浄土宗においては善導の『観無量寿経疏』が、法然によって浄土宗義の綱格とされて以来、最も重んじられた。聖聡も『当麻曼陀羅疏』で本経を多用している。『厭穢欣浄集』巻上二丁表「韋提希夫人説話」と巻中六丁裏「阿闍世王出生事情説話」は、かなりの改変を加えては



「三人の話」としたことになる。これはおそらく、『往生要集』巻上に「法句譬喻經の偈に云ふが如し。空にもあらず、海の中にもあらず、山石の間に入るにもあらず、地の方処として、脱れ止まりて死を受けざるものあることなしと。空に騰り、海に入り、巖に隠れし三人の因縁は、經に広く説くが如し」と記されることに添ったものであろう。

さて、『出曜經』は竺<sub>二</sub>仏念<sub>一</sub>(三五〇〜四一七年)の訳で、内容は仏教の教訓的偈とその注釈的説話とから成る。『出曜經』は『法句譬喻經』と重なる内容が多く、両者は兄弟関係にある。また、聖聰は『大經直談要註記』巻二三でも『出曜經』から説話を引用している。

両經とも比喻因縁譚を満載した説話の宝库ともいうべき經典であり、談義僧聖聰にとつては説話の取材源として重宝した經典だったのではなからうか。

## 7 出要經

『仏書解説大事典』は、『出要經』を散佚經とする。『出三藏記集』(五一〇〜一八)巻四に「失訳雜經」として「出要經二十卷」と記される。『厭穢欣淨集』のいう「出要經」がこれに当たるか否かは、はやくに散佚した經典ゆえ確認は難しい。かりに典關係を確認できたとしても、聖聰が直接原典に当たったとは考えにくい。聖聰は、別の文献から孫引きすることしばしば行っているゆえ、同様のかたちでの引用である可能性が考えられる。

なお、『厭穢欣淨集』巻中十六丁裏で「出要經云」として引かれる野干の話は、『大智度論』卷十四・『摩訶止觀』卷四上・『止觀輔行伝弘決』卷四―二他にも載るが、「出要經云」と出典を示すものはない。

## 5 訶梨帝母經

『厭穢欣淨集』は卷中十丁裏に、「訶梨帝母經云」として鬼子母説話を引く。『訶梨帝母經』は空海の『三十帖策子』に収められ平安期に伝来した經典とされる。『仏書解説大事典』（大東出版社）に拠れば、「訶梨帝母經」と称するものに、『訶梨帝母真言經』『訶梨帝母真言法』『大葉叉女歡喜母并愛子成就法』があるが、いずれも『厭穢欣淨集』卷中十丁裏にみえる鬼子母説話の直接の出典とは言い難い。内容の類似からいつて『鬼子母經』や『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷三二に見える話に近く、訶梨帝母の子の名を「愛兒」とする点からいえば、後者が最も近い。またこの他、『貞元録』卷二六には『訶梨底母因縁經』と称する經典名の記載があるが、これは『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷三一を抄出したものである。比較的近い内容をもつこれらの文献も、聖聰のいう「訶梨帝母經」とは距離があると言わざるを得ず、現在のところ特定できない。聖聰が原典に改変を加えた可能性が高いが、そうした場合、聖聰は出典を示さない傾向があり、本例はそれに添わないことになる。あるいは偽經の類に拠った可能性も視野に入れておくべきだろう。

## 6 法句譬喻經と出曜經

『法句譬喻經』（二一九〇〜三〇六年成立）は、法炬、法立の共訳で、法句の一人々に比喻因縁譚を付した經典である。『厭穢欣淨集』中卷十五丁裏では、本經から「三人の梵土の話」を引くが、これは『法句譬喻經』原典によったものではないようだ。『法句譬喻經』原典では三人ではなく「四人」の話になっている。一方、聖聰は『往生拾因見聞』でも同じ話を引くが、ここでは原典と同様「四人」と記しており、原典を見ているらしい。つまり、聖聰は『法句譬喻經』原典では「四人の話」になっているのを知りつつ、『厭穢欣淨集』では

僧である聖聡が、禅僧の間で流布した書物から、敢えてこの一節と説話を引用したのは、話の主人公元暁を、聖聡が『浄土三國仏祖伝集』で浄土宗の祖の一人として挙げ、崇拜していることと関係してしよう。

### 3 往生要集

そもそも『厭穢欣浄集』は『往生要集』の「大文第一厭離穢土」「大文第二欣求浄土」を解説した注釈書であるため、本体である『往生要集』から説話が引用されるのは当然といえる。

いうまでもなく源信の『往生要集』は、日本浄土思想の基盤を成した著名な典籍である。浄土宗の宗祖法然は、『往生要集』に関して『往生要集釈』ほか合わせて四つの注釈書を著している。その流れを汲む浄土僧聖聡にとつても、本書は宗学を修めるうえで欠かせない基本典籍であり、『厭穢欣浄集』は本書に関する研究成果の一つである。聖聡は、『小経直談要註記』巻七・巻八、『大経直談要註記』巻二一、『当麻曼陀羅疏』巻二十でも『往生要集』から説話を引いており、本書を重んじて用いたことが確認できる。

### 4 根本説一切有部毘奈耶雜事

根本説一切有部派の比丘の戒律二百四十九条について注釈した『根本説一切有部毘奈耶』の雜事部をいう。八世紀初めに唐の義浄によつて訳された。戒律の注釈書ゆえ律宗の章疏とされる。聖聡の属した浄土宗では、『根本説一切有部毘奈耶雜事』を特別に重んじたわけではないようだが、随所に説話を挿入する点が、聖聡の志向に合ったと思われる。聖聡は『小経直談要註記』巻二で本書と同種の戒律注釈書である『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』から迦葉説話を引いている。

に明記されている各出典の概要を簡略に述べよう。

## 1 涅槃經

『涅槃經』には数種あるが、本文中に示された卷数から判断して、聖聡が用いたのは曇無讖訳『大般涅槃經』（四十卷・北本）と推定される。聖聡は『厭穢欣浄集』の他、『大経直談要註記』『小経直談要註記』『当麻曼陀羅疏』でも『涅槃經』を引くが、これらも本文中に示された卷数が一致する点から、曇無讖訳本に拠ると見て誤りない。

## 2 林間録

『林間録』は宋の覚範慧洪の随筆で、大観元年（一一〇七）に刊行され、康歴二年（二三八〇）の五山版がある。『宝慶記』によると、天童如浄が道元に一読を薦めた書とされ、『正法眼蔵』にも引用があり、禅宗で広く読まれた書であった。<sup>(4)</sup>

『厭穢欣浄集』上巻二〇丁表では、「夜塚ノ髑髏、元ト是水。客盃ノ弓影ハ干蛇ニ非ズ。此中ニ生滅容ルル処無シ。遺篇家妻科ナルヲ咲ヒ取ル」と、『林間録』上巻に載る一節を引き、その後、「夜塚ノ髑髏」「客盃ノ弓影」を解説する二つの説話を付す。「夜塚ノ髑髏」は新羅僧元暁の逸話を語るものだが、この話は『林間録』にあり、『厭穢欣浄集』にみえる説話もここから引いたとみてよからう。ただし、「客盃ノ弓影」についての説話は『林間録』にはないゆえ、この部分については、『晋書』四三巻など他の資料を参照したと思われる。

聖聡は、この一節を『大経直談要註記』巻二二でも引いており、これを好んで使った様子が伺える。浄土

の割合を数値で示すと、『大経直談要註記』九割、『小経直談要註記』十割、『当麻曼陀羅疏』六割となる。これに対して『厭穢欣浄集』は、出典名を示さずに説話を引用する場合は圧倒的に多く、出典名を明記している割合は二割と、三部作に比して極端に低い。

こうした差が生じる理由については、すでに拙稿<sup>③</sup>で私見を述べた。そのさい、要因の一つとして、三部作の対象読者が学僧であるのに対し、『厭穢欣浄集』のそれは在家信者であることをあげ、読者層の違いが出典記載の有無の差を生んだと考察した。前稿では紙幅の都合上、詳しい考察の内容を述べることができなかつたゆえ、本稿にてその補足を試みたいと思う。

## II 明記された出典

最初に、後掲の『厭穢欣浄集』所収説話出典一覧<sup>④</sup>について説明しよう。出典欄には、本文に出典が明記されている場合はそれを、出典の記載がない場合は「\*なし」とし、( )内に推定される出典を記した。

前述のごとく、『厭穢欣浄集』では、説話の出典を示さずに引用する場合が多いが、全六十七話のうち、十三話については本文に出典が示されている。そのうちわけは、涅槃経<sup>⑤</sup>一五、林間録<sup>⑥</sup>一二、往生要集<sup>⑦</sup>一、根本説一切有部毘奈耶雜事<sup>⑧</sup>一、訶梨底母経<sup>⑨</sup>一、法句譬喻経<sup>⑩</sup>一、出要経<sup>⑪</sup>一、出曜経<sup>⑫</sup>一となっている。『往生要集』が一件みられるのは、『厭穢欣浄集』がその注釈書である点からいって当然といえる。最多の『涅槃経』は、在家の信者にもよく知られた經典であったため、その名が示されたのだと考えられる。以下、本文

# 『厭穢欣浄集』所収説話出典考

上野 麻美

## I はじめに

『厭穢欣浄集』(応永二八年成立)は室町期浄土宗の学僧西普聖聡(一三六六〜一四四〇)の著作である。本書は『往生要集』の「大文第一厭離穢土」「大文第二欣求浄土」について、初学者向けに説話を多用し、平易に解説した書である。本書所収の説話については、拙稿『厭穢欣浄集』所収説話一覧―出典・関係説話―<sup>(1)</sup>において所収全話を紹介し、『厭穢欣浄集』の読者と説話<sup>(2)</sup>においては性阿という人物を中心に考察を試みた。本稿は一連の研究に続き、所収説話の出典に注目し、聖聡の学問と説話享受について考察を深めようとするものである。

聖聡には、『厭穢欣浄集』と同様に説話を多用した著作として『大経直談要註記』『小経直談要註記』『当麻曼陀羅疏』という代表三部作がある。三部作においては、本文に説話の出典が示されている場合が多く、そ